

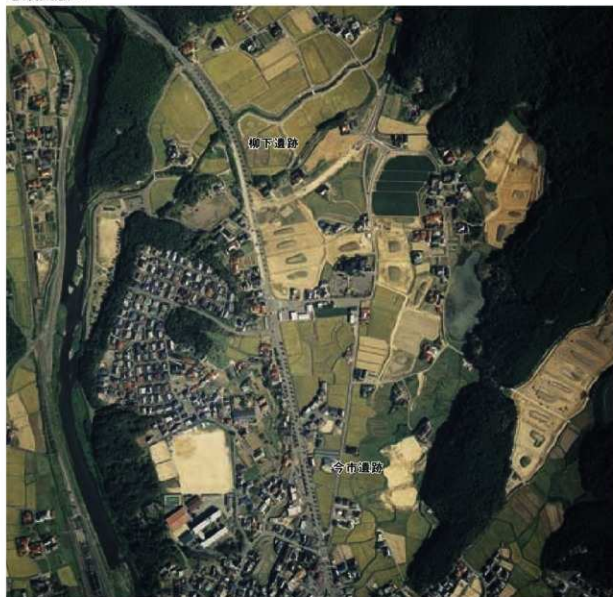
やなぎ ^{した} 柳 下 遺 跡
いま ^{いち} 今 市 遺 跡

2007

財団法人 山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター



遺跡上空から厚狭盆地を望む（北東から）



遺跡遠景（上が北）

序

厚狭川のつくりだした厚狭盆地及びその周辺では、長門部最古の前方後円墳として知られる長光寺山古墳をはじめ、古くから人々が生活を営んできたことをうかがわせる遺跡が多く分布しています。しかし、今回の調査を行った厚狭川左岸の地域は、これまでまとまった調査があまり行われていませんでした。

本書は、経営体育成基盤整備事業石東・不動寺原地区工事に先立ち、山陽小野田市大字厚狭地内に所在する柳下遺跡・今市遺跡について、山口県農林部及び山口県教育委員会から委託を受けて山口県ひとづくり財団が実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

調査の結果、柳下遺跡からは、28棟の掘立柱建物跡や、お墓と見られる遺構数基、生活区画の区分けのための溝状遺構などが確認され、中世を中心とする集落跡の存在が明らかになりました。また、それらに伴う土師器や瓦質土器、陶磁器などの遺物も出土しました。今市遺跡では、近世の土坑や井戸などが確認されるとともに、陶磁器などの遺物が出土しました。弥生土器も出土しており、各時代における生活の様子を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

本書が、文化財保護に対する理解をより深め、教育並びに学術研究としての資料、また、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

最後に、発掘調査の実施ならびに報告書作成に当たってご協力をいただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 山口県ひとづくり財団
理事長 村岡正義

例 言

- 1 本書は、平成18年度に実施した、山口県山陽小野田市大字厚狹に所在する柳下遺跡・今市遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、経営体育成基盤事業石東・不動寺原地区工事に伴い、財団法人山口県ひとづくり財団が、山口県教育委員会並びに山口県農林部の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体 財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター
調査担当 文化財専門員 城 島 史 朗
文化財専門員 上土井 宏 典
文化財専門員 河 崎 浩 司
文化財専門員 安 村 隆 博
調 査 員 藤 原 彰 久
文化財専門員 岩 崎 仁 志（山口県教育委員会社会教育・文化財課）
- 4 調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県農林部農村整備課、山口県美祿農林事務所並びに地元関係各位から、協力・援助を得た。
- 5 本書の図1は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「厚狹」を複製使用した。図2は、山陽小野田市教育委員会提供の地図を元に作成した。図3・45は山口県美祿農林事務所提供の原因を元に作成した。
- 6 本書に使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 7 出土遺物の各鑑定は、下記の方々に依頼した。記して謝意を表す。

磁器鑑定 山口県立萩美術館・浦上記念館 副館長 上田 秀夫氏
石材鑑定 山口県立山口博物館 主査 亀谷 敦氏（鑑定方法は表面観察による）
- 8 本書に使用した土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 本書で使用した遺構略号は次の通りである。

SB：掘立柱建物跡 SA：欄列 SD：溝状遺構 SK：土坑
SE：井戸 SP：柱穴 SX：不明遺構
- 11 本書の作成及び執筆は、調査担当者が共同で行い、編集は城島・上土井が行った。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	4
III	柳下遺跡調査の成果	7
1	調査の方法と経過	7
2	遺構	12
3	遺物	44
4	まとめ	57
IV	今市遺跡調査の成果	61
1	調査の方法と経過	61
2	遺構	67
3	遺物	77
4	まとめ	91
付編1	柳下遺跡・今市遺跡の放射性炭素年代測定	93
付編2	柳下遺跡および今市遺跡におけるリン酸・カルシウム分析	96
付編3	柳下遺跡における花粉・寄生虫卵分析	99
付編4	今市遺跡における花粉・寄生虫卵分析	105

挿図目次

図1	遺跡の位置と周辺の主な遺跡	1	図2	遺跡の位置と周辺の地形	3
柳下遺跡					
図3	調査区設定図	7	図25	SK100・102・104・106実測図	32
図4	遺構配置図	9	図26	SK107・112・116・120・122・130 実測図	33
図5	調査区壁面土層断面図	11	図27	SK124・126実測図	34
図6	SB1実測図	12	図28	SK201・202・205・208実測図	35
図7	SB4・6実測図	13	図29	埋塞1、SX7実測図	36
図8	SB8実測図	14	図30	SP29・92・259・326実測図	37
図9	SB9・10実測図	15	図31	SP434・452・453実測図	38
図10	SB11・13実測図	16	図32	SP495・516・781・951実測図	39
図11	SB12実測図	17	図33	SP1057・1129・1156・1405実測図	40
図12	SB14・15実測図	18	図34	SP1421・1423・1470・1473・1501 1503実測図	41
図13	SB16・17実測図	19	図35	出土土器実測図①	45
図14	SB18・20実測図	20	図36	出土土器実測図②	47
図15	SB19・21・22実測図	21	図37	出土土器実測図③	48
図16	SB23・24・25実測図	22	図38	出土土器実測図④	49
図17	SB26、SA1実測図	23	図39	出土土器実測図⑤	51
図18	SD1・2・7実測図	24	図40	出土土器実測図⑥	52
図19	SD8実測図	25	図41	出土石器製品、金属製品実測図	53
図20	SK1実測図	26	図42	掘立柱建物群変遷図	58
図21	SK2・3・144実測図	27	図43	杯の類型	59
図22	SK4実測図	28	図44	銅・鉄C	59
図23	SK5実測図	29			
図24	SK7・8・9・10実測図	30			
今市遺跡					
図45	調査区設定図	61	図57	包含層1土器溜り実測図	76
図46	1・2地区遺構配置図	63	図58	包含層3・4土層断面図、 包含層3土器溜り実測図	76
図47	3地区遺構配置図	65	図59	出土土器実測図①	78
図48	2地区西壁土層断面図	66	図60	出土土器実測図②	79
図49	SB1・2実測図	67	図61	出土土器実測図③	80
図50	SK1・2・3実測図	69	図62	出土土器実測図④	82
図51	SK4・5実測図	70	図63	出土土器実測図⑤	83
図52	SK6実測図	71	図64	出土土器実測図⑥	85
図53	SK7・8・9実測図	72	図65	出土石器、木製品、金属製品 実測図	86
図54	SK16・17・18実測図	73			
図55	SE1実測図	75			
図56	包含層1土層断面図	75			

表目次

柳下遺跡

表1	掘立柱建物跡・欄列一覽	42
表2	溝状遺構一覽	42
表3	土坑一覽	43

今市遺跡

表7	土坑一覽	74
表8	土器觀察一覽	87

表4	土器觀察一覽	54
表5	石製品觀察一覽	56
表6	金屬製品觀察一覽	56

表9	石器觀察一覽	90
表10	金屬製品觀察一覽	90

図版目次

柳下遺跡

図版1	調査区全景
図版2	1地区全景 2地区全景
図版3	SD1・2と掘立柱建物群 SB1と周辺遺構
図版4	SB1完掘状況 SP6柱痕検出状況 SP7柱痕検出状況 SD1完掘状況 SD2完掘状況 SD7検出状況 SD8完掘状況
図版5	SK1遺物出土状況 SK1完掘状況 SK2遺物出土状況 SK2完掘状況 SK3遺物出土状況 SK3完掘状況
図版6	SK4遺物出土状況 SK4完掘状況 SK5遺物出土状況 SK5完掘状況 SK8検出状況 SK9検出状況 SK10土層断面 SK10完掘状況
図版7	SK102完掘状況 SK107遺物出土状況 SK120土層断面 SK120遺物出土状況 SK122遺物出土状況 SK124遺物出土状況 SK126遺物出土状況 SK130遺物出土状況
図版8	SK202遺物出土状況① SK202遺物出土状況② 埋甕1半裁状況 埋甕1出土状況 SX7検出状況 SX7遺物出土状況

今市遺跡

図版17	調査区全景
図版18	1地区全景 2地区全景
図版19	3地区全景 SB2完掘状況
図版20	SK1遺物出土状況 SK2遺物出土状況 SK3遺物出土状況 SB2完掘状況 SK4・5検出状況 SK6遺物出土状況 SK7遺物出土状況 SK8遺物出土状況 SK16検出状況
図版21	SK17検出状況 SK18検出状況 SE1出土状況① SE1出土状況②

図版9	SP29遺物出土状況 SP259遺物出土状況 SP326遺物出土状況 SP434遺物出土状況 SP452遺物出土状況 SP495遺物出土状況 SP516遺物出土状況 SP781遺物出土状況 SP849遺物出土状況 SP1057遺物出土状況
図版10	SP1129遺物出土状況 SP1156遺物出土状況 SP1405遺物出土状況 SP1421遺物出土状況 SP1423遺物出土状況 SP1470遺物出土状況 SP1501遺物出土状況 SP1503遺物出土状況
図版11	出土土器①
図版12	出土土器②
図版13	出土土器③
図版14	出土土器④
図版15	出土土器⑤
図版16	出土土器⑥、石製品、金屬製品、 木製品

図版22	包含層1土器溜り出土状況①
図版23	包含層1土器溜り出土状況②
図版24	包含層1土器溜り出土状況③
図版25	包含層3土器溜り出土状況
図版26	出土土器①
図版27	出土土器②
図版28	出土土器③
図版29	出土土器④
図版30	出土土器⑤
図版31	出土土器⑥、石器、木製品、 金屬製品

I 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

柳下遺跡、今市遺跡は、いずれも山陽小野田市大字厚狭に所在し、南流して周防灘に至る厚狭川の中流域に広がる厚狭盆地の北東部に位置している。山陽小野田市は、西を下関市、北を美祿市、東を宇部市に接し、南は瀬戸内海に面している。厚狭盆地の東には三条山(171m)、西にはやや離れて石山(210m)、南には日峰山(148m)、北には松岳山(324m)が聳え、山々の麓は、緩やかに起伏する二段の段丘面を擁して、厚狭盆地を囲んでいる。厚狭盆地のやや東側を貫流する厚狭川は、美祿市於福の五ヶ峠に源を発し、石東川をはじめ多くの支流を集め周防灘に流れ込む、全長51.2kmの二級河川である。旧山陽町内の約70%がこの流域に含まれている。

柳下遺跡(1)は、中世を中心とする集落遺跡で、すぐ北側を流れる石東川の南岸段丘上に位置し、北西側に緩やかに下がる平坦な地形に展開している。今市遺跡(2)は、近世を中心とする集落遺跡で、柳下遺跡の約500m南に位置している。標高約50mの小丘陵の北西麓に立地し、丘陵先端部の緩やかな斜面上に集落が形成されている。

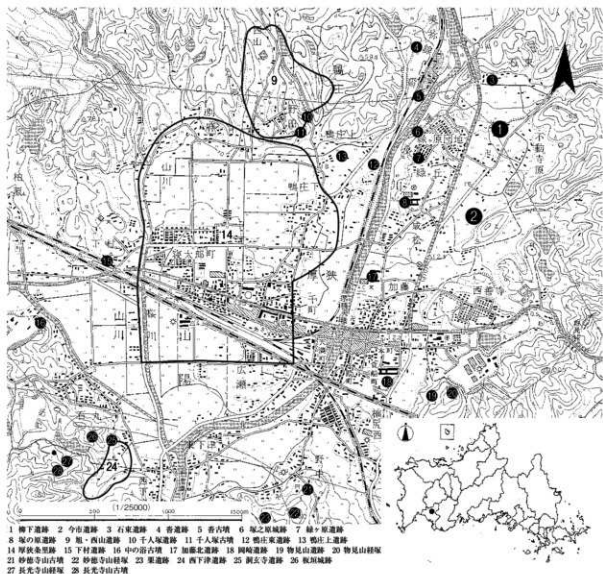


図1 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

2 歴史的環境

この地域および周辺では、古くから人々が生活していた痕跡を認めることができる。盆地北部の丘陵性台地上に立地する旭・西山遺跡（9）、南部の岡崎遺跡（18）、大字郡に立地する鳥越遺跡から出土したわずかな土器片や石斧の資料からは、縄文時代にまで歴史をさかのぼることができる。

弥生時代になると、水稲農耕の開始とともに、水利を求めて低地に集落が展開されるようになる。標高8mの水田面の下約1mに遺物包含層の存在が認められる野田遺跡からは、弥生時代前期末に位置づけられる土器が出土している。鴨庄上遺跡（13）でも同様に、前期末から中期にかかる土器が出土している。これら二つの遺跡は、谷が形成した扇状地の扇端部低地に立地し、水稲耕作を行っていた可能性を指摘できる。このように低地の集落が確認される一方、弥生時代には丘陵性台地にも集落が認められる。旭・西山遺跡では、縄文時代に続き、弥生時代中期に属する土器片が出土している。また、盆地北部の標高20m～25mの緩斜面に立地する千人塚遺跡（10）では、堅穴住居跡2軒、組合式石棺1基、土器片や打製石鏃が出土している。さらに物見山遺跡（19）は、物見山丘陵西北部20m～30mの緩斜面に立地しているが、ここからも中期の土器が出土している。このように、水稲耕作上は、低地に比して有利とはいえない高所に集落が認められることについては、当時の社会的緊張を背景に想定し得る現象とも考えられよう。岡崎遺跡からも、弥生時代中期から後期の土器が出土している。弥生時代後期には、鉄製農具の使用や新たな水田の開発等により、生産力が一層向上し、それに伴い集落の継続と規模の拡大の様相を推察することができよう。

古墳時代においては、厚狹盆地周辺にはいくつかの古墳が築造されている。長光寺山古墳（28）は、下津橋の西方約800mにある長光寺山頂部に立地する。長門部最古の畿内型前方後円墳であり、2基の堅穴式石室を主体部に持つ。三角縁神獸鏡3面、内行花文鏡1面、碧玉製鍔型石などの副葬品が出土しており、4世紀後半に比定される。これらの副葬品は、大和政権からこの地方の首長に賜与されたものと考えられ、畿内の勢力と同盟関係を築いていたことがうかがえる。妙徳寺山古墳（21）は、盆地の南端に連なる丘陵の緩斜面に立地する。堅穴式石室を主体部とする小規模な前方後円墳であり、5世紀前半に比定される。さらに6世紀代には、香古墳（5）、や千人塚古墳（11）、七日町古墳群などが点在する。畿内との密接な関係を背景に、在地勢力の伸長と雑起的な発展の様相をうかがわせる。

古代に入ると、律令国家は公地公民制にともない、公田を効率的に班給するために、条里制という土地の区画整理事業を全国規模で展開する。厚狹盆地では、厚狹川右岸に条里遺構（14）が残っている。時代が進み、中央の寺社や貴族は、地方豪族が自ら開墾した土地の寄進を受け荘園とし、勢力を伸長させていった。厚狹盆地の荘園は、厚狹庄であるが、京都賀茂社の荘園であったことから鴨庄とも呼ばれ、現在の大字鴨庄とほぼ同じ地域に広がる。この時代の遺跡としては、妙徳寺山経塚（22）、物見山経塚（20）、長光寺山経塚（27）などがあり、人々の信仰や宗教観をうかがう上で貴重な資料である。

中世に入ると、この地域は、厚東氏、続いて大内氏の支配するところとなる。この時期における遺跡としては、住居跡が確認された、長友・別府台遺跡がある。ここでは、土師器の杯や足鍋、鉢、石鍋など、中世の生活雑器が出土しており、今回の発掘調査において出土した遺物と重なるものが多い。また、加藤北遺跡（17）においても、この時代の集落が確認されている。

柳下遺跡南方に位置する清安寺は、もとは真言宗の道場で、鎌倉時代は不動寺と通称し、西に約500mの丘陵上にあったとされる。室町時代になり、大内氏の家臣である冷泉隆豊の築城にともなって、現在の場所に移された。また、家臣団の居所を今市といったという記述もあり、この周辺が大内氏の隆盛にともなって発展していったものと推定される。

今回の調査地は、厚狭盆地内において厚狭川左岸の丘陵に近い地区にあたり、これまでまとまった調査があまり行われていない地域である。厚狭盆地における集落の在り方の変遷を含めて、各時代における人々の生活の様子を明らかにする上でも、今調査が貴重な資料を提供することとなった。

註

1) 山口県文書館『絵図でみる防長の町と村』(1989年)の「55 鴨庄」による

【参考文献】

- 山陽町教育委員会『山陽町史』(1984年)
- 山口県『山口県史 資料編 考古1・2』(2000・2004年)
- 山陽町教育委員会『長光寺山古墳』(1977年)
- 山陽町教育委員会『妙徳寺山遺跡』(1992年)
- 山口県教育委員会『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・渠遺跡』(1991年)

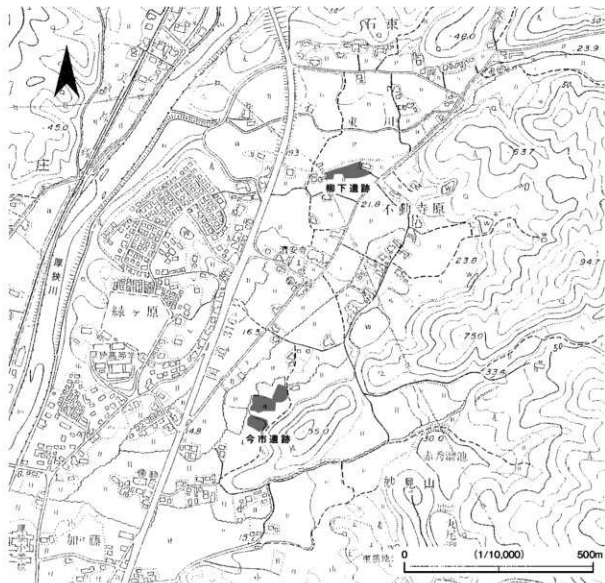


図2 遺跡の位置と周辺の地形

II 調査の経緯と概要

1 調査に至る経緯

山口県教育委員会では各種開発に伴う工事から埋蔵文化財を保護するため、関係機関と事前協議を行い、現状保存が困難な遺跡については記録保存を目的とした事前の発掘調査を実施している。山陽小野田市厚狭における経営体育成基盤整備事業 石東・不動寺原地区工事においても、対象地内における埋蔵文化財の有無を確認するため、山口県教育委員会は平成15年から平成16年にかけて3回にわたり試掘調査を行った。調査の結果、土坑や柱穴等の遺構や土師器等の遺物が見つかり、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認された。山口県教育委員会では、調査の結果を受けて、事業主体である山口県農林部と協議を行い、埋蔵文化財包蔵地のうち工事に伴い削平を受け現状保存が困難な不動寺原地区の2ヶ所（柳下遺跡・今市遺跡）について、本発掘調査を実施し記録保存を行うこととなった。調査は山口県農林部、および文化庁の国庫補助を受けた山口県教育委員会から調査を委託された財団法人山口県ひとつくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施することとなった。

2 調査の概要

発掘調査を始めるにあたって、事前に対象となる調査区の現状確認の上、山口県美祿農林事務所との打ち合わせ等を行った。5月上旬に山陽小野田市教育委員会、近隣の小中学校、警察署、消防署、

自治会等に調査期間中における安全確保のための協力と理解を要請し、その後5月18日に発掘作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。

柳下遺跡

5月上旬に重機による現地水田の耕土除去作業を行い、その後トレンチ調査により土層および遺構面の状況等を確認し、それを基に5月30日から重機による表土除去作業を行った。また、表土除去作業と並行して仮設事務所および駐車場用地の整地作業を行い、6月3日に仮設事務所および機材庫を設置した。6月5日には発掘機材を搬入し、調査開始に向けて周辺の環境整備を行った。

6月6日より作業員を動員して人力による遺構面検出作業を開始し、その結果6月下旬までに多数の土坑や柱穴、数条の溝状遺構等が検出された。6月19、20日に国土座標杭を設置し、6月21、22日に遺構配置概略図作成のための平板実測を行った。6月28日から遺構の掘り込み作業に入り、並行して遺構の実測および写真撮影等の記録作業を



表土除去（今市遺跡）



国土座標杭設置（今市遺跡）

行った。柳下遺跡は地山土が強粘質土で晴天時は固く締まり、雨天時はぬかるむため、遺構の検出および掘り込みが難しく、多くの時間と労力を要したが、9月下旬には遺構掘り込み作業はほぼ終了することができた。遺跡内からは大型建物4棟を含む掘立柱建物群をはじめ、建物等を区画すると思われる溝状遺構数条、多数の土坑・柱穴等の中世を中心とする時期の遺構が確認され、土師器の皿や杯を中心に瓦質土器や輸入陶磁器、刀子や釘等の鉄製品等が出土した。

9月16日にはそれまでの調査の成果を広く公開するため、現地説明会を開催した。雨天にもかかわらず、地元の方々を中心に約80名の参加があり、遺跡全体や代表的な遺構の紹介、復元された出土遺物の実物展示を行った。

9月末には作業員を動員しての作業がほぼ終了したため、9月27日に発掘機材を今市遺跡へと移動し、作業員の大部分は今市遺跡の調査へ移った。9月28日に空中写真撮影を行い、10月2日から遺構実測と並行してグリッド実測による遺跡の記録作業を行った。10月13日に全ての記録作業が終了し、現地での調査を終了した。

今市遺跡

柳下遺跡での調査と並行して8月上旬に土層および遺構面の状況等の確認のためのトレンチ調査を行い、それを基に8月8日から重機による現地水田の耕土除去作業および表土除去作業を行った。柳下遺跡の調査が終盤に近づいたのに伴い、9月27日に発掘機材等を移動し、調査に向けて環境整備を行った。

9月29日から作業員を動員し人力による遺構面検出作業を開始し、10月下旬までに土坑や柱穴等の遺構が検出された。10月16日から18日にかけて国土座標杭を設置し、10月17日から遺構面検出作業と並行して検出が終了した調査区から順次遺構配置概略図作成のための平板実測作業を行った。10月27日から遺構の掘り込み作業に入り、並行して遺構の実測及び写真撮影の記録作業を行った。遺構掘り込み作業は11月16日に終了した。柳下遺跡同様、地山土が強粘質土であるため、遺構の検出・掘り込みには労力を要した。遺跡内からは井戸、土坑等近世を中心とする遺構が確認され、また遺跡の南西側では弥生土器を含む遺物包含層が



遺跡掘り込み（柳下遺跡）



空中写真撮影（今市遺跡）



現地説明会（柳下遺跡）

確認された。土坑や遺物包含層を中心に近世の陶磁器や弥生土器、石鏃等が出土した。

11月22日に空中写真撮影を行い、その後は遺構の実測および写真撮影の記録作業と平板実測による遺跡全体の記録作業を並行して行った。12月1日に全ての記録作業が終了し、現地での調査を終了した。

調査期間中は気温が例年より高めで、日中のにわか雨も多かったため作業員の健康管理に留意するとともに、発掘調査事務所と両遺跡の調査区との距離が離れており、調査区周辺では、ほ場整備関係の工事車両が頻繁に作業を行っていたため、作業員の移動時や作業時における安全管理にも十分留意しながらの調査となった。前述の通り、柳下遺跡・今市遺跡ともに地山土が強粘質土であるため、天候による作業の進捗状況への影響が少なからずみられたが、例年と比較して台風や大雨も少なく、調査は大過なく進めることができ、貴重な現地資料を得ることができた。

その後、山口県埋蔵文化財センターにおいて調査資料の整理・検討を行い、出土遺物の復元、実測および写真撮影を行い、この発掘調査報告書を刊行するに至った。

Ⅲ 柳下遺跡調査の成果

1 調査の方法と経過

柳下遺跡は、厚狹盆地の北東端で、三条山（174m）から西に伸びる舌状丘陵の先端部に位置し、すぐ北側を流れる石東川の浸食作用によって形成された段丘の上に広がる。調査区は西に向かってわずかに傾斜した平坦な地形上に立地し、石東川に向かい北側が急に落ちている。標高は、最高位で22m、最も低いところで21m、標高差は1mである。

調査区は、標高差のある現地水田の境で、東側を1地区、西側を2地区と設定した。また、調査の都合上現地水田の境に従い、1地区をA・B・Cの3区、2地区をA・Bの2区に分けた（図3）。

調査は、調査区全域の耕土除去の後、まずそれぞれの地区について数箇所のトレンチを設定して遺構面を確認することから開始した。その結果、盤土下0cm～20cm程度の浅いところに、褐色粘質土の遺構面があることを確認した。1・2地区の境の調査区北端では、狭い範囲ではあるが現代の耕作土・盤土の下に旧耕作土・盤土が見られ、町だおしの行われたことがわかった。また、1地区Bと2地区の北側の落ち込みに向けて、遺構面も傾斜していることが確認され、地山直上に褐灰色の堆積層の広がりが見られた。遺物包含層とも考えられたが、包含する遺物の量は極めて少なく、土量も多いことから重機によって取り除くこととした。

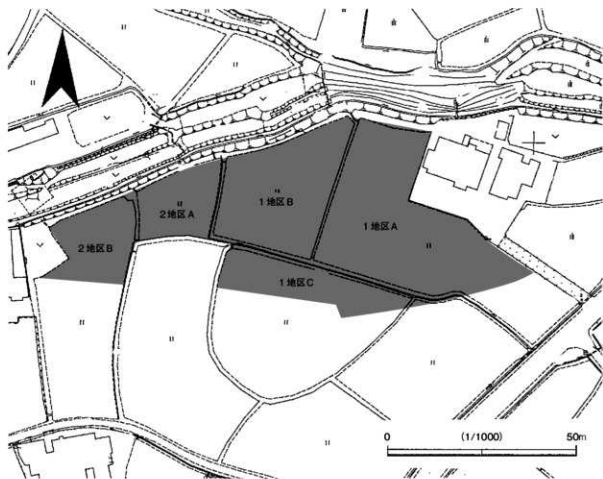


図3 調査区設定図

以上の結果を受けて、重機を投入しての表土除去を行い、密度に差はあるものの遺構は調査区内ほぼ全域に広がることがわかった。特に1地区Aの南西部および1地区Bの北西部の遺構密度が高く、遺跡の中心的な位置を占めると考えられた。そこで、調査区の東端から1地区A・Bを中心に遺構検出および掘り込みを進めることとした。

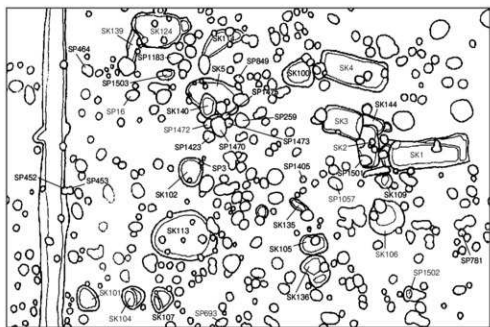
1地区Aの北・東端部は、礫層が広がり遺構密度は低い。中央部から南および西部にかけては遺構の密度が高く、直径80cmの柱穴で構成されるSB1、3間×2間、底をもち本遺跡最大の面積57㎡を測るSB17を始めとして、掘立柱建物跡が19棟検出された。また、囲郭のための溝と考えられるSD1・2、土坑墓と見られるSK1～5等、屋敷地を構成する遺構群が多く検出された。遺構の密集部から東と南に少し外れたところからは、焼土層をもつ土坑（SK7・8）が検出され、SK1～5と合わせて、屋敷地内の生活環境を推測する資料として期待できる。

1地区Bの東側は、掘立柱建物跡が2棟（SB20・21）検出されたが遺構密度は低かった。北側では、落ち込みの始まる部分から数基の遺構が検出されたが、褐灰色土堆積層の下からは、ほとんど遺構は検出されなかった。西側には、3間×2間、底をもち面積45㎡を測るSB26を始めとして5棟の掘立柱建物跡が検出された。

1地区Cは、用水路を挟んで1地区A・Bの南側に位置している。遺構密度は薄く、土坑1基（SK110）、欄列1条（SA1）と数十個の柱穴を検出した。SA1は、周辺に土坑等は無いものの、1地区BのSB21と棟方向が等しく、通路を区切る欄列である可能性が高いことから、南方調査区外に、何らかの施設があった可能性も指摘される。

2地区は遺構密度が低く、掘立柱建物跡2棟（SB27・28）、欄列1条（SA3）溝状遺構3条（SD6～8）土坑9基（SK10・201～208）柱穴数10個を検出するにとどまった。SK201からは弥生土器が出土し、周辺に弥生時代の遺跡が埋存する可能性を示す。

各遺構分布の記録は、グリッド実測と空中写真撮影によって行い、現地での調査を終了した。



1地区A密集部拡大図 (1/150)



図4 遺構配置図

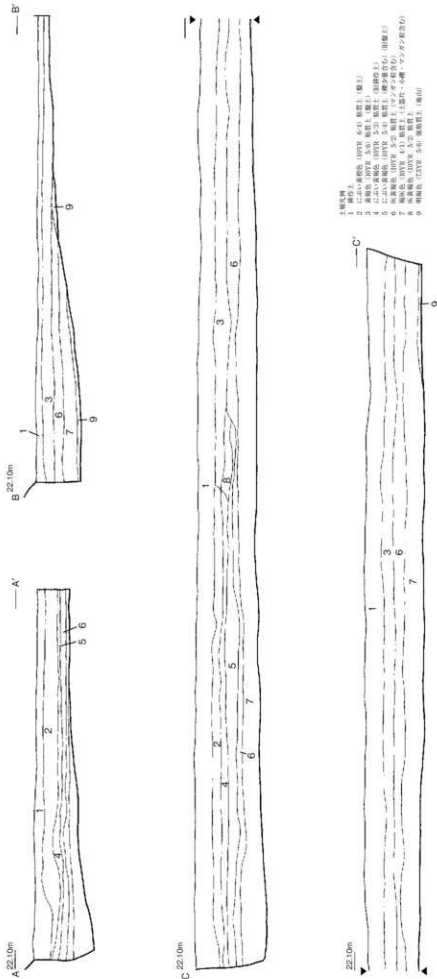


図5 調査区壁面土層断面図

2 遺構

この度の調査では、掘立柱建物跡28棟、櫛列3条、溝状遺構8条、土坑59基、埋窆1基、不明遺構1基、柱穴約1500個を検出した。1地区A南西部と1地区B西部に特に集中している。以下主なものについて取り上げる。

(1) 掘立柱建物跡

多くの柱穴で切り合いが見られ、建物の復元は容易ではなかったが、1・2地区合わせて28棟の掘立柱建物を復元した。同時期の建て替えも含めて、相当数の建物が建っていたと考えられる。

SB1 (図6 図版3・4) 1地区A中央部に位置する建物跡で、桁行3間(7.40m)、梁行2間(5.40m)、床面積39.96㎡を測る。棟方向はN82°Wである。遺物は、土師器の杯、瓦質土器、青磁、陶器、鉄釘(図41 118)が出土している。SP6・7からは最大直径17cmの柱痕が検出された(図版16 122-123)。出土遺物から、15世紀後半～16世紀代の建物であると比定される。平均的な柱穴の深さは80cmを測り、柱穴の大きさや面積からも、当時の中心的な建物の一つであると考えられる。

SB4 (図7 図版2) 1地区A中央部東側に検出された建物跡で、桁行2間(5.49m)、梁行1間(2.82m)、床面積15.48㎡を測る。棟方向はN79°Wである。隣接するSB1とは、ほぼ同方向の棟方向を示す。柱穴から土師器が出土した。

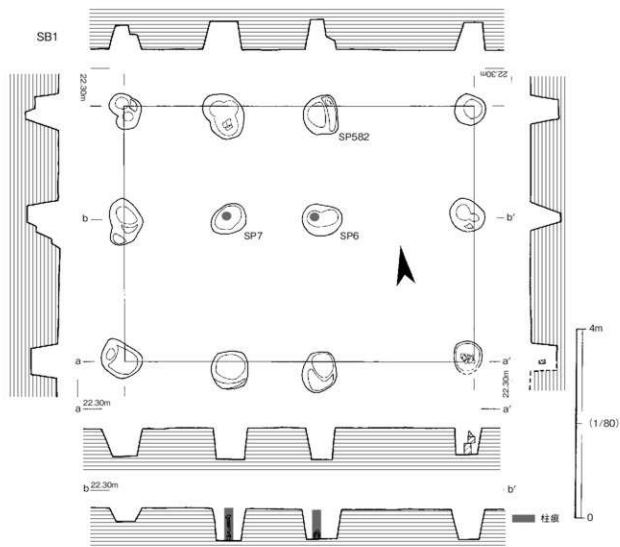


図6 SB1実測図

SB6 (図7 図版2) 1地区A中央部に位置する建物跡で、桁行3間(5.85m)、梁行1間(3.25m)、床面積19.01㎡を測る。棟方向はN60° Wである。柱穴からは、土師器や瓦質土器が出土した。

SB8 (図8 図版2) 1地区A中央部に位置する建物跡である。桁行2間(4.74m)、梁行1間(3.12m)、床面積14.79㎡を測る。棟方向はN61° Wである。SB6とほぼ同方向の棟方向を示す。

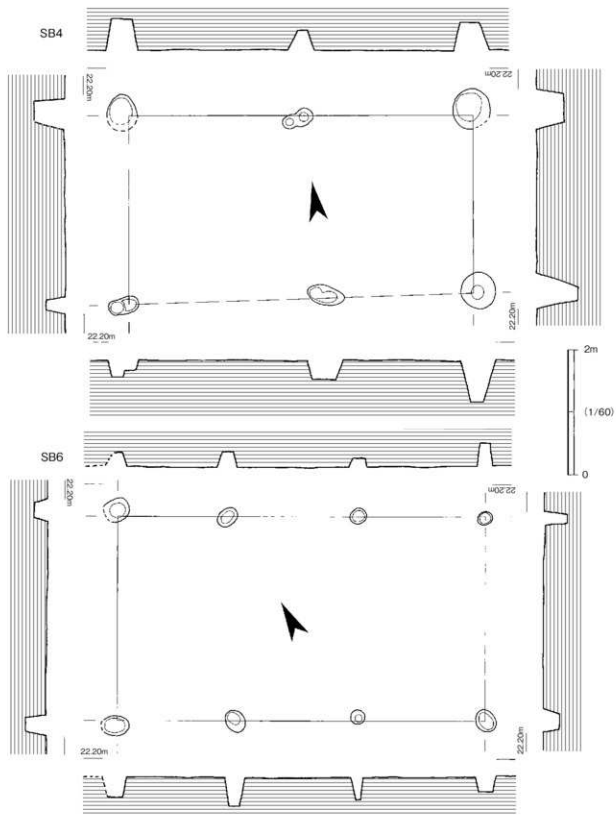


図7 SB4・6実測図

柱穴からは、土師器や瓦質土器が出土した。

SB9 (図9 図版2) 1地区A中央部に検出された建物跡である。桁行2間(4.05m) 梁行1間(3.60m)、床面積15.48㎡を測る。棟方向はN68° Eである。柱穴からは、土師器が出土した。

SB10 (図9 図版2) 1地区A中央部よりやや南西に位置する建物跡である。桁行2間(4.65m)、梁行1間(4.22m)、床面積19.62㎡を測る。棟方向はN26° Eである。柱穴からは、土師器の皿(図35 1)・播鉢(図35 2)が出土した。

SB11 (図10 図版2) 1地区A中央部やや南西に位置する建物跡である。桁行2間(4.36m)、梁行2間(3.64m)、床面積15.87㎡を測る。棟方向はN21° Eである。SB10とはほぼ同じ棟方向を示す。柱穴からは土師器の播鉢(図35 12)、白磁、瓦質土器が出土した。

SB12 (図11 図版2) 1地区西半南端部に検出された建物跡である。桁行3間(6.78m)、梁行2間(4.90m)、床面積33.22㎡を測る。建物の規模から、主屋的な性格の建物であると考えられる。棟方向はN34° Eである。柱穴からは、土師器、陶器が出土した。

SB13 (図10 図版2) 1地区A西半中央部に位置する建物跡である。桁行2間(5.00m)、梁行1間(2.67m)、床面積13.35㎡を測る。棟方向はN11° Wである。柱穴からは、瓦質土器の足鍋(図35 10)が出土している。

SB14 (図12 図版2) 1地区A西半中央部に検出された建物跡である。桁行2間(4.80m)、梁行(3.50m)、床面積16.80㎡を測る。棟方向はN11° Eである。土師器の杯(図35 11)が出土した。

SB15 (図12 図版2) 1地区A西半西側に位置する建物跡である。桁行2間(5.38m) 梁行2間(3.57m)、床面積19.21㎡を測る。棟方向はN73° Wである。柱穴からは、土師器、瓦質土器の浅鉢(図

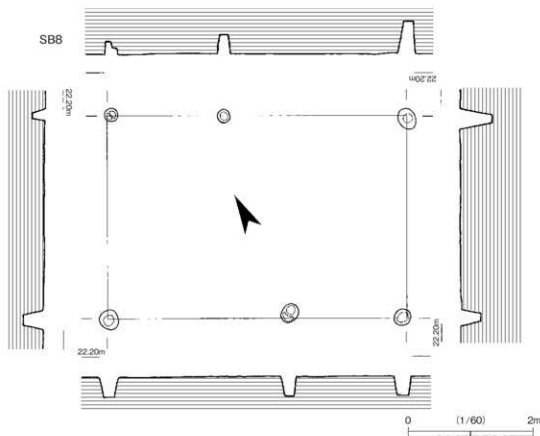


図8 SB8実測図

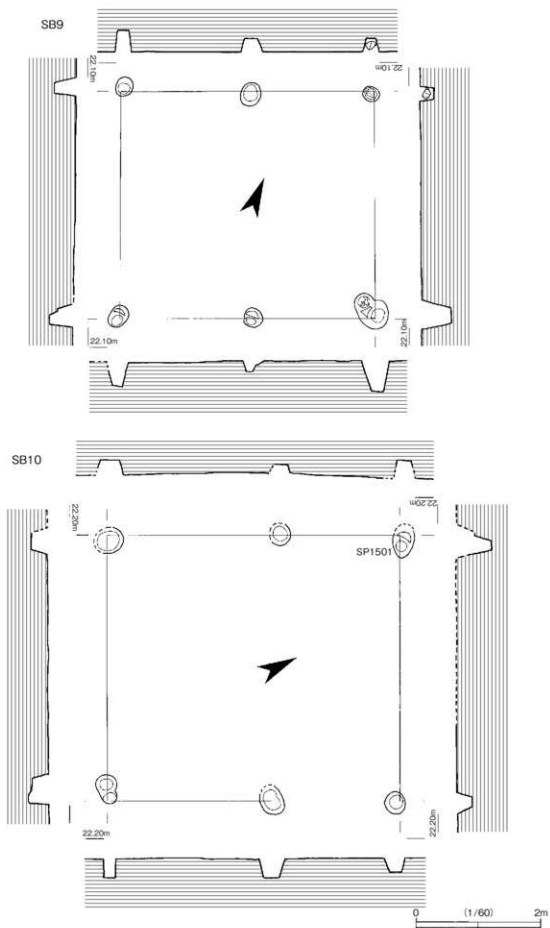


図9 SB9・10実測図

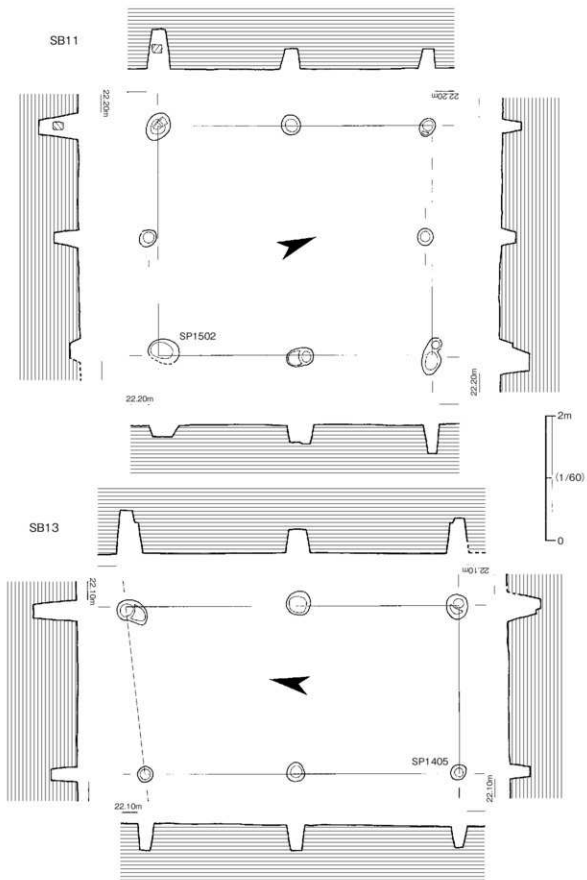


図10 SB11・13実測図

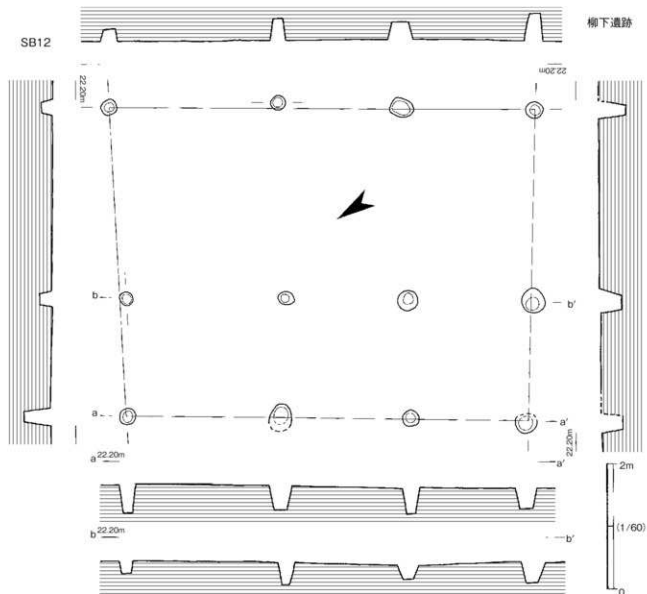


図11 SB12実測図

35 7)・茶釜(図35 8)・陶器が出土した。

SB16 (図13 図版2) 1地区A西半南側に検出された建物跡である。桁行2間(4.36m)・梁行1間(2.59m)、床面積は11.29㎡を測る。棟方向はN15°Eである。柱穴からは、土師器が出土した。

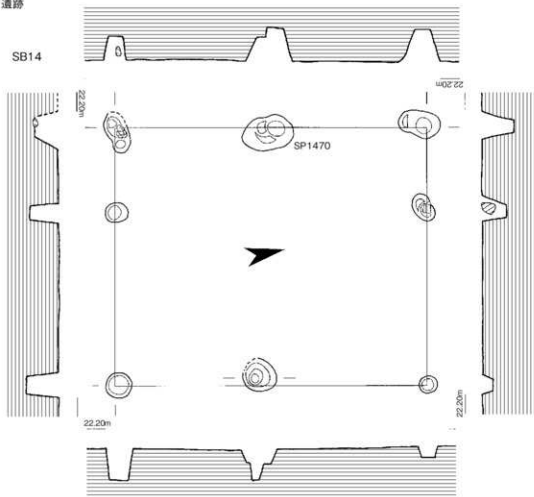
SB17 (図13 図版2) 1地区A西半西端に位置する。桁行3間(9.00m)・梁行2間(6.35m)、床面積は57.15㎡を測る。北側に庇をもち、本遺跡で最も大きな建物跡である。棟方向はN67°Wである。柱穴からは、土師器の杯(図35 3~6)、瓦質土器が出土した。出土遺物から、14世紀代の建物であると比定される。

SB18 (図14 図版2) 1地区A南西端に位置する建物跡である。桁行2間(4.78m)・梁行2間(3.63m)、床面積17.35㎡を測る。棟方向はN56°Wである。柱穴からは、土師器が出土した。

SB19 (図15 図版2) 1地区A南西端に位置する建物跡である。桁行2間(3.50m)・梁行1間(2.66m)、床面積9.31㎡を測る。棟方向はN32°Eである。柱穴からは、土師器のこね鉢または挿鉢(図35 9)が出土した。

SB20 (図14 図版2) 1地区B中央部北側に検出された建物跡である。桁行3間(4.91m)・梁行1間(3.76m)、床面積18.46㎡を測る。棟方向はN67°Eである。

SB14



SB15

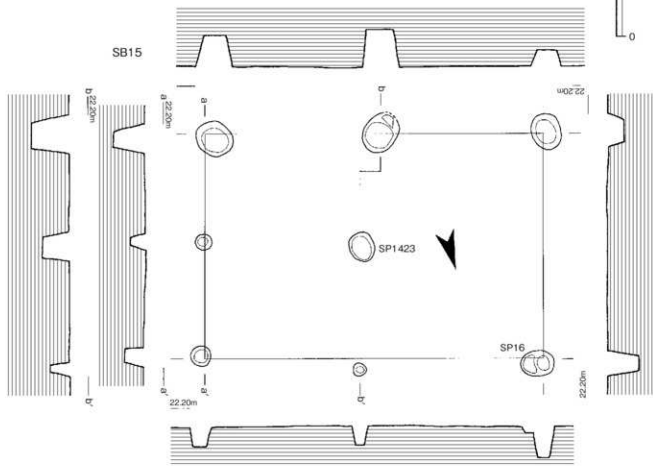
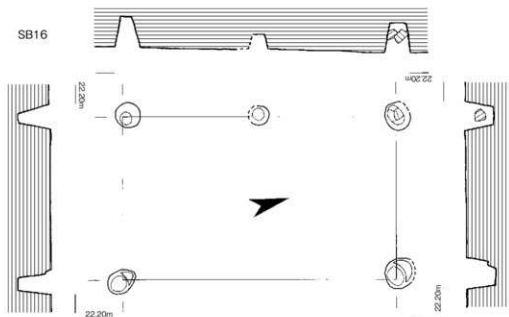


図12 SB14・15実測図

SB16



SB17

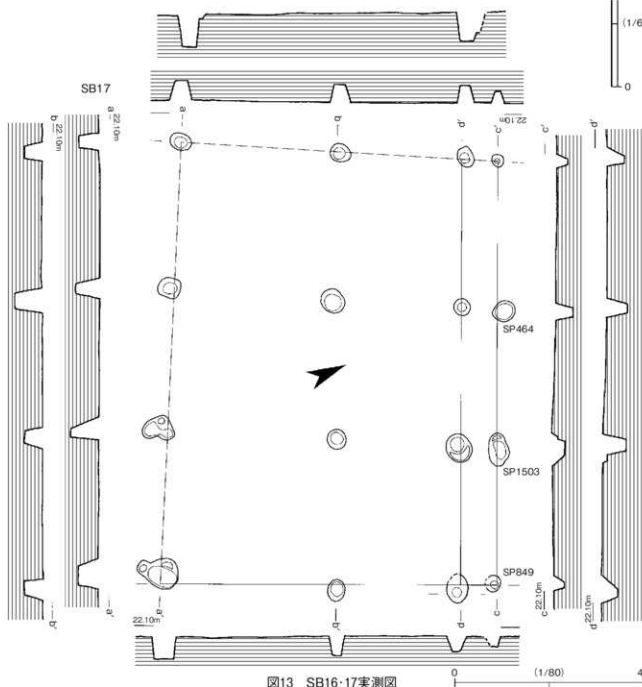
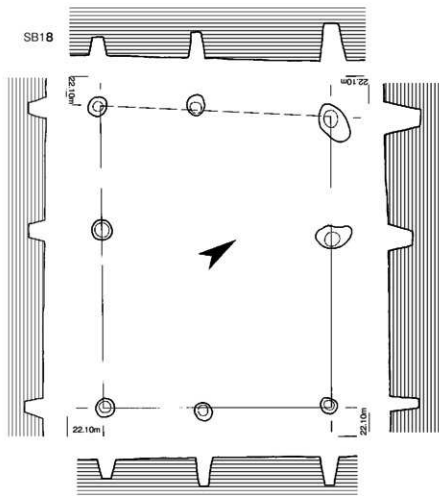


図13 SB16・17実測図

SB18



SB21 (図15 図版2)

1地区B東半南側に位置する建物跡である。桁行1間(3.61m)梁行2間(3.21m)、床面積11.59㎡を測る。棟方向はN23°Eである。

SB22 (図15 図版2)

1地区B西半東側に検出された建物跡である。桁行2間(5.82m)、梁行1間(4.39m)、床面積25.55㎡を測る。棟方向はN18°Wである。土師器、瓦質土器が出土した。

SB23 (図16 図版2)

1地区B西半南側に検出された建物跡である。桁行2間(4.00m)、梁行1間(2.73m)、床面積10.92㎡を測る。棟方向はN14°Eである。

SB20

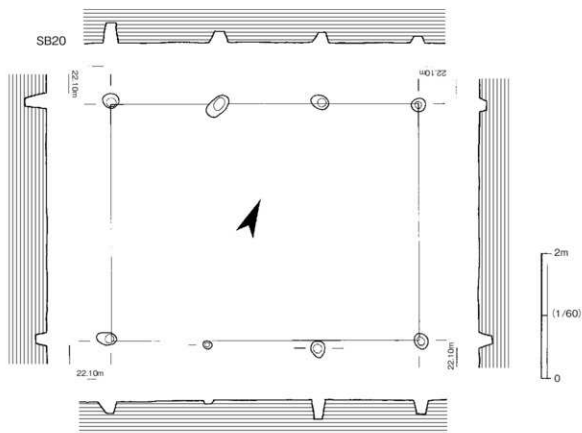


図14 SB18・20実測図

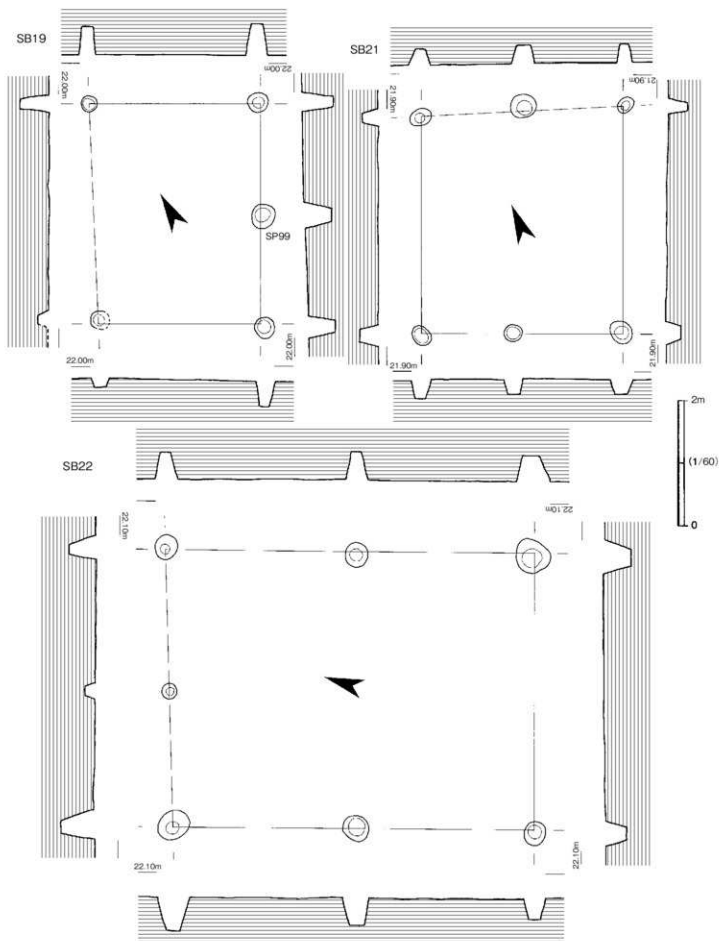


図15 SB19・21・22実測図

SB24 (図16 図版2)

1地区B西半南側に検出された建物跡である。桁行2間(3.56m)、梁行2間(3.10m)、床面積11.04㎡を測る。棟方向はN82°Eである。土師器が出土した。

SB25 (図16 図版2)

1地区B西半南側に検出された建物跡である。桁行2間(3.54m)、梁行1間(3.05m)、床面積10.80㎡を測る。棟方向はN3°Wである。土師器が出土した。

SB26 (図17 図版2)

1地区B西端に検出された建物跡である。桁行3間(8.83m)、梁行2間(5.13m)、床面積45.30㎡を測る。棟方向はN70°Eである。土師器、瓦質土器が出土した。

SB27・28 (図4 図版2)

2地区B中央部に検出された建物跡である。SB27は、桁行1間(2.20m)、梁行1間(2.50m)、床面積5.50㎡、SB28は、桁行1間(2.90m)、梁行1間(2.80m)、

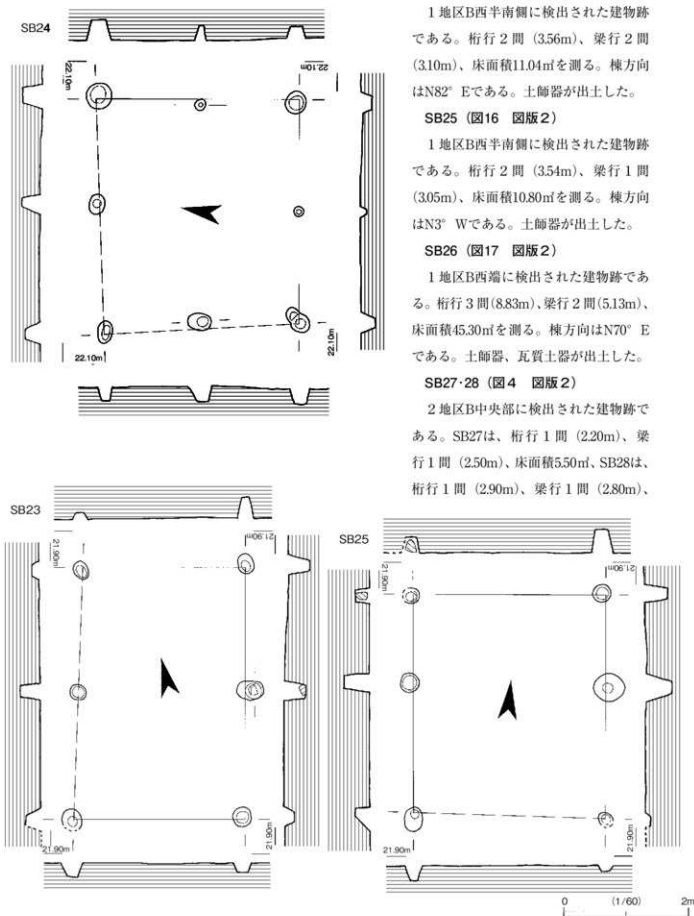


図16 SB23・24・25実測図

床面積8.12㎡を測る。棟方向はいずれも、N33° Wで同方向を向いている。建物の間隔が狭いことから、同時存在の可能性は低い。

(2) 櫓列

調査区の南側で櫓列が3条検出された。最も長いSA1の方向は、N23° E、長さ9.52mを測る。SB17に至る道に沿ってつくられた櫓の一部である可能性を指摘できる。土師器が出土した。

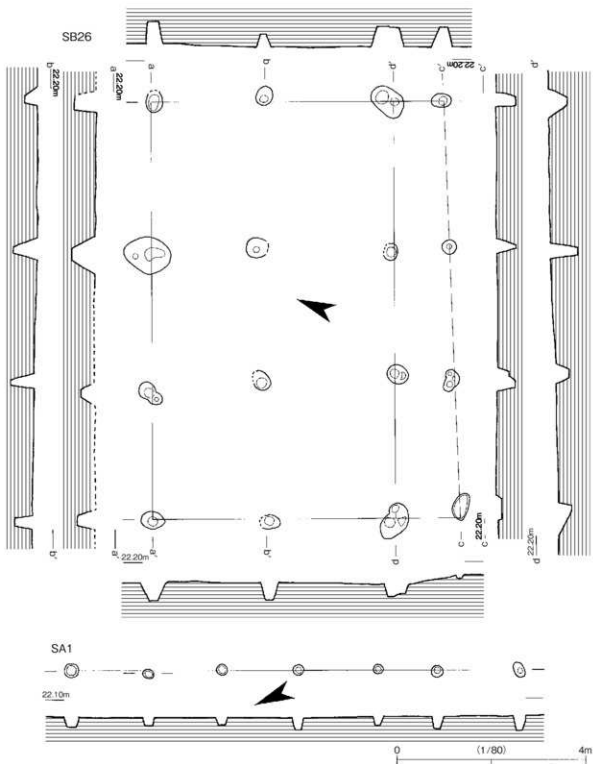


図17 SB26、SA1実測図

柳下遺跡

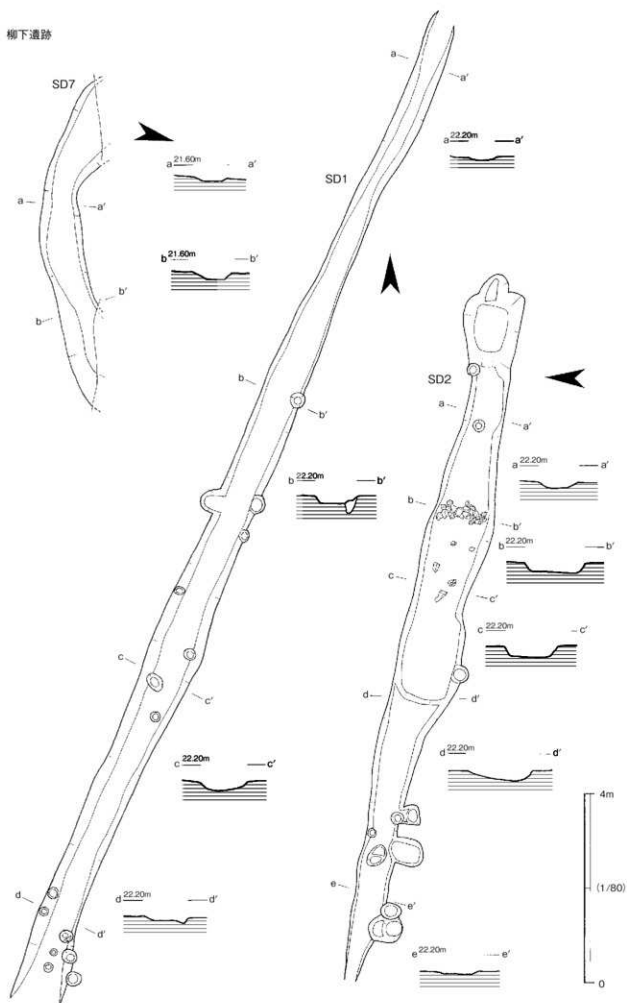


図18 SD1・2・7実測図

(3) 溝状遺構

溝状遺構は、1地区において5条、2地区において3条、合計8条検出された。以下、主なものについて取り上げる。

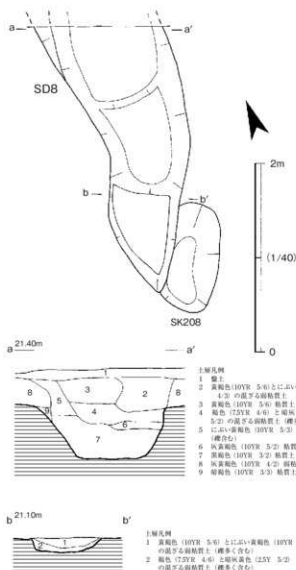
SD1 (図18 図版4) 1地区A西端にほぼ南北方向にのびる。幅は0.48~1.18m、長さ22.70m、深さ0.02m~0.23mである。土師器の播鉢・細片、瓦質土器の茶釜(図36 13)、青磁の椀、滑石製石鍋(図36 14)、黒曜石製石鉄未製品(図41 107)、刀子(図41 115)等が出土している。出土遺物から時期は、15~16世紀ごろと考えられる。同じく1地区A南端で検出されたSD2とはほぼ直角の位置にあることから、この地区の南西部に多く検出された掘立柱建物の周囲を巡る、囲郭溝の一部であった可能性が考えられる。ただ、今回の調査では、これら二条の溝に対応し、建物を囲む、残り2条の溝は検出されていない。

SD2 (図18 図版4) 上述のとおり、SD1と関連すると考えられる。1地区A南端に検出された。幅は0.45~0.88m、長さ15.25m、深さ0.02~0.27mである。土師器の杯・皿・鍋、瓦質土器の鍋・火鉢・播鉢、陶器、黒曜石剥片(図41 108)等が出土している。出土遺物から時期は、15~16世紀ごろと考えられる。

SD3 (図4 図版2) 1地区B西端に検出された。西側を田の畦畔境による段で切られているため全容を把握することはできないが、幅0.56~0.82m、長さ6.40m、深さ0.03~0.06mである。土師器の細片が出土している。出土遺物から時期は、15~16世紀ごろと思われる。

SD7 (図18 図版5) 2地区A北東端に検出された。北側が調査区外に続いているため、全容の把握はできないが、幅0.72~1.03m、長さ7.00m、深さ0.05~0.14mである。土師器の杯、瓦質土器片が出土した。出土遺物から時期は、14~16世紀ごろと考えられる。

SD8 (図19 図版5) 2地区B北東端に検出された。北側が調査区外に続いているため、全容の把握はできないが、幅0.70~1.38m、長さ2.45m、深さ0.07~0.54mである。土師器細片、瓦質土器片、陶磁器片、水晶剥片が出土した。出土遺物から時期は、15~16世紀ごろと思われる。近世の遺物も



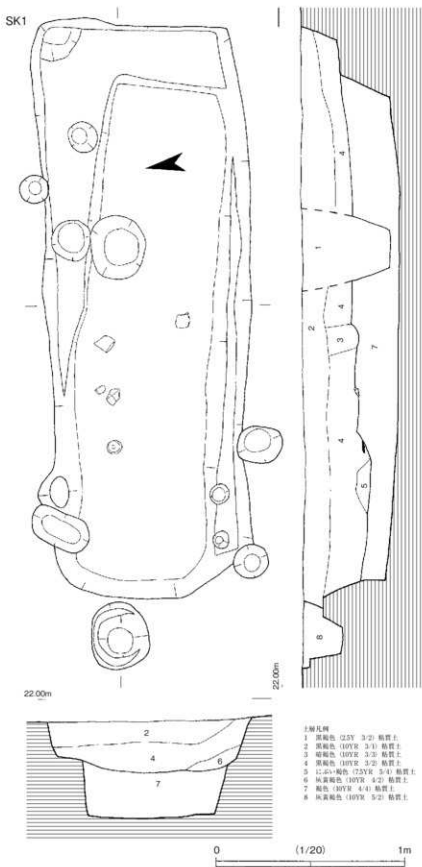


図20 SK1実測図

出土していることから、近世以降に再掘した可能性を指摘できる。

(4) 土坑

検出された59基の土坑のうち、51基が1地区、8基が2地区に位置する。用途別に見ると、土坑墓の可能性のあるもの5基、焼土坑4基、その他の土坑50基である。土坑墓と思われる土坑は、すべて1地区A中央付近で検出された。分布の様子は、掘立柱建物の分布と重なるが、1地区Aに約6割が集中している。以下、主なものについて取り上げる。

SK1 (図20 図版5)

1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、長方形を呈する。規模は長軸305cm、短軸108cm、深さ50cm。深い土坑の上から、浅い土坑が掘り直された可能性もある。形状や遺物の状況から土坑墓とも考えられるが、規模から別の用途の土坑である可能性が高い。土師器の杯 (図36 15)、瓦質土器が出土している。出土遺物から時期は、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

SK2 (図21 図版5)

1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、隅丸方形を呈する。規模は長軸170cm、短軸80cm、深さ16cm。土師器の杯 (図36 16・17) が出土して

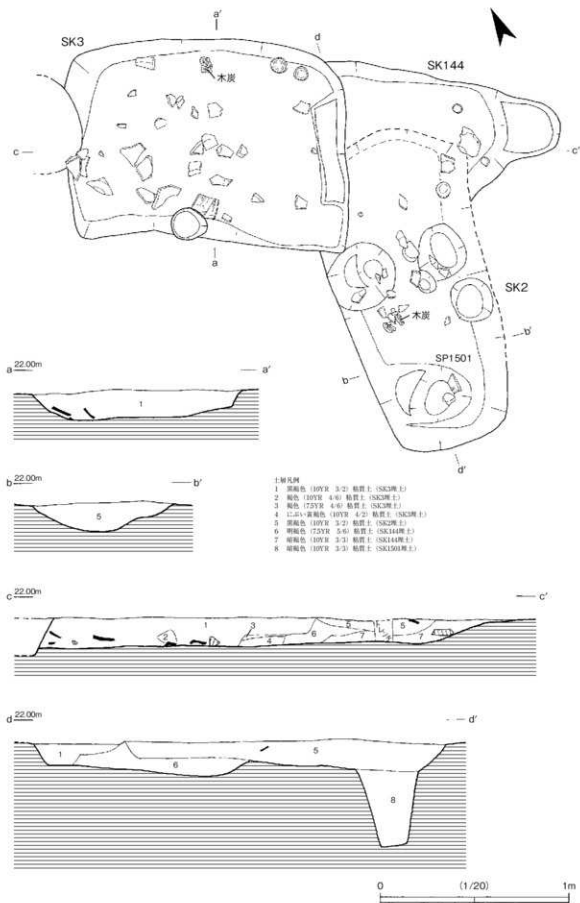


図21 SK2・3・144実測図

いる。出土遺物から時期は、14世紀～15世紀前半と考えられる。土坑墓である可能性が指摘できる。

SK3 (図21 図版5)

1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、方形を呈する。規模は長軸145cm、短軸107cm、深さ19cm。土師器の皿(図36 21・22)・鍋(図36 23)、滑石製石鍋(図36 24)、瓦質土器の播鉢(図36 25)・こね鉢(図36 26)、陶器、鉄製品(図41 120)が出土している。出土遺物から時期は、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。土坑墓である可能性もあろう。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

SK144 (図21 図版2) 1地区A中央部に位置する土坑である。SK2・3に切られているため、平面形は把握できないが、長円形か。規模は、短軸110cm、深さ17cm。土師器の皿(図37 51)・播鉢(図

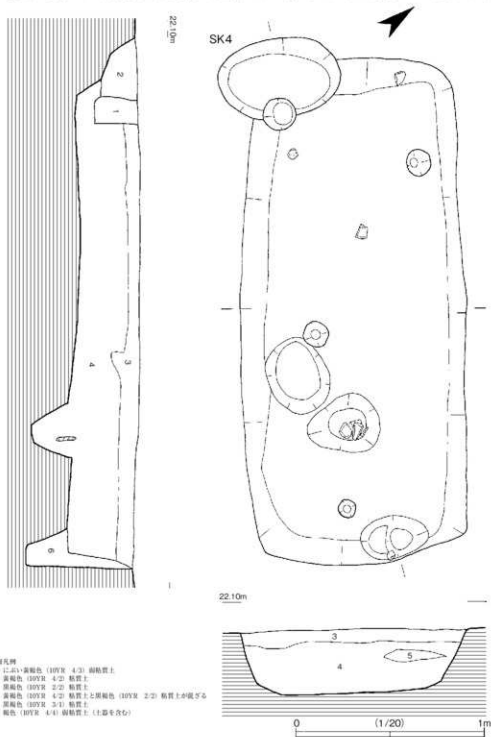


図22 SK4実測図

SK5

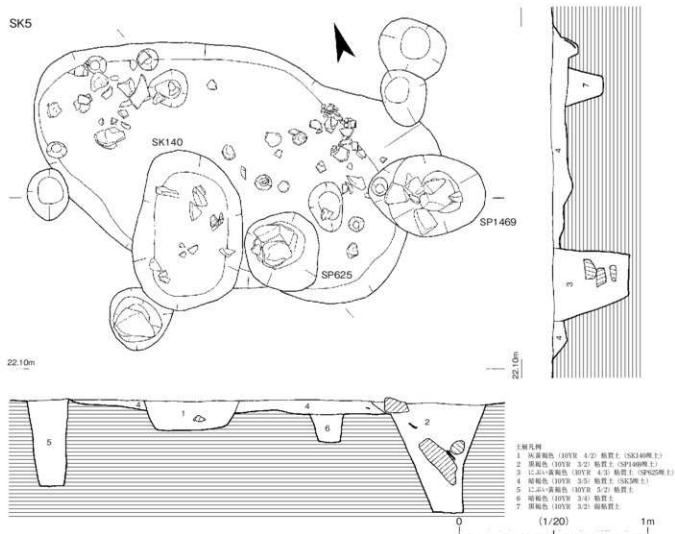


図23 SK5実測図

37 52) が出土している。出土遺物から時期は、14～15世紀前半と考えられる。

SK4 (図22 図版6) 1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、長方形を呈する。規模は長軸267cm、短軸120cm、深さ37cm。土師器の皿(図36 18・19)、瓦質土器の挿鉢(図36 20)、石製品の砥石と思われるもの(図41 105)が出土している。出土遺物から時期は、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。土坑墓である可能性もあろう。

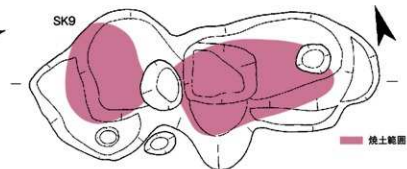
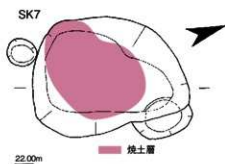
SK5 (図23 図版6) 1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸210cm、短軸125cm、深さ13cm。土師器の皿(図37 27・28)・杯(図37 29～43)、鉄製品の刀子(図41 112～114)が出土している。出土遺物から時期は、14世紀～15世紀前半と考えられる。土坑墓である可能性もあろう。埋土は、暗褐色粘質土の単層である。

SK7 (図24 図版2) 1地区A西半南側に位置し、埋土中から多量の焼土塊が出土した土坑である。平面形は、不整形を呈する。規模は長軸83cm、短軸60cm、深さ39cm。

SK8 (図24 図版6) 1地区A東半南側に位置し、埋土中から木炭片と焼土層を確認した土坑である。平面形は、円形を呈する。規模は長軸52cm、短軸48cm、深さ15cm。

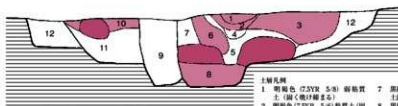
SK9 (図24 図版6) 1地区B西半西側に位置し、埋土中から多量の焼土塊が出土した土坑である。平面形は、不整形を呈する。規模は長軸185cm、短軸65cm、深さ40cm。土師器が出土している。

柳下遺跡

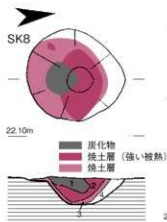


- 土層凡例
- 1 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土
 - 2 灰褐色 (7.5YR 4/2) 粘質土 (灰・焼土混在層)
 - 3 褐色 (7.5YR 4/4) 粘質土
 - 4 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土

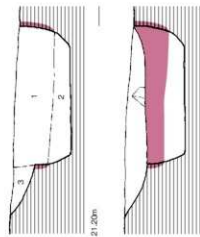
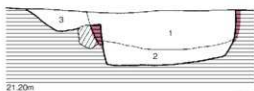
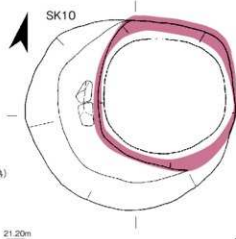
21.80m



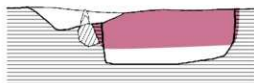
- 土層凡例
- 1 明褐色 (7.5YR 5/6) 凝結質土 (焼土混在層)
 - 2 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土 (焼土混在層)
 - 3 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土
 - 4 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土 (焼土混在層)
 - 5 暗褐色 (8.0YR 3/3) 粘質土
 - 6 褐色 (7.5YR 6/0) 凝結質土
 - 7 黄褐色 (7.5YR 3/2) 粘質土 (焼土混在層)
 - 8 黄褐色 (8.0YR 3/2) 粘質土
 - 9 明褐色 (7.5YR 5/6) 粘質土
 - 10 土褐色 (8.0YR 4/3) 粘質土
 - 11 明黄褐色 (8.0YR 6/6) 粘質土
 - 12 黄褐色 (8.0YR 5/6) 粘質土



- 土層凡例
- 1 黑色 (10YR 1.7/1) 炭化物層
 - 2 明赤褐色 (5YR 5/6) 粘質土 (強く焼付層を含む)
 - 3 褐色 (7.5YR 4/4) 粘質土
 - 4 黄褐色 (8.0YR 4/2) 粘質土



- 土層凡例
- 1 黄褐色 (8.0YR 3/3) 粘質土
 - 2 黑色 (10YR 1.7/1) 粘質土 (焼土混在層を多く含む)
 - 3 明褐色 (7.5YR 3/4) 粘質土



0 (1/20) 1m

図24 SK7・8・9・10実測図

SK10 (図24 図版6) 2地区B西半北側に位置する土坑である。平面形は、円形を呈する。規模は長軸110cm、短軸100cm、深さ35cm。底部から約8cmの厚さで炭が堆積し、それより上の壁面は被熱を受け、硬く焼け締まる。

SK100 (図25 図版7) 1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、不整形を呈する。規模は長軸120cm、短軸118cm、深さ28cm。土師器が出土している。出土遺物から時期は、14世紀後半～15世紀と考えられる。埋土は、灰黄褐色弱粘質土の単層である。

SK102 (図25 図版7) 1地区A西半中央部に位置する浅い皿状の土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸109cm、短軸90cm、深さ10cm。土師器の細片が出土している。SP3との重複関係から時期は、15世紀ごろと思われる。

SK104 (図25 図版2) 1地区A西半西側に位置する土坑である。平面形は、円形を呈する。規模は長軸90cm、短軸84cm、深さ18cm。土師器の杯が出土している。出土遺物から時期は、14世紀前半～中頃と考えられる。

SK106 (図25 図版2) 1地区A中央部に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸140cm、短軸125cm、深さ28cm。土師器、瓦質土器の足鍋(図37 58)が出土している。出土遺物から時期は、15世紀ごろと考えられる。

SK107 (図26 図版7) 1地区A西半南側に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸95cm、短軸84cm、深さ16cm。土師器の杯(図37 55)が出土している。出土遺物から時期は、14世紀ごろと思われる。

SK112 (図26 図版2) 1地区A東半北側に位置する土坑である。平面形は、円形を呈する。規模は長軸74cm、短軸67cm、深さ21cm。土師器、瓦質土器の火鉢(図37 61)が出土している。出土遺物から時期は、16世紀後半～17世紀と考えられる。

SK116 (図26 図版2) 1地区A西半西側に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸80cm、短軸46cm、深さ21cm。土師器の皿(図37 53)が出土している。出土遺物から時期は、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

SK120 (図26 図版7) 1地区A東半中央部に位置する土坑である。平面形は、隅丸方形を呈する。規模は長軸110cm、短軸75cm、深さ36cm。底部一面に約5cmの厚さで炭が堆積していた。墓または、埋葬に関連する施設である可能性がある。

SK122 (図26 図版7) 1地区A西半北側に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸77cm、短軸53cm、深さ25cm。土師器の皿(図37 56)が出土している。ほぼ完形で、底面に掘えられていた。出土遺物から時期は、15世紀後半～16世紀ごろと考えられる。

SK124 (図27 図版7) 1地区A西半中央部に位置する土坑である。平面形は、不整形を呈する。規模は長軸192cm、短軸130cm、深さ15cm。青磁の皿(図37 49)、土師器の杯(図37 50)、瓦質土器、陶器が出土している。出土遺物から時期は、15～16世紀代と考えられる。埋土は、灰黄褐色粘質土で単層である。

SK126 (図27 図版7) 1地区B東半北側に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。北側の落ち込みの肩部にあり、後世の削平により上部を失っていると考えられる。残存規模は長軸

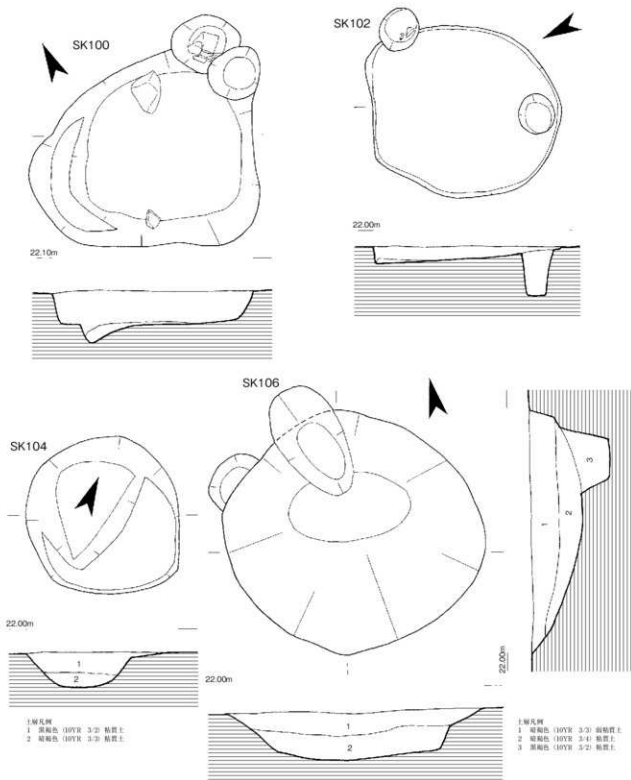


図25 SK100・102・104・106実測図

0 (1/20) 1m

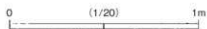
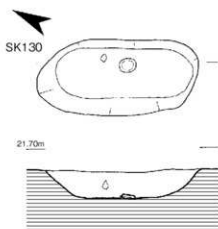
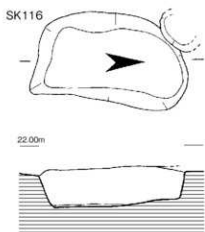
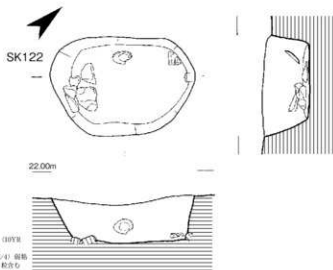
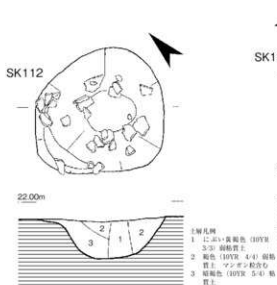
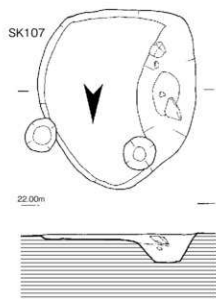


図26 SK107・112・116・120・122・130実測図

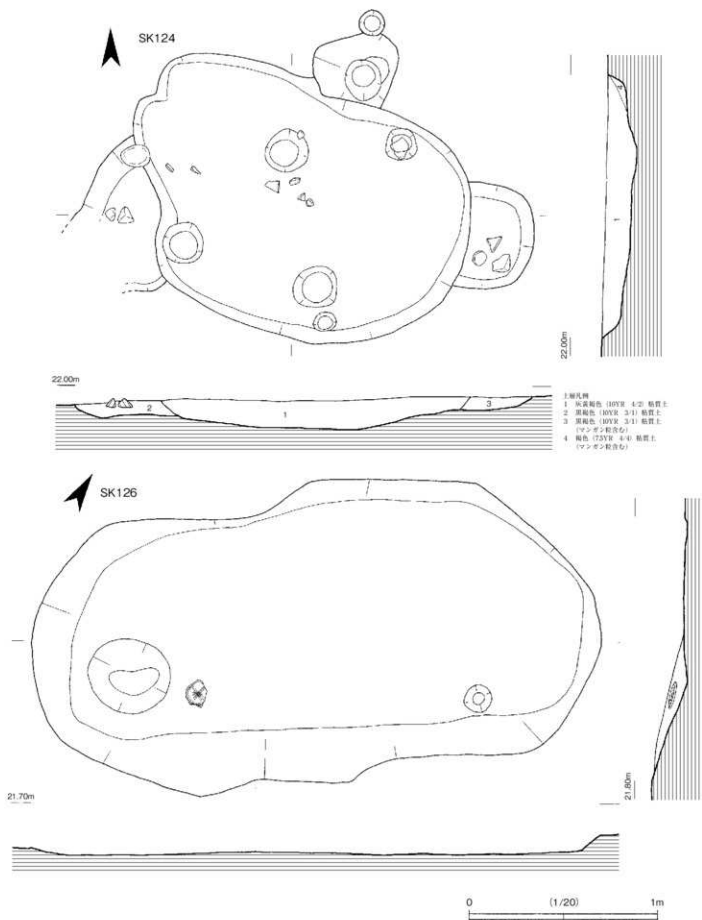


図27 SK124・126実測図

303cm、短軸160cm、深さ13cm。土師器、瓦質土器の挿鉢（図37 60）が出土している。出土遺物から時期は、14世紀代と考えられる。

SK130（図26 図版7） 1地区B北西部に位置する土坑である。規模は長軸86cm、短軸40cm、深さ20cm。埋土は暗褐色粘質土の単層である。完形の土師器の皿（図37 54）が伏せた状態で出土した。

SK201（図28 図版2） 2地区B西端に位置する土坑である。平面形は、不整形を呈する。規模は長軸75cm、短軸65cm、深さ11cm。弥生土器が出土している。

SK202（図28 図版8） 2地区A東半北側に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸113cm、短軸54cm、深さ29cm。土師器の皿（図37 44～47）が4枚重なって出土した。一番下の皿は上向きの状態、他の3枚はその上に伏せて重ねてあった。そのすぐそばからは、割れた土師器の杯（図37 48）が出土している。出土遺物から時期は、14世紀ごろと考えられる。地鎮等に用いられた可能性がある。

SK205（図28 図版2） 2地区B西半北側に位置する土坑である。平面形は、長円形を呈する。規模は長軸110cm、短軸85cm、深さ20cm。土師器が出土してい

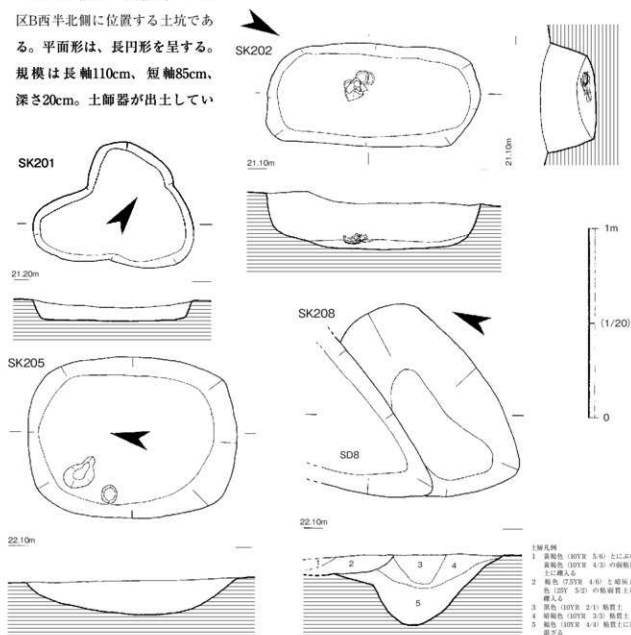


図28 SK201・202・205・208実測図

る。埋土は、黒褐色粘質土の単層である。SK10と隣接しており、埋土の様子等から関連の施設である可能性が高い。

SK208 (図28 図版2) 2地区A東半北側に位置する土坑である。SD8に端部を切られる。平面形は、切り合いにより明確ではないが長円形か。規模も切り合いにより短軸は不明であるが、長軸116cm、深さ37cm。

(5) 埋甕

埋甕1 (図29 図版8) 1地区A東半中央部に埋設された瓦質の大甕(図38 63)で、底径約18cmを測る。底部に赤色の物質が付着していた。陶器の皿(図38 62)が出土している。

(6) 不明遺構

SX7 (図29 図版8) 1地区A東半中央部に検出された。平面形は長円形である。規模は、長軸295cm、短軸237cm、深さ18cm。遺構の南側を中心に、集石が確認された。青磁の椀(図38 64・65)、銅製品(図41 121)が出土している。

(7) 柱穴

今回検出された柱穴は、全部で1500あまりを数え、28棟の掘立柱建物が復元された。直径20～30cmの円形のものが多いが、直径50cm～80cmの比較的大型のものもあった。遺物の出土している柱穴は約400個である。以下、主なものについて取り上げる。

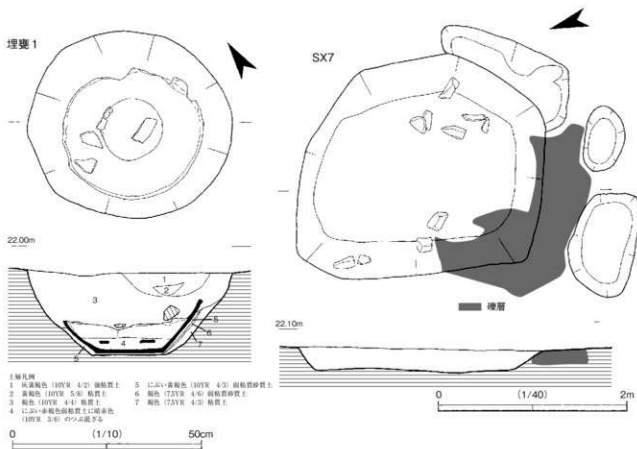


図29 埋甕1、SX7 実測図

SP29 (図30 図版8) 1地区A南西部に位置する柱穴である。規模は直径31cm、深さ43cm。土師器の插鉢(図39 88)が出土した。

SP92 (図30) 1地区A南西部に位置し、SB18を構成する柱穴である。規模は直径59cm、深さ59cm。土師器の插鉢と皿が出土した。

SP259 (図30 図版8) 1地区A中央部に位置する柱穴である。規模は直径60cm、深さ68cm。土師器の杯(図39 82)が出土した。

SP326 (図30 図版8) 1地区A東半西側に位置する柱穴である。規模は直径25cm、深さ26cm。土師器、青磁の椀(図39 94)が出土した。

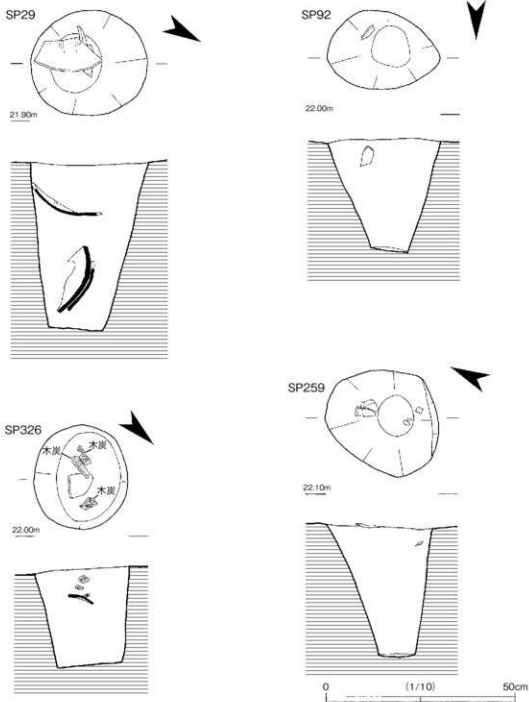


図30 SP29・92・259・326実測図

SP434 (図31 図版9) 1地区A中央部に位置する柱穴である。規模は直径42cm、深さ52cm。瓦質土器の足鍋(図39 73)・火鉢(図39 72)が出土した。

SP452・453 (図31 図版9) 1地区A西側に位置する柱穴である。SP453がSP452に切られ、SP452は上部約1/3が斜めにSD1に切られている。規模はSP452が推定直径28cm、深さ42cm、SP453が直径23cm、深さ36cm。SP452からは土師器の杯(図39 71)・皿(図39 70)が出土した。

SP495 (図32 図版9) 1地区A中央部やや東側に位置する柱穴である。規模は直径35cm、深さ36cm。土師器の杯(図39 80)が出土した。

SP516 (図32 図版9) 1地区A中央部に位置する柱穴である。規模は直径22cm、深さ21cm。土師器の杯(図39 81)が出土した。

SP781 (図32 図版9) 1地区A中央部に位置する柱穴である。規模は直径25cm、深さ35cm。土師器の播鉢(図39 86)が出土した。

SP951 (図32) 1地区A中央部に位置する柱穴である。規模は直径40cm、深さ53cm。土師器の杯、瓦質土器が出土した。

SP1057 (図33 図版9) 1地区A南西部に位置する柱穴である。規模は直径42cm、深さ33cm。土師器の皿(図39 76)が出土した。

SP1129 (図33 図版10) 1地区B中央部南側に位置する柱穴である。規模は直径22cm、深さ30cm。土師器の皿(図39 79)がほぼ完成品で、柱の横に据えられたような形で出土した。

SP1156 (図33 図版10) 1地区B南西部に位置する柱穴である。規模は直径35cm、深さ35cm。土師器の杯(図39 74)、瓦質土器の足鍋(図39 75)が出土した。

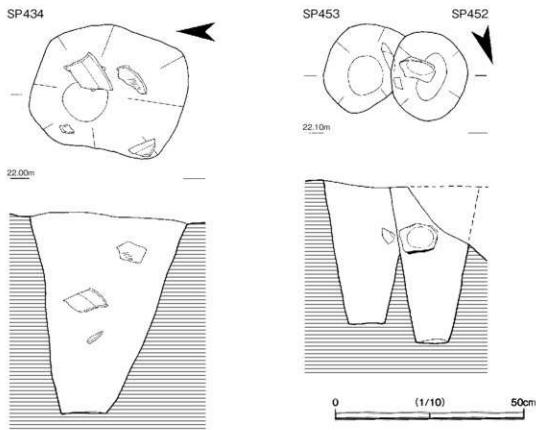


図31 SP434・452・453実測図

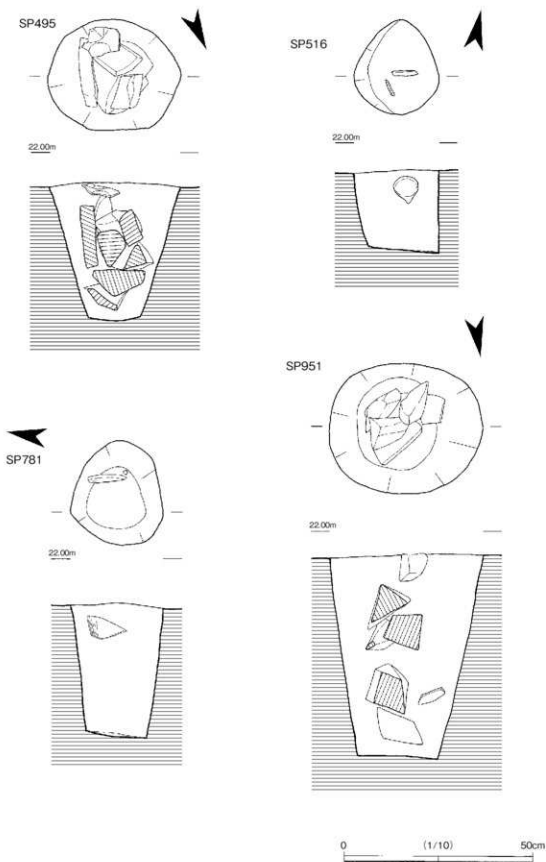


図32 SP495・516・781・951実測図

SP1405 (図33 図版10) 1地区A中央部に位置し、SB13を構成する柱穴である。規模は直径23cm、深さ31cm。瓦質土器の足鍋(図35 10)が出土した。

SP1421・1466 (図34 図版10) 1地区B西半中央部に位置する柱穴である。規模はSP1421が直径33cm、深さ44cm、SP1466が直径41cm、深さ48cm。SP1421がSP1466を切っている。SP1421から土師器の皿(図39 77)が出土した。

SP1423 (図34 図版10) 1地区A中央部に位置し、SB15を構成する柱穴である。規模は直径46cm、深さ40cm。瓦質土器の茶釜(図35 8)が出土した。

SP1470・1473 (図34 図版10) 1地区A西半中央部に位置する柱穴である。SP1470はSB14を構成する。規模はSP1470が直径51cm、深さ37cm。SP1470(埋土褐色粘質土)は、SP1473(埋土灰黄褐色粘質土)に切られ、SP1472(埋土黒褐色粘質土)、SP1475(埋土暗褐色粘質土)を切っている。SP1473の規模は直径29cm、深さ47cm。SP1470からは、土師器の杯(図35 11)、SP1472からは、土師器の皿(図39 78)、SP1473からは、土師器の杯(図39 67)・皿(図39 66)が出土した。

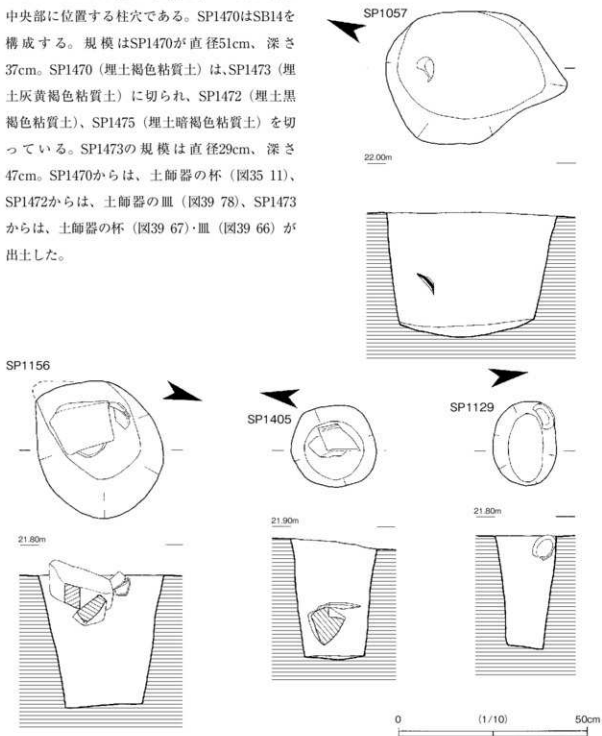


図33 SP1057・1129・1156・1405実測図

SP1501 (図34 図版10) 1地区A中央部に位置し、SB10を構成する柱穴である。規模は直径32cm、深さ55cm。SK 2の南端で検出された。土師器の皿(図35 1)・播鉢(図35 2)が出土した。

SP1503 (図34 図版10) 1地区A西半西側に位置し、SB17を構成する柱穴である。規模は直径70cm、深さ26cm。土師器の杯(図35 3・4)が出土した。

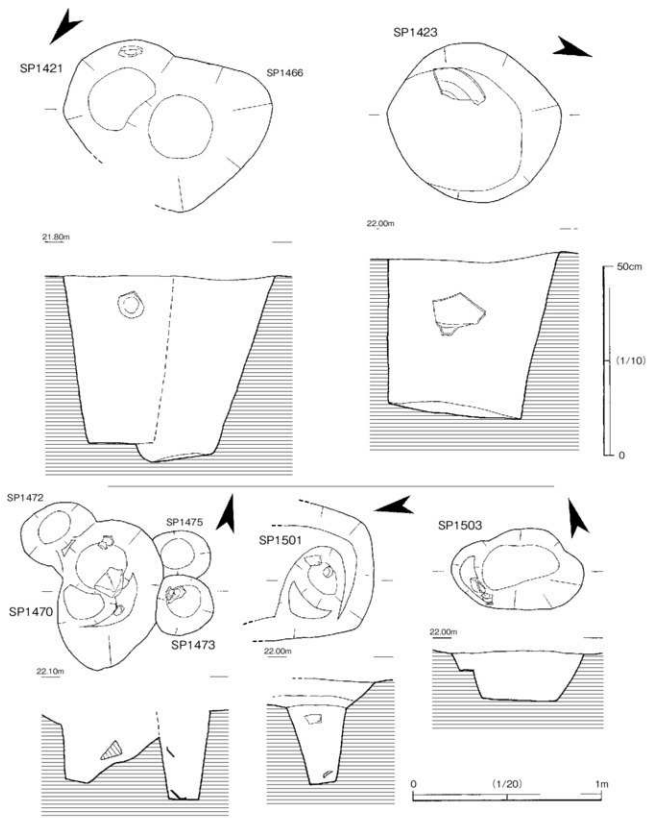


図34 SP1421・1423・1470・1473・1501・1503実測図

柳下遺跡

表1 掘立柱建物跡・柵列一覧

遺構番号	地区	規模(間)	棟方向	柱 間		面積(m ²)	出土遺物	備考
				貯 行	梁 行			
				建物の南東隅から(m)	建物の南東隅から(m)			
SB1	1地区A	3×2	N82° W	7.40(3.20・1.97・1.23)	5.40(3.04・2.36)	39.96	土師器、瓦質土器、青磁、陶器、鉄釘	15c~16c
SB2	1地区A	1×1	N74° W	1.95	1.51	2.94	土師器	
SB3	1地区A	1×1	N63° W	2.97	2.87	8.52	なし	14c? 西方向に庇
SB4	1地区A	2×1	N79° W	5.49(2.40・3.09)	2.82	15.48	土師器	15c~16c
SB5	1地区A	1×1	N32° W	2.84	2.50	7.10	なし	
SB6	1地区A	3×1	N60° W	5.85(2.00・2.00・1.85)	3.25	19.01	土師器、瓦質土器	15c
SB7	1地区A	1×1	N23° W	2.55	2.46	6.27	なし	14c?
SB8	1地区A	2×1	N61° W	4.74(1.85・2.89)	3.12	14.79	土師器、瓦質土器	15c~16c
SB9	1地区A	2×1	N68° E	4.05(2.07・1.98)	3.60	15.48	土師器	14c~15c
SB10	1地区A	2×1	N26° E	4.65(2.61・2.04)	4.22	19.62	土師器	14c後
SB11	1地区A	2×2	N21° E	4.36(2.24・2.12)	3.64(1.86・1.78)	15.87	土師器、白磁、瓦質土器	14c~15c
SB12	1地区A	3×2	N34° E	6.78(2.68・1.97・2.13)東隅から	4.90(3.02・1.88)	33.22	土師器、陶器	14c~15c
SB13	1地区A	2×1	N11° W	5.00(2.58・2.42)	2.67	13.35	瓦質土器	15c前~中
SB14	1地区A	2×2	N11° E	4.80(3.00・1.80)	3.50	16.80	土師器	14c~15c
SB15	1地区A	2×2	N73° W	5.38(2.78・2.60)	3.57(1.70・1.87)	19.21	土師器、瓦質土器、陶器	15c~16c
SB16	1地区A	2×1	N15° E	4.36(2.16・2.20)南西端から	2.59	11.29	土師器	14c
SB17	1地区A	3×2	N67° W	9.00(2.97・2.92・3.11)北東端から	6.35(3.73・2.62)	57.15	土師器、瓦質土器	14c 北方向に庇
SB18	1地区A	2×2	N56° W	4.78(2.84・1.94)	3.63(1.56・2.07)	17.35	土師器	14c~15c前
SB19	1地区A	2×1	N32° E	3.50(1.73・1.77)	2.66	9.31	土師器	14c?
SR20	1地区B	3×1	N67° E	4.91(1.62・1.75・1.64)	3.76	18.46	なし	14c?
SR21	1地区B	1×2	N23° E	3.61	3.21(1.75・1.46)	11.59	なし	14c?
SR22	1地区B	2×1	N18° W	5.82(2.84・2.98)	4.39	25.55	土師器、瓦質土器	15c?
SR23	1地区B	2×1	N14° E	4.00(2.04・1.96)	2.73	10.92	なし	
SR24	1地区B	2×2	N82° E	3.56(1.78・1.78)	3.10(1.54・1.56)	11.04	土師器	
SR25	1地区B	2×1	N 3° W	3.54(2.08・1.46)	3.05	10.80	土師器	
SR26	1地区B	3×2	N70° E	8.83(3.20・2.58・3.05)	5.13(2.73・2.40)	45.30	土師器、瓦質土器	14c前~中 南方向に庇
SR27	2地区B	1×1	N33° W	2.20	2.50	5.50	なし	
SR28	2地区B	1×1	N33° W	2.90	2.80	8.12	なし	
SA1	1地区C	6	N23° E	9.52(1.76・1.25・1.70・1.63・1.56・1.62)南西隅から		-	土師器	14c?
SA2	1地区B	2	N72° W	3.10(1.60・1.50)		-	なし	14c?
SA3	2地区A	1×1	N78° W	5.80(1.60・2.25・1.95)		-	なし	15c?

表2 溝状遺構一覧

遺構番号	地区	規模(m)		出土遺物	備考
		幅	長さ		
SD1	1地区A	0.48~1.18	22.70	0.02~0.23	土師器、瓦質土器、陶磁器、石鏝、鉄製品、黒曜石剥片、刀子
SD2	1地区A	0.45~0.88	15.25	0.02~0.27	土師器、瓦質土器、陶器、黒曜石剥片
SD3	1地区B	0.56~0.82	6.40	0.03~0.06	土師器
SD4	1地区B	0.36~0.52	3.85	0.03~0.15	
SD5	1地区B	0.35~0.45	3.10	0.02~0.06	土師器
SD6	2地区B	0.15~0.32	3.60	0.03~0.06	
SD7	2地区A	0.72~1.03	7.00	0.05~0.14	土師器、瓦質土器
SD8	2地区B	0.70~1.38	2.45	0.07~0.54	土師器、瓦質土器、陶磁器、水晶剥片

表3 土坑一覧

遺構番号	地区	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考	時代
			長軸	短軸	深さ			
SK1	1地区A	長方形	305	108	50	土師器、瓦質土器		14c後～15c前
SK2	1地区A	隅丸方形	170	80	16	土師器	SK144を切る	14c～15c前
SK3	1地区A	方形	145	107	19	土師器、瓦質土器、陶器、石鍋、鉄製品	SK144を切る	14c後～15c前
SK4	1地区A	長方形	267	120	37	土師器、瓦質土器、石製品		14c後～15c前
SK5	1地区A	長円形	210	125	13	土師器、鉄製品	SK140に切られる	14c～15c前
SK7	1地区A	不整形	83	60	39		焼土層あり	
SK8	1地区A	円形	52	48	15		焼土層あり	
SK9	1地区B	不整形	185	65	40	土師器	焼土層あり	
SK10	2地区B	円形	110	100	35		被熱部あり	
SK100	1地区A	不整形	120	118	28	土師器		14c後～15c
SK101	1地区A	長円形	105	77	11	土師器		
SK102	1地区A	長円形	109	90	10	土師器		15cか
SK103	1地区A	長円形	200	152	13	土師器、瓦質土器、陶器		16c以降
SK104	1地区A	円形	90	84	18	土師器		14c前～中頃
SK105	1地区A	不整形	105	70	14	土師器		14c前～中頃
SK106	1地区A	長円形	140	125	28	土師器、瓦質土器		15c
SK107	1地区A	長円形	95	84	16	土師器		14cか
SK108	1地区A	長円形	102	60	18	土師器		
SK109	1地区A	不整形	115	110	17			
SK110	1地区A	長円形	128	110	10	土師器		
SK112	1地区A	円形	74	67	21	土師器、瓦質土器		16c後～17c
SK113	1地区A	長円形	220	180	14	土師器、瓦質土器、石製品		14c後～15c前
SK114	1地区A	不整形	170	70	8	土師器		14c後～15c
SK116	1地区A	長円形	80	46	21	土師器		14c後～15c前
SK118	1地区A	円形	57	54	14	土師器		
SK120	1地区A	隅丸方形	110	75	36		底部に炭堆積	
SK122	1地区A	長円形	77	53	25	土師器		15c後～16c
SK123	1地区A	不整形	64	-	16			
SK124	1地区A	不整形	192	130	15	土師器、瓦質土器、青磁、陶器	SK139を切る	15c～16c
SK125	1地区B	円形	100	95	31			
SK126	1地区B	長円形	303	160	13	土師器、瓦質土器		14c
SK127	1地区B	不整形	135	90	15			
SK129	1地区B	円形	58	55	19	土師器		
SK130	1地区B	長円形	86	40	20	土師器		14c
SK133	1地区A	長円形	65	54	13			
SK134	1地区A	円形	80	75	12			
SK135	1地区A	長円形	75	38	10			
SK136	1地区A	不整形	115	80	22	土師器		14cか
SK137	1地区B	長円形	228	86	25			
SK139	1地区A	不整形	-	110	11		両端をSK124・SP798に切られる	15c前半以前か
SK140	1地区A	長円形	85	58	16	土師器	SK5を切る	14c
SK142	1地区A	長円形	67	54	8			
SK144	1地区A	長円形?	-	110	17	土師器	SK2・3に切られる	14c～15c前
SK145	1地区B	円形	115	112	46	土師器		14c前～中頃
SK147	1地区C	円形?	100	-	17		用水路に切られる	
SK148	1地区B	不整形	185	180	12			
SK149	1地区B	不整形	196	134	8			
SK150	1地区B	長円形?	250	-	12			
SK151	1地区A	長円形	68	45	12			
SK152	1地区A	長円形	68	41	12			
SK153	1地区A	長円形	110	70	16			
SK201	2地区B	不整形	75	65	11	弥生土器		
SK202	2地区A	長円形	113	54	29	土師器		14c
SK203	2地区A	長円形	98	82	25			
SK204	1地区B	長円形	123	92	18			
SK205	2地区B	長円形	110	85	20	土師器		
SK206	2地区B	不整形	120	78	18	土師器		
SK207	2地区B	長円形	112	95	25			
SK208	2地区A	長円形?	116	-	37			

3 遺物

調査の結果、柳下遺跡からは弥生土器、土師器、瓦質土器、輸入磁器（青磁）、国産陶磁器（備前系・肥前）、石製品（石鍋・砥石・剥片）、金属製品（刀子・鉄釘）等が出土した。中世の遺物が大半を占めており、土師器の皿・杯が最も多い。次いで土師器・瓦質土器の播鉢・こね鉢等の雑器類が多く、陶磁器類は非常に少ない。以下主な遺物について、概略を述べる。なお個々の遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

(1) 掘立柱建物跡出土土器 (図35 図版11)

1～12は掘立柱建物跡を構成する柱穴より出土した遺物である。

SB10

1・2はSB10出土土器で、ともにSP1501から出土した。1は土師器の皿で、ほぼ完形であり口径7cm、底径4.7cm、器高1.8cmを測る。色調は橙色である。底部外面には「L」字形のヘラ描き状の痕跡が見られる。2は土師器の播鉢で、口縁端部は面をもつ。体部内面に残存4条の卸目がある。

SB17

3～6はSB17出土土器で、3・4はSP1503、5はSP849、6はSP464から出土した。いずれも土師器の杯で、体部中位で屈曲し、口縁にかけて大きく開く器形を呈する。器壁はやや厚めで4～5mmを測る。色調は橙色系である。

SB15

7・8はSB15出土土器である。7はSP16、8はSP1423から出土した。7は瓦質土器浅鉢の底部片と思われる。底部は回転糸切りである。8は瓦質土器の茶釜である。外面の胴部中位に断面台形の突帯を貼り付ける。調整は外面が縦方向のハケ後ナデ、内面は横方向のハケを施す。

その他の掘立柱建物跡

9はSB19出土土器で、SP99から出土した。土師器のこね鉢または播鉢の口縁部片である。外面は指頭痕、内面は横方向のハケメが顕著である。10はSB13出土土器で、SP1405から出土した。瓦質土器の足鍋である。口縁端部は上方へ尖り気味におさめる。外面の一部に煤が付着する。11はSB14出土土器で、SP1470から出土した。土師器杯で、体部は内湾気味に立ち上がる。12はSB11出土土器で、SP1502から出土した。土師器の播鉢で、体部内面に5条1単位の卸目が放射状に巡る。内底面は卸目がない。

(2) 溝状遺構出土土器 (図36 図版11)

13・14は溝状遺構から出土した。なお、SD1・2からは土師器、瓦質土器等が多数出土したが、小片が多く、ごく一部しか図化できなかった。

SD1

13・14はSD1出土土器である。13は瓦質土器の茶釜の耳で、穿孔がある。14は石鍋の底部片である。滑石製で内外面ともケズリで成形しており、内面は成形痕が顕著である。

(3) 土坑出土土器 (図36-37 図版12-13)

15～61は土坑から出土した遺物である。

SK 1

15はSK 1出土の土師器杯である。底部片で、外面には右回転の糸切り痕が残る。

SK 2

16・17はSK 2出土土器である。いずれも土師器杯で、体部は直線的に開く。口縁端部は面取りが見られる。器壁は厚めで5～6mmを測る。色調は橙色系である。

SK 4

18～20はSK 4出土土器である。18・19は土師器皿である。19は口径に対して底径が大きく、器高が低い。口縁端部は尖り気味におさめる。色調は橙色系である。20は瓦質土器の播鉢で、口縁端部内面は肥厚する。体部内面に残存4条の卸目がある。なお、SK 4からは土師器の足鍋が出土しているが、残存状態が悪く図化できなかった。

SK 3

21～26はSK 3出土土器である。SK 3は出土状況等から土坑墓の可能性があり、遺物の一括性は高いと考えられる。21・22は完形の土師器皿で、21は口径7.9cm、底径5.5cm、器高1.6cm、22は口径7.0cm、底径5.2cm、器高1.5cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。色調は橙色系である。23は土師器の鍋で、口縁部片以外に、接合しない底部の同一個体片が

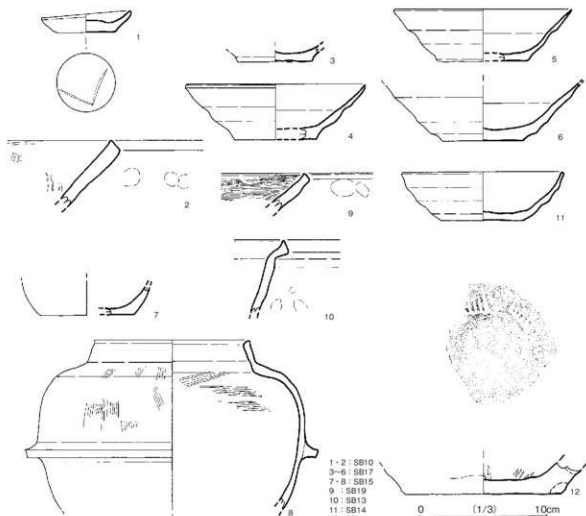


図35 出土土器実測図①

ある。口縁端部は受け口状に外反し、底部外面は格子目タタキ後ハケメ調整である。外面には煤が付着する。24は滑石製石鍋の口縁部片で、外面に鈎部を有する。25は瓦質土器の擂鉢で、口縁端部内面は肥厚する。内面に4条1単位の卸目が放射状に廻り、内底面にも「一」字状の卸目がある。底部外面には板目圧痕がある。26は瓦質土器のこね鉢で、接合しない同一個体片を図上復元した。底部は丸みを帯び、口縁部でやや外反する器形を呈する。口縁部は注口がある。色調は灰白色を呈し、口縁端部および内底面は炭素吸着により黒に近い灰色を呈する。底部外面には板目圧痕がある。

SK5

27～43はSK5出土土器である。SK5も出土状況等から土坑墓の可能性があり、遺物の一括性は高いと考えられる。27・28は土師器皿で、28はほぼ完形で口径7.2cm、底径4.6cm、器高1.5cmを測る。口縁端部は尖り気味におさめる。色調は橙色系である。29～43は土師器杯で、体部が直線的に立ち上がり、口縁付近でやや屈曲する器形を呈する。口縁端部は面取りと尖り気味におさめるものが見られる。法量は口径11～14cm、器高4cm前後におさまる。器壁はやや厚めで、5～6mmを測る。なお27・39は内外面とも赤色塗彩を施す。

SK202

44～48はSK202出土土器である。SK202では土師器皿4枚と杯が重なった状態で出土した。何らかの祭祀に伴うものと考えられ、遺物の一括性は非常に高い(図28参照)。44～47はいずれも完形の土師器皿で、法量は概ね口径：6.5cm前後、底径5cm弱、器高1.2cm弱におさまる。底径は口径と比して大きめで、器高は低い。体部は若干内湾気味に短く立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。色調は橙色系である。48はほぼ完形の土師器杯で、口径12.6cm、底径5.7cm、器高4.7cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、体部中位で若干屈曲し、口縁端部は面取りが見られる。色調は橙色系である。

SK124

49・50はSK124出土土器である。49は青磁の皿で、口縁端部が外折する。特徴から14世紀後半から15世紀初頭の龍泉窯産と考えられる。50は土師器杯の底部片である。なお、SK124からはSP434出土(図39・72)と同種類の瓦質土器火鉢の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

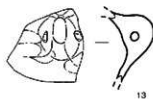
SK144

51・52はSK144出土土器である。51はほぼ完形の土師器皿で、口径7.0cm、底径4.4cm、器高1.6cmを測る。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部外面に黒斑がある。色調は橙色系である。52は土師器の擂鉢で、内面に5条1単位の卸目がある。外面の一部が灰色を呈しており、瓦質土器の焼成不良の可能性もある。

その他の土坑出土土器

53はSK116出土の土師器皿である。内面に煤が付着する。54はSK130出土の完形の土師器皿で、口径7.5cm、底径5.6cm、器高1.7cmを測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。内底面は指ナデを行い、外面は回転系切り痕をナデ消しており、内外面とも指頭痕が残る。55はSK107出土の土師器杯で、外面は剥離が激しい。体部は屈曲し、内面の底部と体部の境は不明瞭である。56はSK122出土のほぼ完形の土師器皿である。口径10.2cm、底径5.1cm、器高1.7cmを測り、器壁は2～3mmで薄い。色調は橙色系であるが、やや焼成にムラがあると思われ、底部は赤灰色である。

内外面とも赤色塗彩と思われる。57はSK140出土の土師器杯で、体部中位でやや屈曲し口縁にかけて大きく開く器形を呈する。器壁は4~5mmを測り、色調は橙色系である。58はSK106出土の瓦質土器の足鍋で、口縁端部は上方へ拡張し尖り気味におさめる。外面の一部には煤が付着する。59はSK113出土の瓦質土器足鍋の脚部で、先端部は獣脚を呈する。60はSK126出土の瓦質土器挿鉢である。体部内面に5条1単位の卸目が放射線状に巡り、内底面は「*」状に交差した卸目がある。底部外面は板目圧痕がある。61はSK112出土の瓦質土器火鉢である。堯形火鉢の口縁部および底部片で、底部には逆台形の三脚を貼り付ける。



13



14

13・14: SD1

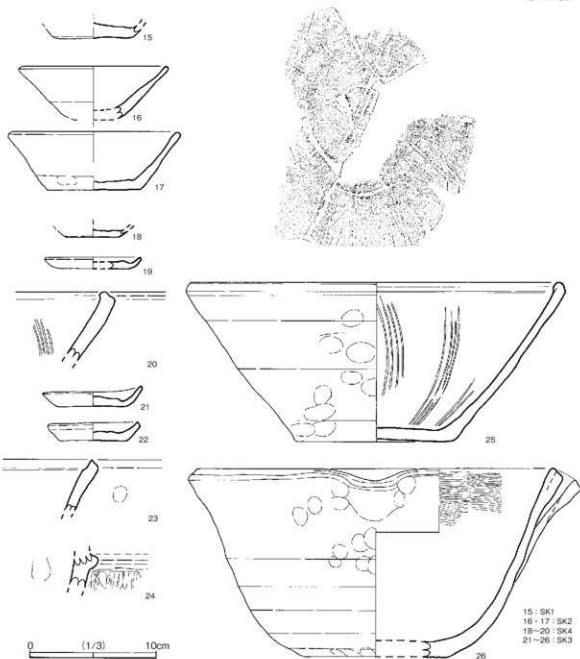


図36 出土土器実測図②

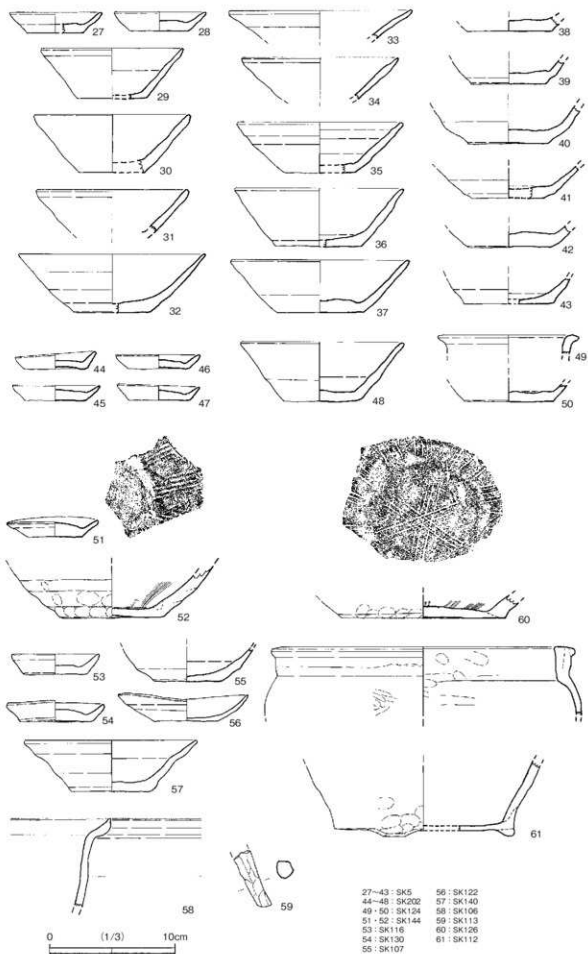


図37 出土土器実測図③

(4) 埋甕、不明遺構出土土器 (図38 図版14)

埋甕 1

62・63は埋甕1出土遺物である。62は陶器の皿である。内面は銅緑釉を施軸しており、内外面で色調が異なる。見込みは蛇の目軸剥ぎをする。17世紀後半の肥前産と思われる。63は瓦質土器の大甕の底部で、外面は器表の剥離が激しい。内面は板状工具によるナデ調整を行う。

SX7

64・65はSX7出土遺物で、ともに青磁の碗である。64は外面に衰退した蓮弁文と思われるヘラ描の文様がある。65は底部片である。内外面とも施軸しており、豊付および高台内はケズリにより軸剥ぎをする。これらの青磁碗は14世紀半ば～後半の龍泉窯産と考えられる。なお、SX7からは瓦質土器挿鉢や灰白色の土師器皿片も出土しているが、いずれも小片につき図化できなかった。

(5) 柱穴出土土器 (図39 図版14・15)

66～94は柱穴から出土した遺物である。

SP1473

66・67はSP1473出土遺物である。66は土師器皿で、体部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。色調は橙色系である。67は土師器杯で、体部中位で屈曲し、口縁部は大きく開く器形を呈する。口縁端部は面取りを行う。内底面はナデ調整で、中央部は凹む。色調は橙色系である。

SP301

68・69はSP301出土遺物である。68は完形の土師器皿で口径7.0cm、底径4.6cm、器高1.4cmを測る。口縁部は若干内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。内底面はナデ、色調は橙色である。69は土師器の杯である。体部中位で若干屈曲し、口縁部は開く。口縁端部は丸みをもつ。色調は橙色系で、内外面とも赤色塗彩と思われる。

SP452

70・71はSP452出土遺物である。70は土師器皿で、体部から口縁部にかけて大きくする。底部外面には黒斑がある。71は土師器の杯で、体部中位で屈曲する。色調は70・71ともに橙色系である。

SP434

72・73はSP434出土遺物である。72は瓦質土器の火鉢と思われる。口縁端部は内折し、体部外面は多条沈線が巡る。73は瓦質土器の足筒で、接合しない同一個体片を図上復元した。口縁端部は内側に屈曲し、底部外面には格子目タタキが残る。外面には多量の煤が付着する。

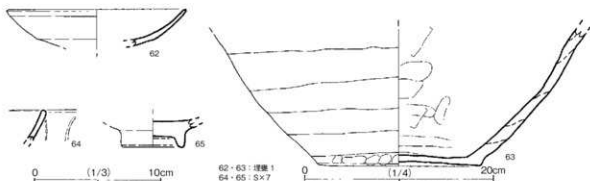


図38 出土土器実測図④

SP1156

74・75はSP1156出土遺物である。74は土師器の杯で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。色調は橙色である。75は瓦質土器足鍋で、基部に近い脚部片である。成形時の指頭痕が顕著である。

その他の柱穴出土土器

76～94は柱穴内より、単独または実測不能の土器細片とともに出土した。

76はSP1057出土の土師器皿である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味におさめる。口縁部のゆがみが大きい。内底面はナデを行う。色調は赤褐色である。77はSP1421出土の土師器皿で、体部は大きく外反し、口縁端部は面取り。口縁の一部はゆがむ。色調は橙色系である。78はSP1472出土の土師器皿で、外面は赤色塗彩の可能性がある。79はSP1129出土のほぼ完形の土師器皿である。口径7.45cm、底径4.2cm、器高1.5cmを測る。体部は内湾気味に大きく開き、口縁端部は尖り気味におさめる。色調は橙色である。80はSP495出土の土師器杯である。体部は内湾気味に立ち上がり、内底面はロクロ目が顕著である。色調は橙色系である。81はSP516出土の土師器杯である。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。底部から体部にかけて外面に黒斑がある。82はSP259出土の土師器杯で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。外面は器表に赤色塗彩の可能性がある。色調は橙色系である。83はSP2057出土で、土師器の椀または杯と思われる。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖る。色調は橙色であるが、やや黄味が強く、他の土師器皿・杯と比較して胎土がやや異なる。84はSP460出土の土師器鍋である。口縁端部は受け口状に外反し、外面は玉縁状に肥厚する。胎土中に赤色の斑があり、焼成はやや不良で断面は灰白色である。外面は煤が付着する。85はSP90出土の土師器の足鍋である。口縁部はやや外反し、口縁端部は上方へ尖り気味におさめる。86はSP781出土の土師器の挿鉢で、内面に残存5条の卸目がある。口縁部はやや肥厚し、端部は面を持つ。体部外面は指頭痕が顕著である。87はSP1474出土の土師器の挿鉢で、内面には9条1単位と思われる卸目がある。口縁端部内面は断面三角形の肥厚帯を貼り付け、やや広い面状を呈する。内外面の一部に黒斑がある。88はSP29出土の土師器の挿鉢で、内面には4条1単位の卸目が放射状に巡る。89はSP597出土の瓦質土器の挿鉢で、内面に残存5条の卸目がある。口縁端部内面には断面かまぼこ形の肥厚帯を貼り付ける。90はSP719出土の瓦質土器の挿鉢で、全体的に摩滅が激しく、内面の卸目は2条のみ確認できる。口縁端部内面はやや肥厚する。91はSP3出土の瓦質土器の挿鉢で、内面に残存3条の卸目がある。口縁端部内面は断面三角形の肥厚帯を貼り付ける。92はSP1183出土の瓦質土器の挿鉢で、注口部片である。93はSP202出土の瓦質土器挿鉢の口縁部片で、注口部は欠失する。口縁端部内面は肥厚帯を貼り付ける。94はSP326出土の青磁の椀である。体部は丸く立ち上がり、口縁端部は外反する。内外面とも施釉しており、これらの特徴から14世紀後半～15世紀初頭頃の龍泉窯産と考えられる。

(6) 弥生土器 (図40 図版15)

95～97は弥生土器である。2地区を中心に数点出土しており、95はSP2058、96はSK201、97はSP2100から出土した。95は甕の口縁から胴部片で、口縁部は「L」字状に外反する。96は甕または鉢の底部片である。97は甕の底部片で、上げ底を呈する。

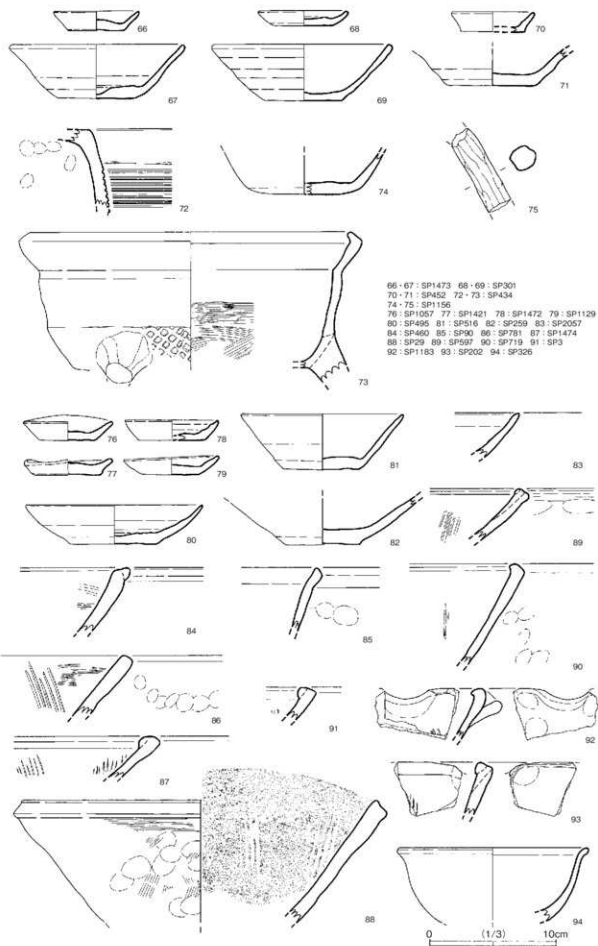
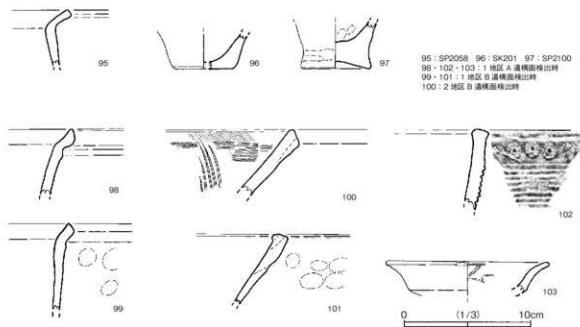


図39 出土土器実測図⑤



95 : SP2058, 96 : SK201, 97 : SP2100
 98・102・103 : 1地区 A 遺構面検出時
 99・101 : 1地区 B 遺構面検出時
 100 : 2地区 B 遺構面検出時

図40 出土土器実測図⑥

(7) 遺構面検出時出土遺物 (図40 図版15-16)

98～103は遺構面検出時出土遺物である。98, 99は瓦質土器の足鍋で、口縁部は外反し、端部は上方へ尖り気味におさめ。100は土師器の播鉢で、口縁端部は面をもち、内面に残存5条の鉤目がある。101は土師器の播鉢またはこね鉢で、口縁端部内面に断面三角形の肥厚帯を貼り付ける。摩滅が激しく、内面の鉤目は確認できない。102は土師器の火鉢で、口縁端部は外面に肥厚し、端部直下にスタンプによる菊花文が巡る。菊花文の下位は沈線が巡る。103は青磁の皿で、口縁端部に刻みがあり、後花皿と思われる。内面には線描きの文様がある。15世紀初頭の龍泉窯産と考えられる。

(8) 石製品・金属製品 (図41 図版16)

104～111は石製品で、104・106・110は遺構面検出時、105はSK4, 107はSD1, 108はSD2, 109はSP273, 111はSP98から出土した。104は砥石である。表面・裏面ともに使用痕が残る。側面3方向に手びき鋸痕がある。105は、表面に研磨痕があり、砥石の可能性もある。全体的に剥離が激しく、小片のため詳細は不明である。106は明き石である。河原礫を転用しており、側面4方向に敲打痕がある。107は打製石鏃の未製品と考えられる。石材は黒曜石である。108は黒曜石の剥片で、一部自然面が残る。裏面は打点が残る。109は玄武岩の剥片で、縁辺部は小さな剥離調整を行い、刃部状を呈する。110は玄武岩の剥片で、剥離面は大まかである。111は玄武岩の剥片で全体的に摩滅が激しく、詳細は不明である。一部自然面が残る。

112～121は金属製品で、112～120は鉄製品、121は銅製品である。112～115は刀子で、112～114はSK5, 115はSD1より出土した。112は茎、他は刃部である。116～119は鉄釘で、116はSP693, 117はSP1326, 118はSB1 (SP581), 119はSP1140より出土した。いずれも断面形が方形を呈し、116・117は頭部が「L」字形に外反する。なお118は、他の鉄釘と比較して形状が異なり、鉄釘以外の可能性がある。120はSK 3出土の不明鉄製品片である。「J」字状に湾曲し、一部鉄片を巻きつける。121はSX 7出土の不明銅製品で、波状に湾曲する。

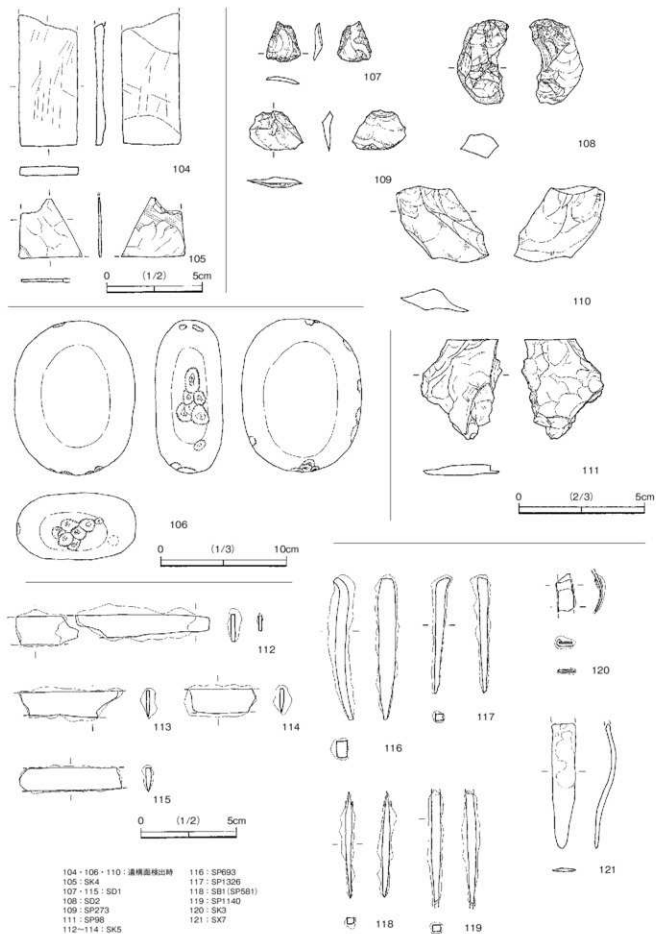


図41 出土石製品、金属製品実測図

表4 土器観察一覧

図号	No	地区	出土場所	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調 (内面) (外面)	調整 (内面) (外面)	備考
35	11	1地区A	SB10 (SP1501)	土師器	甗	(7.0)	4.7	1.8	細砂少量含む やん骨	やや軟質	褐色 褐色	回転ナデ・棒ナデ	底面跡が認められる(左) 底面内縁に浅く3本の縦線
35	11	2地区A	SB10 (SP1501)	土師器	甗			(5.3)	砂粒多く含む やん骨	やや硬質	灰白色 にぶい黄褐色	横ハケ 指ナデ	内面に浅く4本の目 溝が施されている
35	11	3地区A	SB17 (SP1503)	土師器	甗			5.8	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	褐色	摩滅により不明	底面跡が認められる(右?)
35	11	4地区A	SB17 (SP1503)	土師器	杯	(14.1)	(6.5)	4.4	細砂少量含む やん骨	やや軟質	にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	内面に目撃痕有り 胎土
35	11	5地区A	SB17 (SP1499)	土師器	杯	(14.0)	(7.0)	(4.1)	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	明赤褐色 明赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	底面跡が認められる(左) 胎土
35	11	6地区A	SB17 (SP1464)	土師器	杯	(6.4)	(4.6)		細砂少量含む やん骨	やや軟質	にぶい褐色	回転ナデ 回転ナデ	底面跡が認められる 胎土
35	11	7地区A	SB15 (SP1465)	瓦質土器	浅鉢	(7.4)	(2.8)		細砂少量含む やん骨	やや硬質	黄灰色 黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	底面跡が認められる
35	11	8地区A	SB15 (SP1423)	瓦質土器	茶釜	(12.2)	(13.4)		砂粒多く含む 粗	やや硬質	黄灰色 灰白色	横ハケ 横ナデ	胴部内面常盤目付け
35	11	9地区A	SB19 (SP199)	土師器	二石鉢 付土師器		(3.0)		砂粒少量含む やん骨	やや硬質	褐色 にぶい褐色	横ハケ 指ナデ	内外面の一部胎土
35	11	10地区A	SB13 (SP1465)	瓦質土器	足罎		(4.8)		砂粒多く含む やん骨	硬質	灰色 褐色	ナデ (底面痕有り)	外縁の一部胎土
35	11	11地区A	SB14 (SP1470)	土師器	杯	(12.6)	(6.4)	3.8	砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	底面跡が認められる(左)
35	11	12地区A	SB11 (SP1502)	土師器	甗	(12.4)	(2.5)		細砂少量含む やん骨	やや硬質	灰黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ ナデ	内面5本1章段の目目
36	11	13地区A	SD1	瓦質土器	茶釜		(5.6)		砂粒少量含む 粗	やや軟質	灰白色 灰黄褐色	指ナデ 指ナデ	穿孔有り
36	11	14地区A	SD1	石製品	石罎		(2.8)				黄褐色 灰白色	ナデ ナデ	内面痕跡が顕著 外縁に付着痕有り
36	12	15地区A	SK1	土師器	杯		(5.8)	(1.2)	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	褐色	回転ナデ?	
36	12	16地区A	SK2	土師器	杯	(11.4)	(4.1)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	灰黄色 褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り 胎土
36	12	17地区A	SK2	土師器	杯	(13.0)	7.2	4.1	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	にぶい褐色	回転ナデ (胎土痕有り)	口縁部は内面取り 胎土
36	12	18地区A	SK4	土師器	甗	(4.2)	(0.6)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	にぶい褐色	回転ナデ	底面跡が認められる(左)
36	12	19地区A	SK4	土師器	甗	(7.4)	(5.4)	0.9	砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色 にぶい褐色	回転ナデ? ナデ 回転ナデ	底面跡が認められる(左)
36	12	20地区A	SK4	瓦質土器	甗		(5.4)		砂粒少量含む やん骨	やや硬質	灰黄色 灰黄褐色	摩滅により不明	内面に浅く4本の目目 口縁部は内面取り
36	12	21地区A	SK3	土師器	甗	7.9	5.5	1.6	細砂少量含む やん骨	やや軟質	にぶい黄褐色	回転ナデ	摩滅により不明
36	12	22地区A	SK3	土師器	甗	7.0	5.2	1.5	細砂少量含む やん骨	やや軟質	褐色 明赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	底面跡が認められる(左) 底面跡が認められる(右)
36	12	23地区A	SK3	土師器	甗	(4.0)			砂粒少量含む 粗	やや軟質	浅黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ・横ナデ 横ハケ	縁沿い1周一帯胎土有り(底 面欠) 外縁の一部胎土
36	12	24地区A	SK3	石製品	石罎		(1.8)				黄灰色 灰白色	縦ナデ 縦ナデ	透孔部 胎土を有する
36	12	25地区A	SK3	瓦質土器	甗	(19.0)	12.4	12.0	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	灰白色	摩滅により調整不明	内面に浅く1章段の目目 口縁 部は内面取り
36	12	26地区A	SK3	瓦質土器	二石鉢	(27.9)	(11.0)	(4.8)	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	灰色・灰白色	横ハケ・ナデ	縁沿い1周一帯胎土有り(非 目溝) 口縁沿いの内面に浅く表裏 目溝
36	12	26地区A	SK3	瓦質土器	二石鉢	(27.9)	(11.0)	(4.8)	砂粒少量含む やん骨	やや硬質	灰色・灰白色	横ナデ・ナデ	縁沿い1周一帯胎土有り(非 目溝) 口縁沿いの内面に浅く表裏 目溝
37	12	27地区A	SK5	土師器	甗	(7.1)	(4.5)	1.6	細砂少量含む やん骨	やや硬質	褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底面跡が認められる 赤色胎土
37	12	28地区A	SK5	土師器	甗	7.2	4.6	1.5	細砂少量含む やん骨	やや軟質	にぶい褐色	回転ナデ	底面跡が認められる
37	12	28地区A	SK5	土師器	甗	7.2	4.6	1.5	細砂少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	底面跡が認められる? 胎土が施されていない
37	12	29地区A	SK5	土師器	杯	(11.1)	(5.4)	4.0	細砂少量含む やん骨	やや硬質	褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り 胎土
37	12	30地区A	SK5	土師器	杯	(12.1)	(5.2)	4.6	細砂少量含む やん骨	やや硬質	褐色	回転ナデ	内面の一部付着痕有り
37	12	31地区A	SK5	土師器	杯	(11.6)	(3.4)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色・灰褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	口縁部は内面取り 胎土
37	12	32地区A	SK5	土師器	杯	(6.0)	(4.4)		砂粒少量含む やん骨	やや硬質	灰褐色 赤褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り(左) 胎土
37	12	33地区A	SK5	土師器	杯	(14.4)	(2.2)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	全体跡に目溝
37	12	34地区A	SK5	土師器	杯	(12.2)	(3.3)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り 胎土
37	12	34地区A	SK5	土師器	杯	(12.2)	(3.3)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	全体跡に目溝
37	13	35地区A	SK5	土師器	甗	(12.8)	(5.6)	4.0	細砂少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り 胎土
37	13	36地区A	SK5	土師器	杯	(13.2)	(4.8)	4.5	砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色 にぶい褐色	回転ナデ・ナデ	底面跡が認められる 内面の一 部付着痕有り
37	13	37地区A	SK5	土師器	杯	(13.7)	(6.8)	4.5	細砂少量含む やん骨	やや硬質	にぶい黄褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り 胎土
37	13	37地区A	SK5	土師器	杯	(13.7)	(6.8)	4.5	細砂少量含む やん骨	やや硬質	褐色	回転ナデ	底面跡が認められる(左) 底面跡 の一部付着痕有り
37	13	38地区A	SK5	土師器	杯	4.4	(1.1)		砂粒少量含む やん骨	やや硬質	にぶい黄褐色 にぶい褐色	回転ナデ	口縁部は内面取り(左) 胎土
37	13	39地区A	SK5	土師器	杯	(5.8)	(1.8)		砂粒少量含む やん骨	やや硬質	浅黄褐色	回転ナデ	底面跡が認められる(右?) 赤色胎土
37	13	39地区A	SK5	土師器	杯	(5.8)	(1.8)		砂粒少量含む やん骨	やや硬質	褐色	回転ナデ	底面跡が認められる(右?) 赤色胎土
37	13	40地区A	SK5	土師器	杯	6.4	(3.1)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	全体跡に目溝
37	13	41地区A	SK5	土師器	杯	(5.8)	(2.5)		砂粒少量含む やん骨	やや軟質	褐色	回転ナデ	底面跡が認められる

37	13	42	1地区A	SK5	土師器	杯		6.5	(1.7)	砂粒少量含む 心小粒	やや硬質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
37	13	43	1地区A	SK5	土師器	杯		(7.0)	(2.2)	細粒少量含む 心小粒	やや軟質	にぶい褐色 褐色	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
37	13	44	2地区A	SK202	土師器	甕	6.25	5.0	1.2	砂粒多く含む 密	やや硬質	褐色 褐色	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右) 4枚中1枚有り	
37	13	45	2地区A	SK202	土師器	甕	6.8	4.7	1.2	砂粒多く含む 密	やや硬質	褐色	回転ナデ・ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
37	13	46	2地区A	SK202	土師器	甕	6.5	4.8	1.1	砂粒多く含む 密	やや硬質	褐色	回転ナデ・ナデ	4枚中上から2番目・3番目 底部回転ナデ有り(右) 4枚中上から2番目	
37	13	47	2地区A	SK202	土師器	甕	6.35	4.8	1.15	砂粒多く含む 密	やや硬質	褐色	回転ナデ・ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
37	13	48	2地区A	SK202	土師器	杯	12.6	5.7	4.7	砂粒少量含む 密	やや硬質	明赤褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右) 口縁部回転ナデ 無A・B	
37	13	49	1地区A	SK124	青磁	甕	(10.0)	(1.50)			脆質	粉・灰白色 黄褐色・灰色	ナデ ナデ	内面外口縁部 1区画から3区画まで	
37	13	50	1地区A	SK124	土師器	杯		(7.0)	(1.3)	細粒少量含む 心小粒	やや軟質	にぶい褐色 褐色	厚減により調整不明	底部回転ナデ有り(右)	
37	13	51	1地区A	SK144	土師器	甕	7.0	4.4	1.6	細粒少量含む 心小粒	やや軟質	明赤褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右) 底部外口縁部有り	
37	13	52	1地区A	SK144	土師器	鉢	(8.3)	(4.1)			やや硬質 やや小粒	浅黄褐色 灰白色	指ナデ 指ナデ	内面に5〜6枚程度の砂目	
37	13	53	1地区A	SK116	土師器	甕	(6.8)	(4.8)	(1.6)	細粒少量含む 密	やや硬質	褐色	回転ナデ	内面外口縁部 底部回転ナデ有り	
37	13	54	1地区B	SK130	土師器	甕	7.5	5.6	1.7	細粒少量含む 密	やや硬質	褐色	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右)・指ナデ 底部外口縁部回転ナデ有り	
37	13	55	1地区A	SK307	土師器	杯	5.3	(2.65)			やや硬質	にぶい黄褐色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右) 底部外口縁部有り	
37	13	56	1地区A	SK122	土師器	甕	10.2	5.1	1.7	細粒多く含む 密	やや硬質	褐色・赤褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部外口縁部有り(右) 赤褐色部分強い	
37	13	57	1地区A	SK140	土師器	甕	(13.6)	6.1	4.1	砂粒少量含む 心小粒	やや軟質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り(右) 赤褐色部分強い	
37	13	58	1地区A	SK106	瓦質土器	足竈		(7.0)			硬質	灰黄色 灰白色	ナデ ナデ	口縁部回転ナデ 無A	
37	13	59	1地区A	SK113	瓦質土器	足竈	押1A	(4.5)			やや硬質	灰白色 灰白色	指ナデ 指ナデ	外口の一處僅有り	
37	13	60	1地区A	SK126	瓦質土器	鉢		(13.0)	(1.9)			やや硬質	黄灰色 浅黄褐色	指ナデ 指ナデ	内面5〜6枚程度の砂目 内口縁部 「*」字に交互する砂目 底部外口縁部有り
37	13	61	1地区A	SK112	瓦質土器	火鉢	(28.0)	(18.8)			やや硬質	灰白色 灰白色	ナデ ナデ・ミヤギ・指ナデ	砂合しない同一個体有り 灰白色・混合色の回転ナデ(両面)	
38	14	62	1地区A	埋蔵1	陶器	甕	(7.0)	(3.8)			やや硬質	緑灰色 黄灰色	ナデ・ケズリ ナデ	内口縁部と内面は細粒 混入砂目が目視有り 1区画に1枚	
38	14	63	1地区A	埋蔵1	瓦質土器	大甕	8.9	(14.6)			やや軟質	灰色・灰白色	ナデ・指ナデ	外口縁部が微細い砂目 砂合部	
38	14	64	1地区A	SK7	青磁	碗		(2.5)			硬質	粉・灰白色 粉・オリーブ灰色	ナデ ナデ	外口に8〜9個程度の 1区中吸着部	
38	14	65	1地区A	SK7	青磁	碗	(4.8)	(2.1)			硬質	粉・灰白色 粉・オリーブ灰色	ナデ ケズリ	粉付・内面に細粒混入 1区中吸着部	
39	14	66	1地区A	SP1473	土師器	甕	(6.7)	(4.4)	1.55	砂粒少量含む 心小粒	やや軟質	褐色	回転ナデ・指ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
39	14	67	1地区A	SP1473	土師器	杯	(13.5)	5.9	4.2	砂粒少量含む 心小粒	やや軟質	褐色	回転ナデ	口縁部回転ナデ有り(右)	
39	14	68	1地区B	SP301	土師器	甕	7.0	4.6	1.4	細粒少量含む 心小粒	やや軟質	褐色	回転ナデ	口縁部回転ナデ有り(右)	
39	14	69	1地区B	SP301	土師器	杯	(13.7)	6.0	4.5	細粒少量含む 密	やや硬質	にぶい褐色 明赤褐色	回転ナデ 回転ナデ	口縁部回転ナデ有り(右)・赤色部 粉少 口縁部回転ナデ及び口縁部 底部 無A	
39	14	70	1地区A	SP452	土師器	甕	(6.4)	(5.0)	1.6	細粒少量含む 心小粒	やや軟質	明赤褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り・黒縁有り 底部外口	
39	14	71	1地区A	SP452	土師器	杯	6.9	(3.9)			やや硬質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り(右?) 底部外口	
39	14	72	1地区A	SP434	瓦質土器	火鉢	(6.3)				硬質	灰白色 灰褐色	指ナデ 指ナデ	口縁部回転ナデ 底部外口縁部	
39	14	73	1地区A	SP434	瓦質土器	足竈	(25.2)	(11.9)			やや硬質	にぶい黄褐色 黒褐色	指ナデ・指ナデ 指ナデ	外口および内面の一部 外口縁部が微細い 砂合しない同一個体を上段と 下段と	
39	14	74	1地区B	SP1156	土師器	杯	(5.4)	(3.3)			やや硬質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り 厚減が強い	
39	14	75	1地区B	SP1156	瓦質土器	足竈	押1A	(6.6)			やや硬質	灰白色 灰白色	指ナデ 指ナデ	底部の基部付 砂合部	
39	14	76	1地区A	SP1057	土師器	甕	(7.0)	4.6	2.0	砂粒少量含む 密	やや硬質	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	回転ナデ・ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
39	14	77	1地区B	SP1421	土師器	甕	(6.6)	5.1	1.35	細粒少量含む 粗	やや軟質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り 外口縁部 砂合有り・口縁部の一部のみ なし・口縁部回転ナデ	
39	14	78	1地区A	SP1472	土師器	甕	(7.2)	(5.2)	1.6	細粒少量含む 心小粒	やや軟質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り	
39	14	79	1地区B	SP1129	土師器	甕	7.45	4.2	1.5	砂粒少量含む 心小粒	やや硬質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り(右)	
39	14	80	1地区A	SP495	土師器	杯	(14.0)	(6.8)	3.1	細粒少量含む 密	やや軟質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り	
39	14	81	1地区A	SP516	土師器	杯	(12.8)	7.7	4.35	細粒少量含む 密	やや硬質	褐色	回転ナデ	底部回転ナデ有り(右?) 外口の一處僅有り	
39	14	82	1地区A	SP259	土師器	杯	5.8	(3.8)			やや硬質	にぶい褐色 褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部回転ナデ有り 外口赤色部砂合	
39	14	83	2地区B	SP207	土師器	杯または 杯		(4.5)			やや硬質	褐色 褐色	ナデ ナデ	外口の一處僅有り	

柳下遺跡

39	15	84	1地区A	SP400	土師器	竈		(5.1)	砂粒多く含む 密	褐色 やや赤褐色 にぶい青褐色	ハケ状ナデ	口縁部内丸、口縁部外側彫刻 縁部に滑り台、溝 外側に凹線あり	
39	15	85	1地区A	SP90	土師器	足鍋		(5.0)	砂粒多く含む 粗	淡黄色 淡黄色 淡黄色	厚縁により不明		
39	15	86	1地区A	SP781	土師器	磁鉢		(4.7)	砂粒少量含む 密	淡褐色 にぶい黄褐色	横ハケ 横ナデ、ナデ	内面5条1等分の罫目 外面部面直前直後 溝	
39	15	87	1地区A	SP1474	土師器	磁鉢		(3.2)	砂粒多く含む 密	褐色 にぶい褐色	ナデ	内面残存5条1等分の罫目 内外面の一部分直前直後	
39	15	88	1地区A	SP29	土師器	磁鉢	(27.8)	(9.6)	砂粒少量含む 密	にぶい褐色 にぶい褐色	横ナデ、ハケ残存ナデ	内面4条1等分の罫目 一部分外にも直前直後	
39	15	89	1地区A	SP997	瓦質土器	磁鉢		(4.1)	砂粒少量含む やや粗	灰白色 灰白色	横ナデ	内面残存5条の罫目 口縁部内面彫刻	
39	15	90	1地区A	SP719	瓦質土器	磁鉢		(7.9)	砂粒多く含む 粗	灰黄褐色 暗灰色	厚縁により調整不明	内面残存5条の罫目 口縁部内面彫刻	
39	15	91	1地区A	SP3	瓦質土器	磁鉢		(2.5)	細粒多く含む 粗	暗灰色 暗灰色	横ナデナデ	内外面の一部直線あり 内面残存5条の罫目 断面灰白 色、口縁部内面彫刻あり	
39	15	92	1地区A	SP1183	瓦質土器	磁鉢		(4.05)	砂粒少量含む やや粗	灰白色 暗灰色	厚縁により不明ナデ	口縁部内面彫刻あり 口縁部内面直前直後	
39	15	93	1地区A	SP202	瓦質土器	磁鉢		(4.1)	砂粒少量含む やや粗	灰白色 浅黄褐色	厚縁により不明 横ナデ、ナデ	口縁部内面直前直後 口縁部内面直前直後	
39	15	94	1地区A	SP426	青磁	椀	(14.6)	(5.7)	細粒少量含む 粗	灰白色 黄褐色	ナデ	内面残存5条の罫目 口縁部内面直前直後	
40	15	95	2地区B	SP2058	弥生土器	甕		(4.5)	砂粒多く含む やや粗	灰白色 灰白色	厚縁により不明 ナデ、縦ハケナデ	縁部直前直後直後直前 厚縁が激しい	
40	15	96	2地区B	SK201	弥生土器 (漆)	甕		(4.4)	(2.6)	砂粒多く含む 粗	灰白色 灰白色	厚縁により不明 ナデ	縁部直前直後直後直前 厚縁が激しい
40	15	97	2地区B	SP2100	弥生土器	甕		(5.3)	(3.6)	砂粒多く含む 粗	灰白色 にぶい褐色	指掘製 ナデ	縁部直前直後直後直前 厚縁が激しい
40	15	98	1地区A	遺構前 検出時	瓦質土器	足鍋		(5.3)	砂粒多く含む 密	黄灰色 灰白色	ナデ	断面灰白色	
40	15	99	1地区B	遺構前 検出時	瓦質土器	足鍋		(7.0)	砂粒多く含む やや粗	暗灰色 暗灰色	横ナデ	縁部直前直後直後直前	
40	15	100	2地区B	遺構前 検出時	土師器	磁鉢		(5.3)	砂粒少量含む 密	にぶい褐色 にぶい褐色	厚縁により不明 横ナデ、ナデ	内面残存5条の罫目 溝	
40	15	101	1地区B	遺構前 検出時	土師器	磁鉢 (二枚鉢)		(5.5)	砂粒少量含む 密	灰白色 灰白色	厚縁により調整不明 横ナデ、指ナデ	口縁部内面直前直後 口縁部内面直前直後	
40	16	102	1地区A	遺構前 検出時	土師器	火鉢		(6.1)	細粒少量含む 密	褐色 浅黄褐色	厚縁により調整不明	口縁部彫刻 口縁部内面にスタンプ状直走	
40	16	103	1地区A	遺構前 検出時	青磁	甕	(12.4)	(2.5)	精製 密	黄褐色 黄褐色	口縁部直前直後直前 口縁部直前直後直前	縁部直前直後直前直後直前 内外面とも縁部直前直後直前	

表5 石製品観察一覧

採回	図版	NO.	地区	出土場所	種別	器種	法量(cm)():復元値			重量 (g)	石材	備考
							長さ	幅	厚さ			
41	16	104	1地区A	遺構前 検出時	石製品	砥石	(6.9)	3.1	0.5	17.5	珪質頁岩	表裏両面に使用痕有り 側面3方向に手びき線痕
41	16	105	1地区A	SK4	石製品	砥石?	(3.1)	(3.3)	(0.15)	1.5	泥岩	表面に研磨痕有り 全体的に割離が激しい
41	16	106	1地区B	遺構前 検出時	石器	叩き石	12.1	9.5	5.2	945.0	花崗岩	側面4方向に敲打痕有り
41	16	107	1地区A	SD1	石器	打製石鏝	1.6	1.35	0.35	0.5	黒曜石	縁辺部は小さい割離調整により 整形する
41	16	108	1地区A	SD2	石器	剥片	3.4	2.05	1.2	6.7	黒曜石	背面には打点が残る 一部自然面が残る
41	16	109	1地区A	SP273	石器	剥片	1.55	2.1	0.4	0.8	玄武岩	縁辺部に刃部状割離
41	16	110	1地区A	遺構前 検出時	石器	剥片	3.0	3.7	0.9	7.3	玄武岩	背面は1面の割離面 縁辺部は刃部状を呈する
41	16	111	1地区A	SP98	石器	剥片	3.95	3.2	0.4	5.1	玄武岩	全体的に厚縁

表6 金属製品観察一覧

採回	図版	NO.	地区	出土場所	種別	器種	法量(cm)():残存値			備考			
							長さ	幅	厚さ				
41	16	112	1地区A	SK5	鉄製品	刀子	(3.3・7.1)	(1.5・1.1)	0.25	7.0	刀子の茎	刃部は欠損する	
41	16	113	1地区A	SK5	鉄製品	刀子	(5.3)		1.3	0.2	7.0	刀子の刃部	
41	16	114	1地区A	SK5	鉄製品	刀子	(3.5)		1.3	0.2	7.0	刀子の刃部	
41	16	115	1地区A	SD1	鉄製品	刀子	(5.4)		1.25	0.3	7.0	刀子の刃部	
41	16	116	1地区A	SP693	鉄製品	釘	(7.7)		0.9	0.35	7.0	釘	頭部は「L」字状に外折する 断面は長方形を呈する
41	16	117	1地区B	SP1326	鉄製品	釘	6.3		0.4	0.4	7.0	釘	頭部は「L」字状に外折する 断面は長方形を呈する
41	16	118	1地区A	SB1 (SP581)	鉄製品	釘	(5.7)		0.4	0.4	7.0	釘	断面は方形を呈する 釘以外の可能性有り
41	16	119	1地区A	SP1140	鉄製品	釘	(6.1)		0.4	0.4	7.0	釘	断面は方形を呈する
41	16	120	1地区A	SK3	鉄製品	不明	(2.0)		0.8	0.1	7.0	不明	「J」字状に湾曲し、ばね状を呈する 一部屈片を巻きつける
41	16	121	1地区A	SK7	銅製品	不明	(6.6)		1.3	0.15	7.0	不明	波状に湾曲する

4 まとめ

今回の調査では、14～16世紀代を中心とする掘立柱建物群や溝状遺構、土坑、土坑墓などが検出され、当該期の土師器を主体として、輸入陶磁器、瓦質土器などの土器類、石鍋や砥石などの石製品類、刀子や釘などの鉄製品類などの遺物が出土した。そうした中で、ここでは本遺跡の特徴的な項目についていくつか取り上げて、まとめたい。

(1) 遺構について

① 掘立柱建物群について

本遺跡からは、1・2地区合わせて28棟の掘立柱建物跡が検出された。最大の面積をもつSB17は3×2間、庇を除いた床面積は57.15㎡を測る。また、SB17を合わせて面積が30㎡を超える大型建物が4棟検出されている。こうした大型建物の中核として、大きく分けてⅠ～Ⅳ群の4期にわたって集落が形成されていたと考えられる。

Ⅰ群 棟方向はN70°Eである。SB7・9・20・22・26の5棟で構成される建物群である。他の建物群とは棟方向が大きく異なっている。角度に若干開きがあるが、SB5・13・24・25・27・28も同系列の棟方向を示すことから、同一の建物群を構成する可能性が高い。SB26は3×2間の総柱建物で、南西側に庇を設けている。このSB26が主屋的な建物と考えられ、付属棟としてSB20・22の2棟が考えられる。それぞれ、3×1間、2×1間の側柱建物である。SB20・22・26は、建物の北側がほぼ同列に並び、意識して建てたものと考えられる。遺物は出土量が少なく、土師器小片が多い。器形の判断できるものでは、杯、皿の順で出土している。土師器杯・皿については、小南裕一氏の編年のⅢ期にほぼ含まれ、14世紀前半～中頃に比定される。

Ⅱ群 棟方向はN67°Wである。SB3・10・11・17・21の5棟で構成される建物群である。角度に若干の開きがあるが、出土遺物等からSB16も同じ建物群の可能性が高い。SB17は3×2間の総柱建物で、北東側に庇を設けている。SB10は2×1間、SB11は2×2間の側柱建物である。SB17が主屋的な建物であると考えられ、SB10・11が付属棟とみられる。なおSB10とSB11は位置が重複することから、前後関係は不明であるが、建替えであると判断した。SB17は庇を除く床面積が57.15㎡を測り、柴屋俊介氏の分類による、超大型建物にあたる。また、SA1・2もほぼ同じ方向性をもつことから、この期の建物群は広範囲に広がると思われる。主屋の規模と合わせて、この集落の最盛期であったことをうかがわせる。遺物は出土量が少なく、土師器小片が多い。器形の判断できるものでは、杯、播鉢、皿の順で出土している。土師器杯・皿については、小南編年のⅢ期にほぼ含まれ、Ⅰ群との時期差はほとんど無いが、14世紀後半～15世紀とされる播鉢や瓦質土器片が出土していることから、Ⅰ群より若干後出する建物群であると判断した。

Ⅲ群 棟方向はN34°Eである。SB6・8・12・18・19の5棟で構成される建物群である。SB12は3×2間の総柱建物で、西側に庇をもっていた可能性もある。他の3期の主屋的な建物の棟方向が東西方向に展開しているのに対して、SB12は南北方向に展開している。このSB12が主屋的な建物で、SB6・8・18・19の付属棟が並ぶ。なおSB18とSB19はそれぞれの西側・東側が重なることから、同時期内での建替えであると判断した。Ⅱ群とは棟方向に大きな違いが認められないことから、同じ群の建替えによる棟方向の違いとも考えられるが、Ⅰ群・Ⅳ群に30㎡を超える建物が各1棟しかないことや、

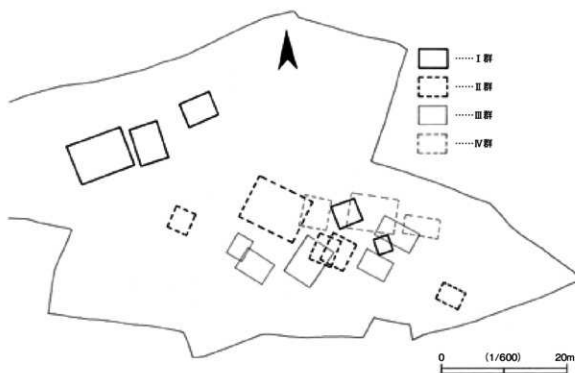


図42 掘立柱建物群変遷図

出土遺物が若干新しい時期の様相を呈することを考慮して別の群とした。また、配置や軸方向、出土遺物から考えて、SK3が屋敷敷としてこの時期に付属すると思われる。SK4についても、軸方向から何らかの付属施設である可能性が高い。遺物は土師器の小片が中心で、器形の判断できるものでは、土師器杯・鍋・播鉢、瓦質土器足鍋・播鉢等が出土している。土師器については、小南編年のⅢ～Ⅳ期に相当すると見られ、瓦質土器の編年と合わせて、14世紀後半～15世紀前半と考えられる。

Ⅳ群 棟方向はN82°Wである。SB1・4・14の3棟で構成される建物群である。SB1は3×2間の総柱建物で、床面積約40㎡と他群の主屋的建物と比較しても広い方ではないが、構成する柱穴の直径・深さ共に80cmを測り、他群の主屋的建物と建築方法や建物の性格等に違いがある可能性を指摘できる。このSB1を挟む形で、付属棟と考えられる、個柱建物のSB4とSB14が東西に建つ。角度に若干の開きがあるが、SB15・23も同じ建物群の可能性もある。なおSB14は、遺物の状況からSB1よりも若干古い時期の建物であると考えられる。このことからⅣ群の存在した時期は比較的長く、建て替えを繰り返しながら住み続けていたと考えられる。また、配置や軸方向、出土遺物から考えて、SK2が屋敷敷としてこの建物群に付属すると思われる。SK1についても、軸方向から何らかの付属施設である可能性が高い。SD1・2については、流路方向や出土遺物から、この建物群に関係する囲郭溝である可能性が指摘される。遺物は土師器の小片が中心で、器形の判断できるものでは、土師器杯・皿・鍋、瓦質土器鍋等が出土している。土師器については、小南編年のⅣ～Ⅴ期に相当すると考えられ、瓦質土器の編年も考慮して、15世紀後半～16世紀と考えられる。

② 溝状遺構について

1地区Aの西と東で検出されたSD1とSD2については、流路方向が掘立柱建物Ⅳ群とほぼ重なることから、同群の屋敷敷を区画するいわゆる囲郭溝である可能性がある。しかし、北側・東側を画する溝が検出されないことや、流路方向が必ずしも直角とは言い難い角度で交差することから、2条の

溝が同時期にセットで用いられたものではない可能性もある。

③ 土坑について

今回の調査では、土坑59基を検出した。特徴的な土坑としては、土坑墓の可能性が高い土坑（SK 2・3・5）が挙げられる。3つの土坑全て1地区Aの中央部付近から検出された。埋土のリン酸カルシウム分析からは土坑墓である確証は得られなかった。しかし、いずれの土坑からも土師器の杯や皿が出土しており、その出土状況や土坑の規模・形状等からも土坑墓としての特徴を有している。平面形が方形または隅丸方形を呈するSK 2・3の主軸方位を見ると、SK 2はSB 1、SK 3はSB12の棟方向とそれぞれほとんど同じことから、同時期に作られた屋敷墓であると考えられる。

(2) 遺物について

今回の調査では、遺構の密度に対して遺物の出土点数が多くないことが特徴的である。出土した土器類の傾向を、実測した土器類の割合でみると、土師器が約70%と多く、次いで瓦質土器が約20%である。土師器の中では杯が約50%と最も多く、皿が約30%、鉢類が約13%と続く。磁器は全て青磁で、全体の5%と少ないことがわかる。

① 出土土器から見る年代観について

土師器杯は、体部が屈曲し口縁部にかけて開くもの（A）と、体部から口縁にかけて直線的に開くもの（B）の2タイプが見られる。色調は鮮やかな橙色を呈し、Bの方がやや黄橙色系に近い印象をもつ。杯Aは、宇部市（旧楠木町）所在の旦ヶ原遺跡SK15および萩市（旧むつみ村）所在の岡田・江良遺跡SK15出土の杯と似ており、旦ヶ原遺跡出土資料に比べると器壁が厚く、橙色が強いが、ほぼ同時期におさまると考えられる。小南編年ではⅢ期に相当し、14世紀前半に位置付けられている。杯Bは、山口市所在の土井遺跡SK23出土の杯と器形が似る。古賀信幸氏による編年では、Ⅱ-A期に相当し、15世紀前半に位置付けられている。両氏の編年案から、杯Aが杯Bに先行すると考えられる。柳下遺跡では杯AとBが共伴する例や、AとBの中間の様相をもつものが見られる。古賀氏の編年ではⅠ-B期（14世紀後半）では杯Aと杯Bが共伴しており、杯Aは14世紀前半～後半、杯Bは14世紀後半～15世紀前半という概ねの年代観が与えられる。土師器皿については体部が外反するものと内湾するものが見られるが、杯のように顕著な様相の違いは見出せない。なお、土師器皿・杯の中に赤色塗彩のものが見られる。赤色塗彩については県内では14世紀後半～15世紀の土師器皿・杯で見られるが、いずれも灰白色系のものである。柳下遺跡出土のものは橙色系であり、今後の検討が必要である。

鍋・鉢等に関しては、「豊前型」・「西長門型」と呼ばれる山口県西部から九州東北部に分布域をもつ鍋・鉢類が多く出土している（鍋・鉢C）。防長型足鍋や插鉢に関しては器形や

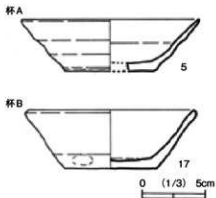


図43 杯の類型

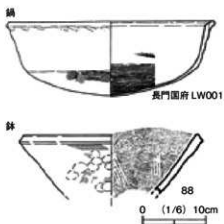


図44 鍋・鉢C

調整等が古手の様相を示しており、また焼成は土師質の割合が高い。防長型足鍋が盛行する15世紀後半以前の14世紀～15世紀前半の様相を呈する。

今回の調査で出土した遺物は主として14世紀～15世紀前半の様相を呈している。15世紀後半以降に関しては、遺物から判断すると、やや希薄になると考えられる。また埋壘1やSK112等の出土遺物から近世以降も集落は継続していたと考えられる。

(3) 集落の性格について

遺構や遺物の特徴を総合的に捉え、集落の性格を考察してみたい。

- ① 中心的な役割と見られる建物の面積が33～57㎡と、大型から超大型に位置付けられる。
- ② 各時期の居住期間については、建て替えが複数回行われたと考えられることから中期または長期であるとされる。少なくとも4期にわたる継続的な集落である。
- ③ 囲郭溝と考えられる溝状遺構や、屋敷墓と考えられる土坑墓が検出されている。
- ④ 遺物の出土量は少ない。青磁等輸入磁器は数点を数えるのみである。
- ⑤ 杯等の年代観から、14世紀～15世紀を中心に16世紀以降も営まれた集落である。

以上の特徴を、柴尾氏の分類に照らしてみると、2類に相当し、中世中期～後期を中心に近世まで続く自立的農民層の居住域であると考えられる。中心的な建物4棟の面積が全て30㎡以上を測り、氏の分類による「大型」以上の規模があることから、富裕な住民像を想起させる。しかし、出土遺物が少なく、とりわけ輸入磁器が数点しか出土していない点を考えると、生活水準の判定には一考の余地がある。

(4) おわりに

今回の調査では、厚狭川左岸地域、特に厚狭盆地の北東端地域での中世を中心とした生活の様子を知るための資料を得ることができた。1地区の溝状遺構から石材の剥片が検出されたり、2地区を中心に数点の弥生土器が検出されたりしていることから、古くは弥生時代から本遺跡または周辺地域で生活が営まれた可能性がある。また、埋壘1やSD8等から近世の陶器が検出されたことから、少なくとも江戸時代初期までは集落は存続したことがうかがわれる。段丘上の安定した土地に石東川の水資源を活用して、この地で運輸と生活を引き継いでいった人々の姿が想像される。

注

- 1) 小南裕一「長門域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡・市の瀬遺跡・南ヶ畑遺跡』山口県埋蔵文化財センター・豊北町教育委員会 2004
- 2) 柴尾俊介「九州北部における中世前期集落の諸問題」『研究紀要』16 財団法人北九州芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 2002
- 3) 岩崎仁志編『貝ヶ原遺跡』山口県埋蔵文化財センター 1996
- 4) 西田宏・相山茂樹編『岡田・江良遺跡』山口県埋蔵文化財センター 1998
- 5) 松島・福坂・渡辺編『よみがえる仁保の歴史1 土井遺跡』財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 1990
- 6) 古賀信幸「山口県における中世後期の土師器」山口県史編年会議発表資料 2001
- 7) 註6と同じ

参考文献

- 山口県「山口県史 資料編 考古2」2004
- 石井進・萩原三雄編『帝京大学中山梨文化財研究所シンポジウム報告書 中世社会と墳墓』名著出版 1993
- 桑原松「住居の歴史」現代工学社 1979
- 伊藤照雄・山内紀嗣編『長門国府 長門国府周辺遺跡調査報告Ⅱ』下関市教育委員会 1978
- 岩崎仁志「防長型土師器について」『山口考古』第19号 1990
- 岩崎仁志「瀬戸内西部一周防・長門を中心に」『第25回中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相』日本中世土器研究会 2006
- 谷口俊治「豊前地域の中世磁器—山陽道西部地域の設定に向けて—」『研究紀要』3 財団法人北九州芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 1989
- 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2 1989
- 木戸雅寿「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』1995

IV 今市遺跡調査の成果

1 調査の方法と経過

今市遺跡は、小高い山の北西麓の緩斜面に広がっており、柳下遺跡からほぼ南方向約500mのところに位置している。標高差はさほどないが、北側が高い地形となっている。

調査区は、調査前の現地水田区画に従い、北側高位面より1地区、2地区、3地区とした(図45)。調査は各地区に数カ所のトレンチを設定し、遺構面の確認を行った後、1地区より順に重機による表土除去を行った。

1地区は、盤土下約10cmの比較的浅い位置で灰黄色粘質土の遺構面を確認した。調査の結果、調査区全体にわたって葉脈状に広がる暗渠と規模の小さい柱穴十数個を検出した。また、調査区東端から伸びる3本の自然流路跡も確認した。遺物は、遺構面検出時からのもので、近世の陶磁器、土師器、瓦質土器などが出土した。地区全体が後世の水田化のための削平を受けていると考えられ、遺構の残存状況も悪く、遺物量も少ないものとなった。

1地区より約1m下がった2地区は、盤土下約20cm程度の所に黄褐色土層の遺構面を確認した。さらに、調査区の東側は灰黄色の粘土が堆積しており、水はけも悪い地域であったが、密度は濃くな

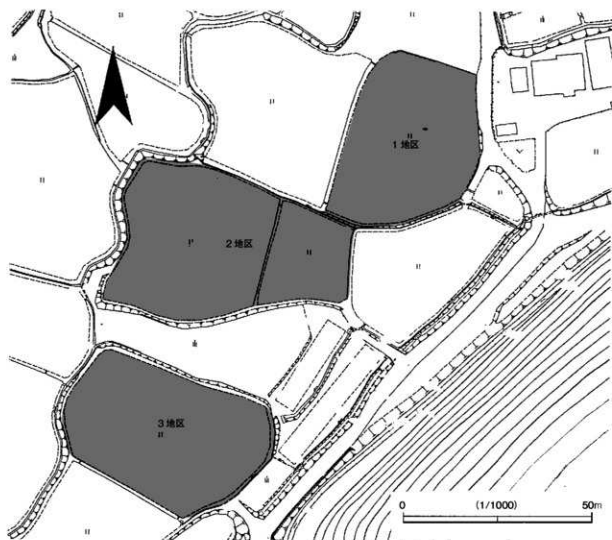


図45 調査区設定図

いものの近世の土坑や石組みの井戸（SE1）が確認され、それに伴う遺物が出土した。確認された土坑の中には、形状や出土遺物の状況から土坑墓の可能性も考えられる。井戸は掘り方周辺に方形に柱穴が配置されていた形跡があり、覆屋（SB2）を持つ井戸とみられる。つくりが粗雑で崩落の危険性があったため、底部まで確認することはできなかった。また、南端からは遺物包含層（包含層1）を確認した。南に向かって深く落ち込んでおり、調査区外へ広がるものと考えられる。特に、この包含層の西側からは近世の陶磁器などが集中して出土した。西側は焼土層が堆積する土坑1基、柱穴数十個の検出にとどまった。南端からは、比較的浅いものであるが遺物包含層（包含層2）が確認され、少量の弥生土器が出土した。中央部には、暗褐色土が堆積する落ち込みを確認したが、遺物は出土しなかった。

3地区は、盤土下約10cm程度の所に黄褐色土層の遺構面があるとして検出作業を行った結果、掘立柱建物跡1棟、土坑3基、遺物包含層2箇所を確認した。これらの遺構はすべて調査区の西側から検出しており、東側は2地区の東側同様灰黄色の粘土層が広がっていた。掘立柱建物跡（SB1）は規模も小さく、土坑のうち2基（SK17・18）は被熱部がみられるもののいずれも浅いもので遺物を伴っていない。黒褐色土が堆積していた2つの遺物包含層（包含層3・4）からは弥生土器片が出土しており、特に南側の包含層からは弥生土器がまとまった形で出土した。西側の地域は検出時より弥生土器片や石鏃等が出土しており、周辺からの流れ込みによるものと推察できる。

調査終盤は雨が多く水はけの悪い地域もあったため、排水等に時間を費やすこととなった。全体的に、遺構が少なく、分布も限られた地域ではあったが、必要な記録類を作成して現地での調査を終了した。

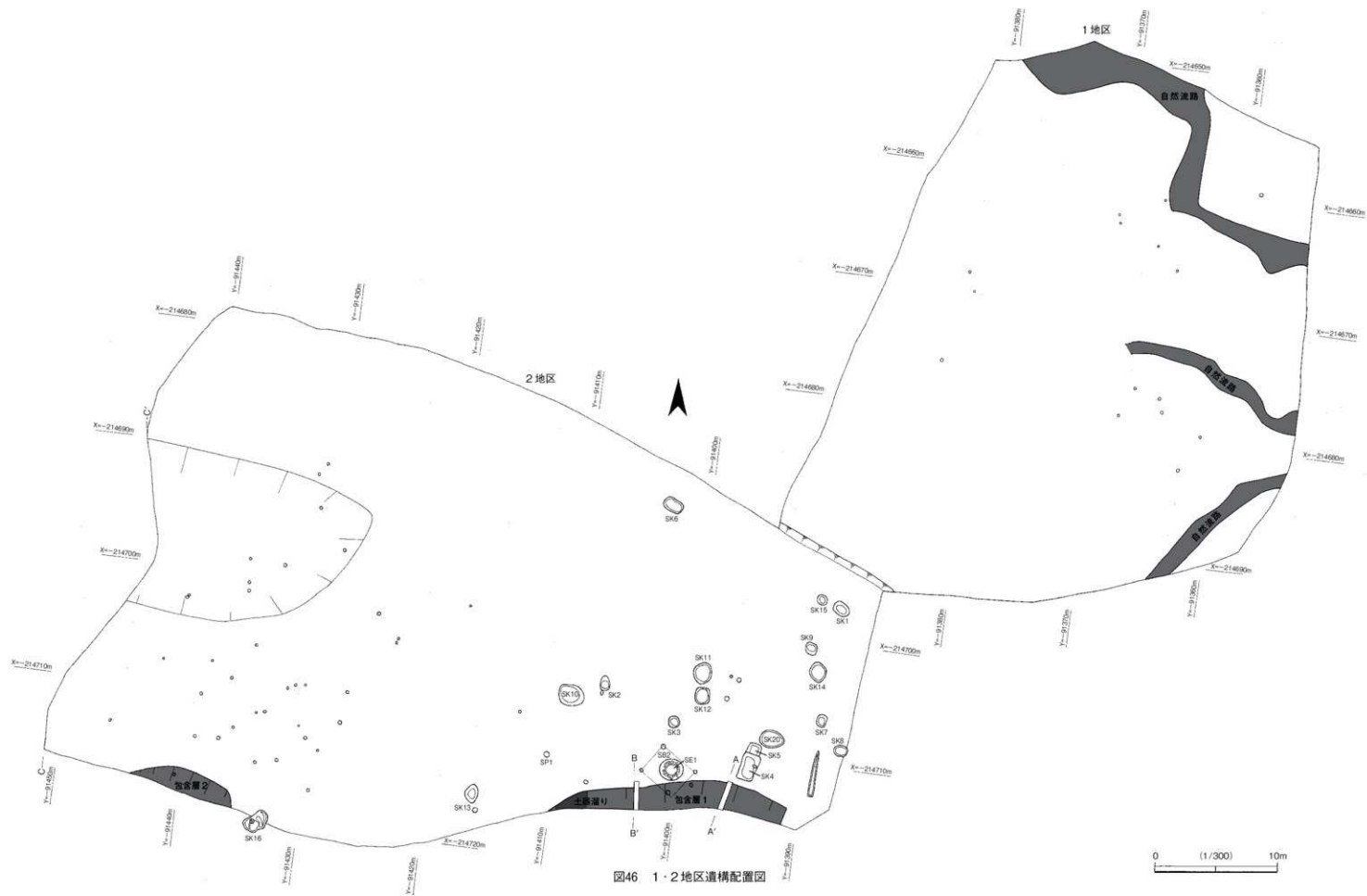


图46 1·2地区遺構配置図

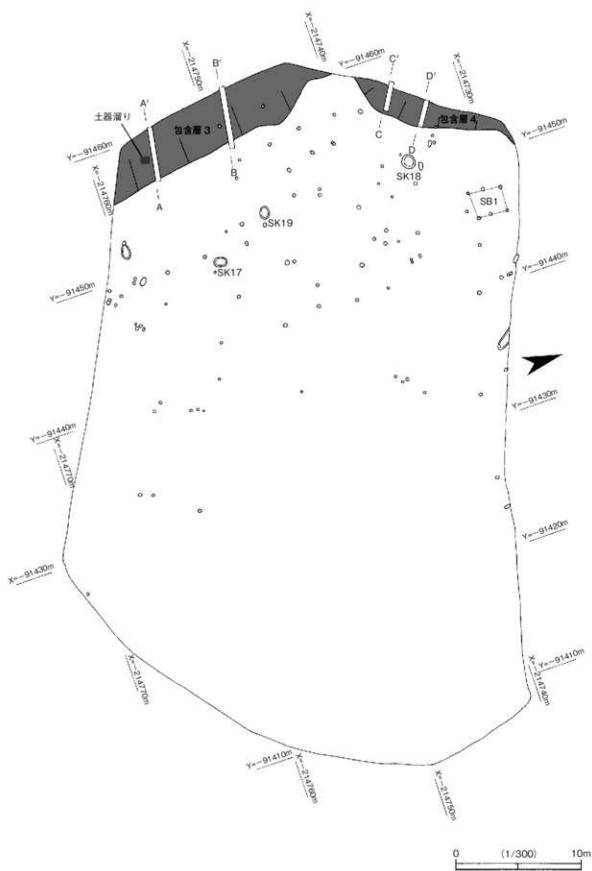
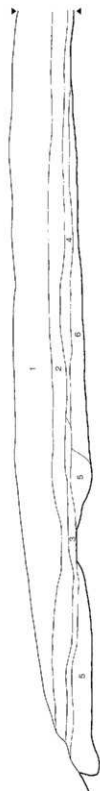


図47 3地区遺構配置図

今市遺跡

C 15.00m



- 土層記号
 1 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 2 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 3 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 4 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 5 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 6 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 7 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 8 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 9 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 10 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 11 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 12 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む
 13 埋藏地 (1073) 2.20 粘質土、小礫多量を含む

15.00m



15.00m

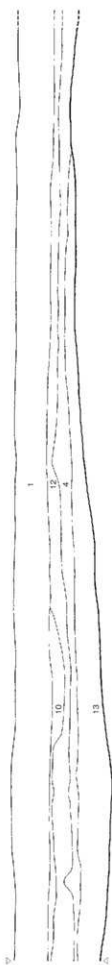


図48 2地区西壁土層断面図

2 遺構

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑20基で、全体的に遺構の残存状況は悪い。これは、もともと丘陵の緩やかな斜面に位置していた遺跡が、水田の平坦化のため、広範囲にわたって削平を受けたためと考えられる。特に、2, 3地区に比して標高の高い1地区からは、遺構をほとんど確認することができなかった。

(1) 掘立柱建物跡

今回の調査で確認された柱穴から、2棟の掘立柱建物を復元することができた。いずれも小規模なものである。

SB1 (図49 図版19)

3地区北西に検出された。桁行2間(2.60m)、梁行1間(2.00m)、床面積5.20㎡を測る。柱穴平面形は円形で、掘り方断面形は逆台形を呈する。建物を構成する柱穴から、弥生土器片が出土している。

SB2 (図49 図版19)

2地区南東に検出された。桁行1間(3.36m)、梁行1間(2.64m)、床面積8.87㎡を測る。柱穴がSE1を方形状に囲むように位置していることから、覆屋と考えられるが、南隣の柱穴は確認できなかった。

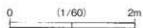
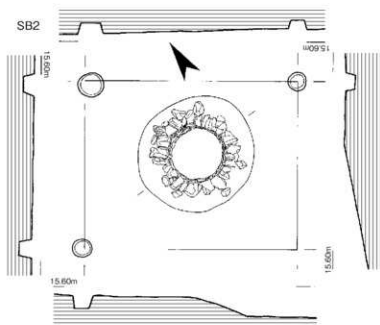
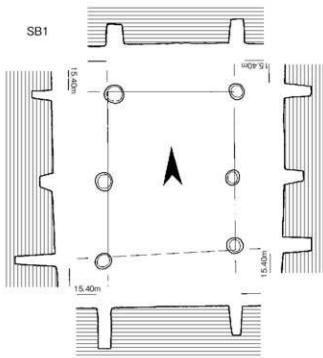


図49 SB1・2実測図

(2) 土坑

検出された20基の土坑のうち、17基が2地区、3基が3地区から検出されている。2地区の土坑は東側に集中しており、3地区の土坑はいずれも西側から検出されている。2地区の土坑のうち、10基から遺物が出土しており、近世のものと考えられる。3地区からは、被熱部をもつ土坑が2基検出されているが、遺物を伴わないため、時代は不明である。以下、主な土坑について取り上げる。

SK 1 (図50 図版20)

2地区北東に検出された土坑である。平面形は長円形を呈する。規模は長軸140cm、短軸102cm、深さ29cm。埋土は黒褐色砂質土にオリブ褐色砂質土が混ざる。遺構の北西部に遺物が集中していた。土師器の大甕(図59 14)が出土した。また、底部から長さ90cmの木材が検出されたのをはじめ、多数の木片が出土した。土壌分析の結果、寄生虫卵が検出されたことから、肥溜等の施設であった可能性もある。出土遺物から時期は、18世紀代と考えられる。

SK 2 (図50 図版20)

2地区南東に検出された土坑である。平面形は長円形を呈する。規模は長軸118cm、短軸81cm、深さ38cm。性格は特定できないが、石が乱雑に積み重なった状態で出土しており、その中から陶器の火入れ(図59 9)、瓦質土器、土師器などが出土した。出土遺物から時期は、17世紀後半～17世紀末と考えられる。

SK 3 (図50 図版20)

2地区南東に検出された土坑である。平面形は円形を呈する。規模は長軸89cm、短軸85cm、深さ44cm。瓦質土器の大甕(図59 13)、土師器が出土した。出土遺物から時期は、18世紀代と考えられる。

SK 4 (図51 図版20)

2地区南東に検出された土坑である。平面形は長方形を呈する。規模は長軸221cm、短軸136cm、深さ33cm。埋土は黒褐色弱粘質土単層である。SK 5を切っており、土師器の焙烙(図59 8)、陶磁器が出土した。出土遺物から時期は、18世紀代と考えられる。

SK 5 (図51 図版20)

2地区南東に検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈する。SK 4によって切られているため、規模の全容は把握できないが、短軸103cm、深さ28cm。埋土は灰黄褐色土の単層である。土坑の東側に石が並んで検出されており、石囲遺構か石積遺構ではないかと考えられる。

SK 6 (図52 図版20)

2地区北東に検出された土坑である。平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸165cm、短軸101cm、深さ30cm。埋土中に拳大の礫が含まれる。遺構の底部に、長軸にほぼ平行して木材が数本検出された。土坑墓の可能性が指摘できる。陶磁器(図59 1～5)、瓦(図59 6)、木製品の板(図62 107)が出土した。出土遺物から時期は、18世紀末～19世紀初と考えられる。

SK 7 (図53 図版20)

2地区南東に検出された土坑である。平面形は長円形を呈する。規模は長軸105cm、短軸76cm、深さ19cm。埋土は褐灰色単層である。陶器の椀(図59 10)、瓦質土器が出土した。出土遺物から時期は、17世紀後半～17世紀末と考えられる。

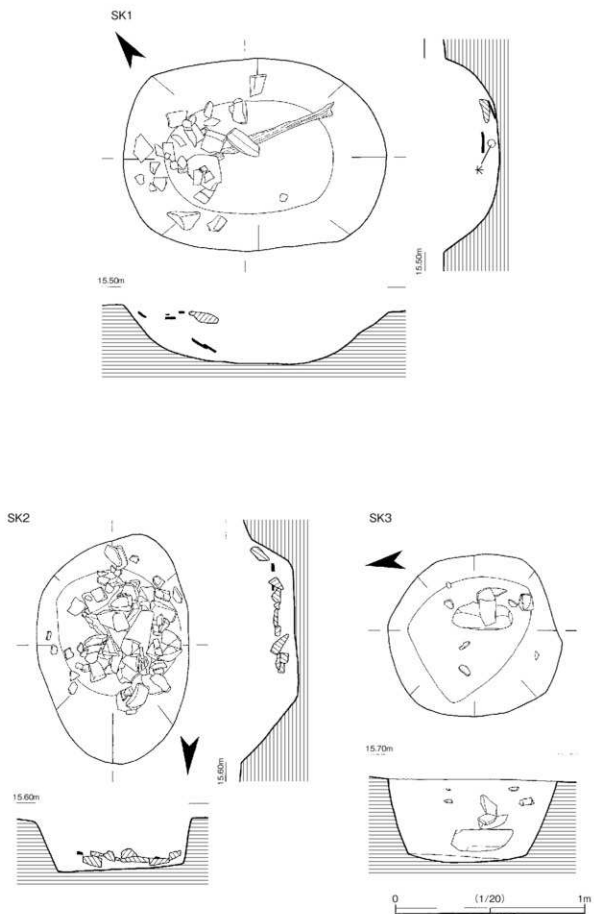


図50 SK1・2・3実測図

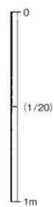
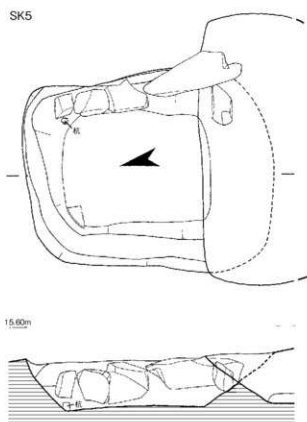
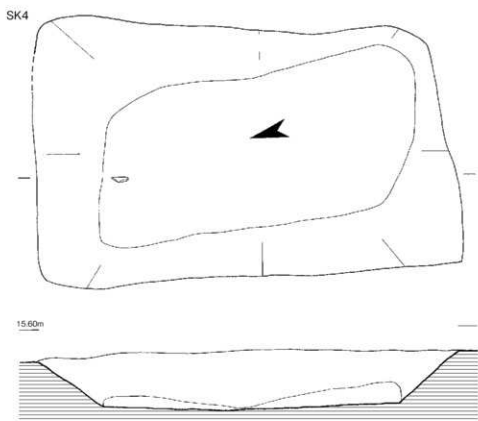


図51 SK4・5実測図

SK8 (図53 図版20)

2地区東端に検出された土坑である。平面形は長円形を呈する。規模は長軸107cm、短軸87cm、深さ23cm。埋土は黒褐色単層である。底部中央に、径20cm、深さ6cmほどの浅い落ち込みが認められた。陶器の椀(図59 12)、瓦質土器、土師器が出土している。出土遺物から時期は17世紀末と考えられる。

SK9 (図53)

2地区北東に検出された土坑である。平面形は円形を呈する。規模は長軸97cm、短軸94cm、深さ26cm。瓦質土器、土師器の小片が出土した。

SK16 (図54 図版20)

2地区南端に検出された土坑である。平面形は不整形を呈する。規模は長軸190cm、短軸127cm、深さ45cm。広い範囲にわたって焼土層が広がり、中央部からは、炭を含む層も確認された。弥生土器の甕(図59 7)が出土した。

SK17 (図54 図版21)

3地区南西に検出された土坑である。平面形は円形を呈する。規模は長軸103cm、短軸94cm、深さ11cm。南側の床面や壁に被熱した跡があり、内部で何らかの焼成が行われたと考えられる。埋土は、

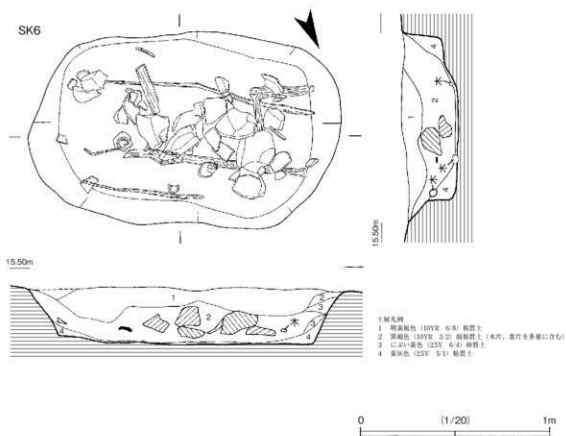


図52 SK6実測図

炭を含む黒褐色土の上に灰黄褐色土が堆積している。遺物は出土していない。

SK18 (図54 図版21)

3地区北西に検出された土坑である。平面形は円形を呈する。規模は長軸140cm、短軸130cm、深さ20cm。床面からは直径約10cm～20cm、深さ約6cm～17cmの小穴が9個検出されている。埋土は、にぶい黄褐色粘質土の上に暗オリーブ褐色粘弱質土が堆積している。土坑の縁に沿って被熱した跡があり、内部にも何らかの焼成が行われたと考えられる。

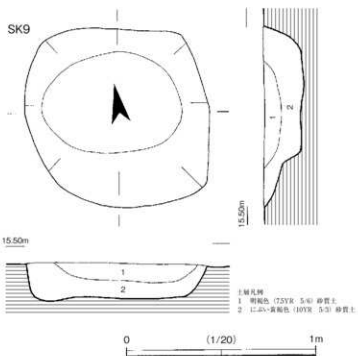
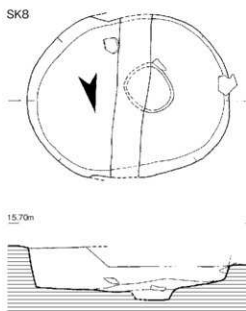
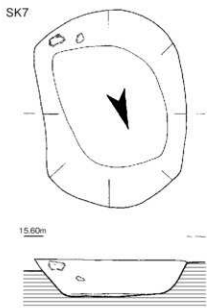


図53 SK7・8・9実測図

表7 土坑一覧

遺構番号	地区	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考	時代
			長軸	短軸	深さ			
SK1	2地区	長円形	140	102	29	土師器		18c
SK2	2地区	長円形	118	81	38	陶器、瓦質土器、土師器		17c後半～末
SK3	2地区	円形	89	85	44	瓦質土器、土師器		18c
SK4	2地区	長方形	221	136	33	土師器、陶磁器	SK5を切る	18c
SK5	2地区	隅丸方形	(126)	103	28	土師器、陶器	SK4に切られる	
SK6	2地区	隅丸方形	165	101	30	陶磁器、瓦、木製品		18c末～19c初
SK7	2地区	長円形	105	76	19	陶器、瓦質土器		17c後半～末
SK8	2地区	長円形	107	(87)	23	陶器、瓦質土器、土師器		17c末
SK9	2地区	円形	97	94	26	瓦質土器、土師器		
SK10	2地区	不整形	210	180	19	瓦質土器、土師器、陶器	複乱坑?	近世
SK11	2地区	円形	160	150	23	陶器、金属片、瓦質土器、土師器		18c後半
SK12	2地区	隅丸方形	130	110	50	金属片、土師器	複乱坑?	
SK13	2地区	不整形	150	110	32	金属片、陶器	複乱坑?	近世
SK14	2地区	長円形	160	140	24	陶器		近世
SK15	2地区	長円形	90	70	16	瓦質土器		
SK16	2地区	不整形	190	127	45	弥生土器	焼土層、炭を含む層あり	
SK17	3地区	円形	103	94	11		被熱部あり	
SK18	3地区	円形	140	130	20		被熱部あり	
SK19	3地区	長円形	100	70	15	弥生土器	風倒木痕	
SK20	2地区	長円形	190	140	23			

(3) 井戸

SE1 (図55 図版21) 2地区南端において検出された。直径1.38m、深さ2.36m以上の規模で、覆屋をもつ。石の組み方は比較的荒く、下方に向かっていくに従いやや幅が狭まっていく。作業の安全上、実測は上部のみにとどめた。

(4) 遺物包含層

2地区から2箇所、3地区から2箇所の遺物包含層が確認された。いずれも調査区の端に位置しており、調査区外へ続くものと考えられる。各包含層について述べる。

① 2地区遺物包含層

包含層1 (図56-57 図版21) 2地区南端東側に位置する。トレンチを設定して土層を確認したところ、南に向かって落ち込んでおり、最大約50cmの深さを測った。埋土は2層からなり、地山面の上に黒褐色弱粘質土が堆積し、さらに明黄褐色弱粘質土が堆積している。包含層西端部から集中して遺物が出土している。近世の陶磁器 (図61 24~41・図62 44~60)、土師器の皿 (図62 42・43)、弥生土器 (図63 61) が出土した。

包含層2 2地区南端西側に位置する。比較的浅い堆積であったが、包含層1同様、南に向かって落ち込んでいる。弥生土器 (図63 62・63) が出土した。

② 3地区遺物包含層

包含層3 (図58 図版21) 3地区西端南側に位置する。西側に向かって落ち込んでいる。埋土は3層からなり、褐色、明黄褐色の強粘質土の上に黒褐色粘質土が層をなし、西端部に一部明黄褐色粘質土が堆積している。南部から集中して遺物が出土している。弥生土器 (図63 64~73) が出土した。

包含層4 (図58) 3地区北西端に位置する。調査区の落ち込みにあたる。埋土は、多いところでは4層からなる。黄褐色粘質土、明黄褐色粘質土の上に暗褐色粘質土が堆積し、西端部に一部黄褐色粘質土が堆積する。弥生土器が出土した。

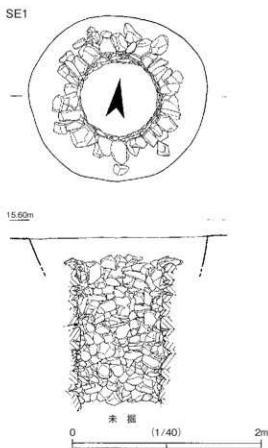


図55 SE1実測図

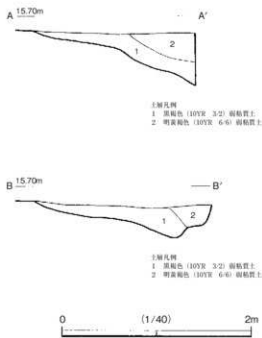


図56 包含層1土層断面図

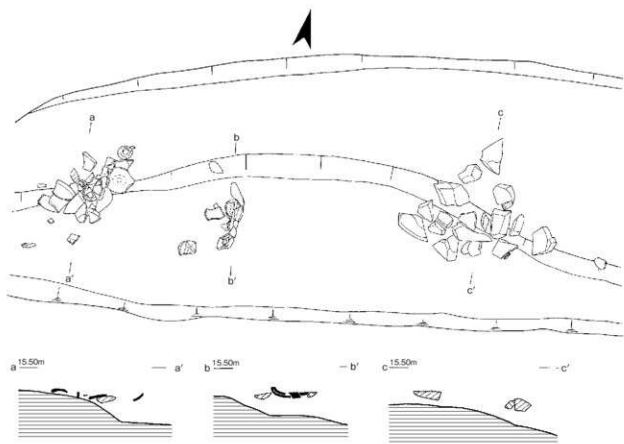


図57 包含層1土器溜り実測図

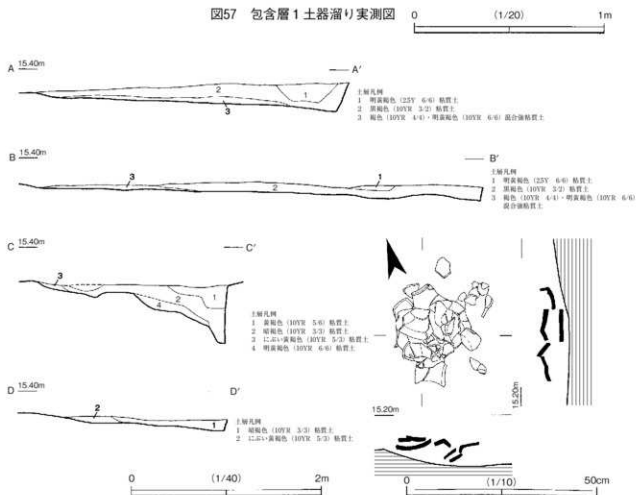


図58 包含層3・4土層断面図、包含層3土器溜り実測図

3 遺物

調査の結果、今市遺跡からは弥生土器、土師器、瓦質土器、国産陶磁器、瓦、石製品（打製石鏃）、木製品、金属製品（銭貨）等が出土した。近世の遺物が大半を占めるが、遺物包含層を中心に弥生土器も多数出土した。

(1) 土坑出土遺物 (図59 図版22)

1～14は土坑出土遺物である。SK 6からは遺物がまとめて出土した。

SK 6

1～6はSK 6出土遺物である。1は肥前磁器の広東碗の蓋で、外面には呉須による葉の文様が巡る。18世紀末～19世紀初頭。2は磁器の広東碗の底部片である。外面は高台付近に三重圏線、高台内面にも一重圏線が巡る。内面見込みは一重圏線が巡り、中央に「壽」か「凱」がかなりくずれた文字文がある。高台は削り出し高台で、畳付は軸剥ぎ。高台のつくり等から18世紀末～19世紀初頭の肥前磁器を模倣して在地窯で生産されたものと思われる。3は萩焼の碗である。内外面とも薬灰釉を施軸、高台は露胎である。内面の一部に付着物がある。4は青磁の仏花瓶で、焼成は不良である。外面に青磁釉を施軸、体部から底部内面は露胎である。畳付は軸剥ぎである。肩部には把手を貼り付ける。18世紀後半～19世紀前半波佐見産。5は陶器の土瓶で、体部はそろばん形を呈する。注口部は欠損する。外面の体部上半および内面の体部下半に土灰釉を施軸し、外面の体部下半には煤が付着する。蓋を伴う。在地産か。6は平瓦である。表裏両面とも製作時の調整痕があり、表面は燻しによる光沢がある。

その他の土坑出土遺物

7はSK16出土の弥生土器の甕である。外面はハケ調整である。全体的に剥離が激しい。8はSK 4出土の土師器の焙烙で、口縁部内面は丸く肥厚する。外面は型成形で、煤が付着する。9はSK 2出土の陶器の火入れである。外面は刷毛目で、内面および底部外面は露胎。17世紀後半の肥前産である。10はSK 7出土の陶器の碗で、内外面とも刷毛目である。畳付は軸剥ぎ。17世紀後半の肥前産である。11はSK11出土の陶器の皿である。灰釉を施軸し、内面見込みは蛇の目軸剥ぎ後白化粧をする。底部外面は露胎である。蛇の目軸剥ぎの技法から18世紀後半の肥前産と考えられるが、底部のつくりは古い様相を示す。12はSK 8出土の陶器の碗で、呉器手碗である。内外面とも透明釉を施軸する。17世紀末の肥前産である。13はSK 3出土の瓦質土器の大甕である。口縁部外面には2条の衰退した沈線が巡る。内面は剥離が激しい。成形時の接合痕が顕著である。14はSK 1出土の土師器の大甕である。口縁部外面には2条の沈線が巡る。内面はハケ調整で、口縁部と胴部の境は段状を呈し、指頭痕が顕著である。

(2) 井戸出土遺物 (図60 図版22・23)

SE 1

15～23はSE 1出土遺物である。15は磁器の皿である。内面に呉須による斜格子状の文様を描き、口縁部は口紅状に呉須を塗る。内外面とも施軸、畳付は軸剥ぎである。16は磁器の碗で、外面に呉須で文様を描く。口縁部内面は二重圏線が巡る。17は磁器の色絵碗である。外面は赤・黒・青・緑の絵具で施文する。内面は赤の絵具の圏線が巡る。18は磁器の碗で、外面は呉須による文様、内面見込みは一重圏線が巡る。畳付は軸剥ぎである。なお、18は高台が薄く、径・全体の器形等から碗の蓋の

可能性も考えられるが、破片につき詳細は不明である。19は磁器の徳利の底部片である。外面は透明釉を施軸、内面は露胎でロクロ成形痕が顕著である。髷付は軸剥ぎで、砂粒が付着する。高台外面に一重圈線が巡り、接合しない同一個体片より、胴部外面にも施文が確認できる。焼成が悪く、呉須の発色が悪い。20は陶器の鉢で口縁端部は玉縁をなす。内外面とも薬灰釉を施軸する。萩・須佐系か。21は窯道具のトチンである。上半部を欠損する。22は椀瓦と思われる。表面は燻しによる光沢を持つ。裏面は器面がやや粗い。破断面の一部に研磨痕が見られ、再加工された可能性もある。23は赤瓦の袖瓦である。側面は「L」字形に屈曲し、外面は鉄釉を施軸する。

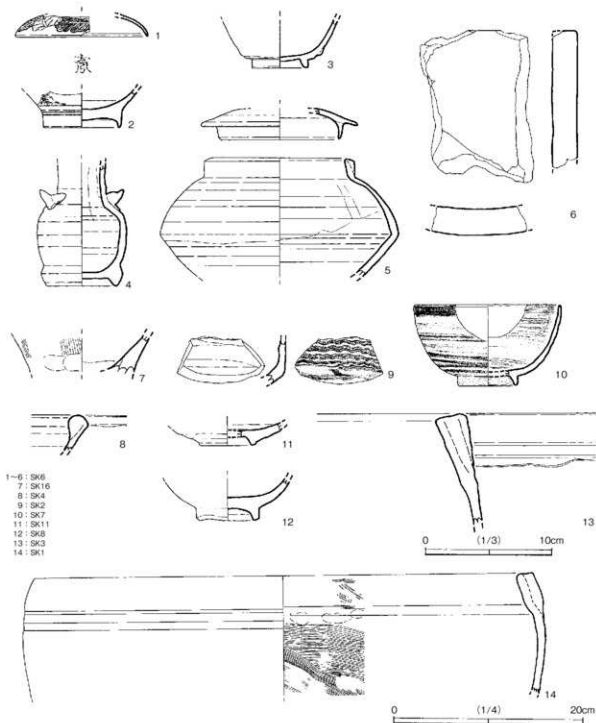


図59 出土土器実測図①

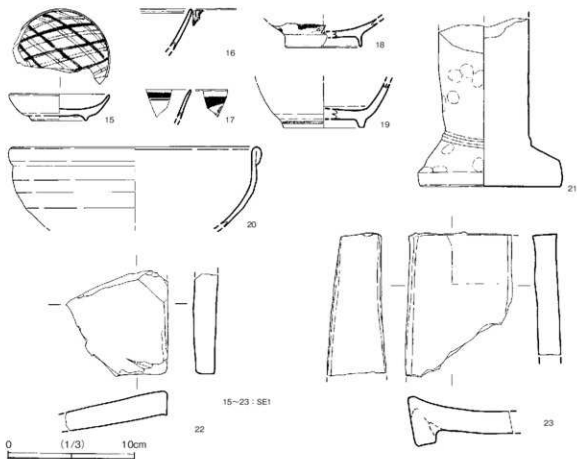


図60 出土土器実測図②

(3) 遺物包含層出土遺物 (図61~63 図版23~25)

包含層 1

24~60は包含層1から出土した。そのうち26・28・29・31~36・40・42・43・45・47・48・53・55・57~60は包含層1内の土器溜りから出土した。24・25は磁器の皿である。ほぼ完形で24は口径9.2cm、底径4.1cm、器高2.55cm、25は口径9.6cm、底径4.2cm、器高2.25cmを測る。法量および施文・調整が共通しており、同じ規格で生産されたものと考えられる。内面は呉須で圈線および文様を描く。内外面とも施釉、畳付は釉剥ぎで、内面見込みは蛇の目釉剥ぎ後白化粧を施す。高台は凹底状を呈する。26は磁器の角皿で、接合しない口縁部片および底部片を図上復元した。内面見込みは菊水文、口縁部内面は竹文、外面は宝文と七宝文、高台外面には雷文帯を呉須により施文する。高台内面には銘款があり、「大明年製」と思われる。27~29は小丸椀である。体部から口縁部にかけてやや内傾気味に立ち上がる。27は外面に呉須による帆舟文を施文する。28は呉須の線描き文様があり、外面に花文、口縁部内面に雷文帯を施文する。19世紀前半から中頃の肥前磁器に見られる技法である。29はコバルト釉により施文する。ほぼ完形に近く、口径6.7cm、底径3.3cm、器高5.6cmを測る。30は磁器皿で、内面に呉須で施文する。呉須の発色は緑色に近い。31~33は磁器の端反碗で、口縁部がやや外反する。31は口縁部内面に二重圈線が巡る。32は外面に呉須による文様を描き、口縁部内面には文様帯を施文する。33は外面に呉須による文様を描き、口縁部内面には二重圈線が巡る。34は磁器の椀で内面見込みにハマ跡がある。35・36は磁器の端反碗である。35は外面に松竹梅文を施文する。内面は口縁部と見込みに圈線

が巡る。呉須の発色は悪く、黒味を帯びて淡い。36は外面に楼閣山水文を描き、口縁端部内面に文様帯を施文する。37は磁器の広東碗である。外面に呉須による文様を描き、内面見込みには一重圏線が巡る。38～40は磁器の端反碗で法量が口径9.7cm強、底径3.6～3.9cm、器高5.3～5.6cmにおさまる。法量および文様・調整等が共通しており、同じ規格で生産されたものと考えられる。外面は呉須による花文と蜻蛉文を描き、内面は口縁端部に二重圏線、見込みに一重圏線が巡る。見込み中央に簡略化された荒磯文を施文する。高台内面はちりめん皺が見られる。41は陶器の火入れで、口縁端部は逆「L」字形に内折する。外面は土灰釉を施釉、内面は露胎である。

42・43は土師器の皿である。体部はやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は面取りを行う。口径と比して底径が大きい。43の内面には煤が付着する。44は陶器の皿と思われる。内外面とも灰釉を施釉

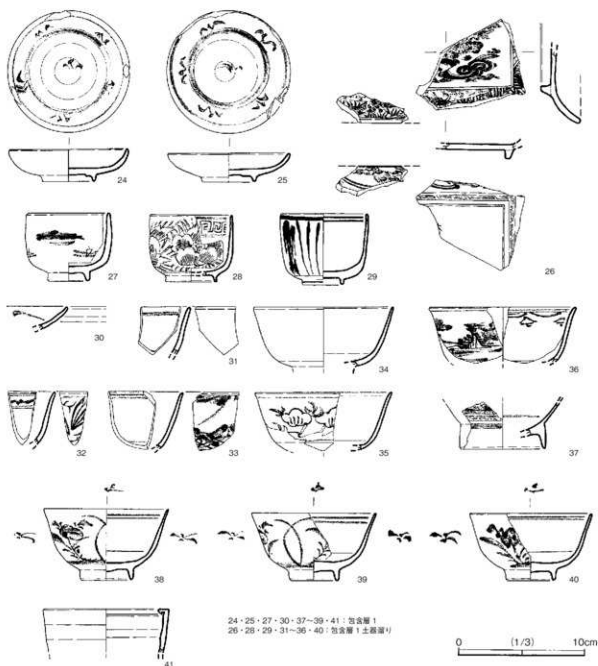


図61 出土土器実測図③

する。45は萩焼の開口椀で、内外面とも藁灰釉を施釉する。46は陶器の椀である。内外面とも灰釉を施釉する。47は萩焼の浅鉢で、口縁部は「く」字形に内折する。高台は削り出し高台で、畳付に回転糸切り痕状の痕跡がある。内面見込みにハマ跡がある。内外面とも藁灰釉を施釉、高台は露胎である。48は陶器の皿で、内外面とも鉄釉と土灰釉を施釉、高台は露胎である。底部外面の高台付近にはケズリの際に生じた稜が顕著である。49は肥前磁器の仏飯器と思われる。焼成不良で、釉調や呉須の発色が悪い。50は肥前の陶胎染付である。外面は唐草文か。51は肥前磁器の椀である。体部外面は呉須による文様および一重園線、高台外面に二重園線が巡る。焼成不良で、釉調や呉須の発色が悪い。52は陶器の鉢または大皿である。内面に印花文による文様帯を組み合わせて施文する。内面全面および口縁部外面は鉄化粧を施釉後、白化粧土を施す。肥前産。53・54は備前焼の徳利で、53は体部の一部が凹んでおり、人形徳利と思われる。53・54ともにロクロ成形痕が顕著で底部外面には窯印がある。18世紀代と考えられる。55～57は陶器の片口鉢で、口縁端部は玉縁をなす。55は内外面とも土灰釉を施釉する。注口部は欠損する。56は接合しない同一個体の口縁部および底部片である。注口は口縁端部から切り欠いて貼り付ける。内外面とも藁灰釉を施釉、高台は削り出し高台で、露胎。57は注口部を玉縁の下位に逆かまぼこ形の穿孔をして貼り付ける。内外面とも鉄釉を施釉する。須佐唐津産か。58は陶器の土版で、内外面とも土灰釉を施釉しており、口縁端部内面は釉剥ぎ、外面体部下半は露胎である。59は陶器の甕で、口縁端部は外折した後折り返しており、断面形は「>」がつぶれた形を呈する。内面には格子目タタキがわずかに残る。内外面とも鉄釉を施釉する。唐津産。60は陶器の摺鉢である。口縁端部は玉縁状を呈し、内面の卸目は密である。鉄釉を施釉する。肥前産。

遺物包含層出土弥生土器

61～73は遺物包含層出土の弥生土器である。61は包含層1、62・63は包含層2、64～73は包含層3から出土した。そのうち68～73は包含層3内の土器溜りから出土した。

61は甕の底部片でやや上げ底を呈する。62は甕の口縁部片で、跳ね上げ口縁である。63は壺の底部で、内面の剥離が激しい。64は甕の底部片で、上げ底を呈する。底部の成形痕が顕著である。65は甕で口縁部は「く」字状に外反する。内外面ともハケ調整で、屈曲部外面は指頭痕が顕著である。内外面の一部に黒斑がある。66・67は甕の口縁部片で、口縁端部はやや肥厚する。

68は甕で、口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部はやや肥厚する。胴部外面は縦ハケ、内面はミガキである。外面の一部に煤が付着する。69・70は甕の口縁部片である。68と器形および胎土調整が似ており、同一個体片の可能性もある。71は甕の底部片で、内面の指頭痕が顕著である。72は胴部が開いて立ち上がっており、壺の底部片と思われる。外面はハケおよびナデ調整である。73は壺で胴部と頸部の境に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁部は大きく開き口縁端部はやや肥厚する。内面には残存2個の円形浮文を貼り付ける。外面はミガキ、内面は指頭痕が顕著である。

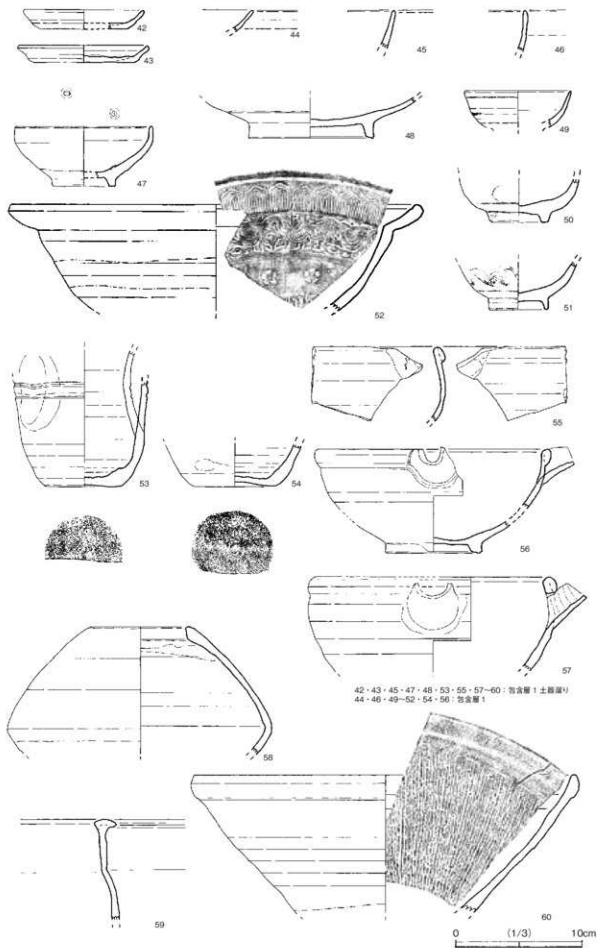
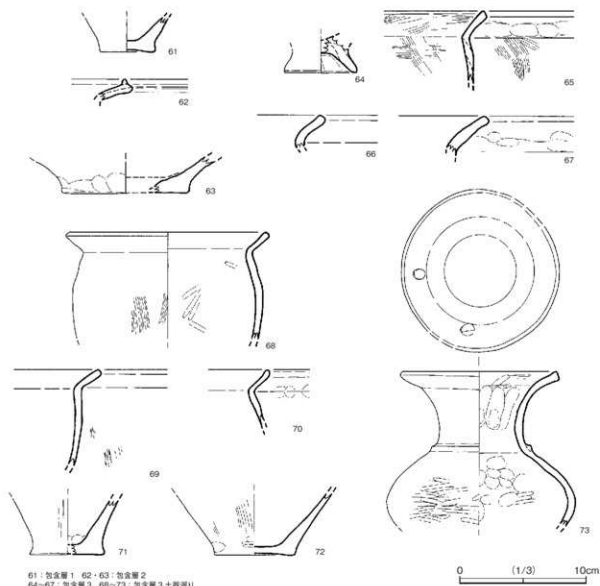


图62 出土土器实测图④



61：惣全層1 62・63：惣全層2
64～67：惣全層3 68～73：惣全層3土器層1

図63 出土土器実測図⑤

(4) 遺構面検出時出土遺物 (図64 図版26・27)

74～103は遺構面検出時出土遺物である。74～82は1地区、83～96は2地区、97～102は3地区、103は試掘トレンチから出土した。

74は土師器の焙烙と思われる。口縁端部内面は肥厚する。75は瓦質土器火鉢の口縁部片である。壺形火鉢の口縁部で、口縁端部は肥厚し、口縁と胴部の境は段状を呈する。76は瓦質土器の鉢で、輪高台である。77は陶器の浅鉢で、口縁部は内折する。内外面とも葉灰釉を施軸する。78は磁器の皿である。口縁端部は波状を呈しており、輪花皿と思われる。外面は唐草文、内面は花唐草文を施文する。79は磁器の椀である。外面は丸文を施文し、口縁端部に一重圏線が巡る。口縁端部内面は二重圏線が巡る。80は磁器の皿で、やや焼成があまり。見込みに呉須による扇文と源氏香文を施文する。81は磁器の皿で、見込みに蝶または虫と思われる文様を施文する。呉須の発色はやや悪く、黒味を帯びる。畳付は軸剥ぎで砂粒が付着する。17世紀前半の肥前産で、いわゆる初期伊万里と呼ばれるものである。82は磁器の椀である。外面は梅文と思われる文様、高台外面に二重圏線が巡る。高台内面には一重圏線と銘款があり、「大明年製」の変形字体と思われる。83は磁器の紅皿である。外面は型成形である。84

は磁器のミニチュア碗である。内外面に施釉するが、釉の付き具合が悪い。豊付は釉剥ぎである。85～88は磁器の碗である。85は外面に呉須による文様を施文し、口縁部内面に二重圏線が巡る。86は端反碗である。口縁部外面に呉須による文様を施文、口縁部・底部・高台外面にそれぞれ圏線が巡る。内面は口縁部に二重圏線、見込みに一重圏線が巡る。豊付は砂粒が付着する。87は磁器の端反碗である。印判手で、外面はコバルト軸による型紙絵。内面見込みは蛇の目釉剥ぎである。高台内面にはちりめん皺が見られる。88は貼り付け高台で、成形時のケズリが丁寧である。89は磁器の印判手の鉢で、内外面にコバルト軸による型紙絵で施文する。外面に呉須の一重圏線が巡り、口唇部には口紅状に呉須を塗る。90は陶器の碗で、内外面とも刷毛目である。17世紀後半肥前産。91は磁器の碗で、器壁が厚い。高台内面は中央が突出する。豊付は釉剥ぎで砂粒が付着する。92は陶器の鉢で、口縁部は玉縁をなす。内外面とも鉄釉を施釉する。93は陶器の土瓶である。体部との接合部付近で剥離している。外面は土灰釉を施釉する。94・95は陶器の擂鉢で、94は玉縁をなす。内外面とも鉄釉を施釉する。95は口縁部内面が肥厚し、口縁部に鉄化粧を施す。17世紀後半の肥前産である。96は瓦の転用品である。全体的に研磨しており、特に側面の一部は刃部状に研磨・整形している。97は瓦質土器の鉢で口縁部内面には断面三角形の肥厚帯を貼り付ける。98は土師器の大甕の底部と思われる。99は磁器の碗で、外面には呉須による文様を施文する。100は萩焼の碗である。内外面とも薬灰釉の上から鉄釉を施釉する。釉は厚めである。高台は渦巻高台で露胎である。101は肥前磁器のお神酒徳利で、外面は呉須で蜻蛉草文を描く。内面は露胎で、ロクロ成形痕が顕著である。102は磁器の花瓶で、高台外面に二重圏線が巡る。内面は露胎で、ロクロ成形痕が顕著である。103は土師器の焙烙の把手である。内外面とも指頭による成形痕が顕著である。

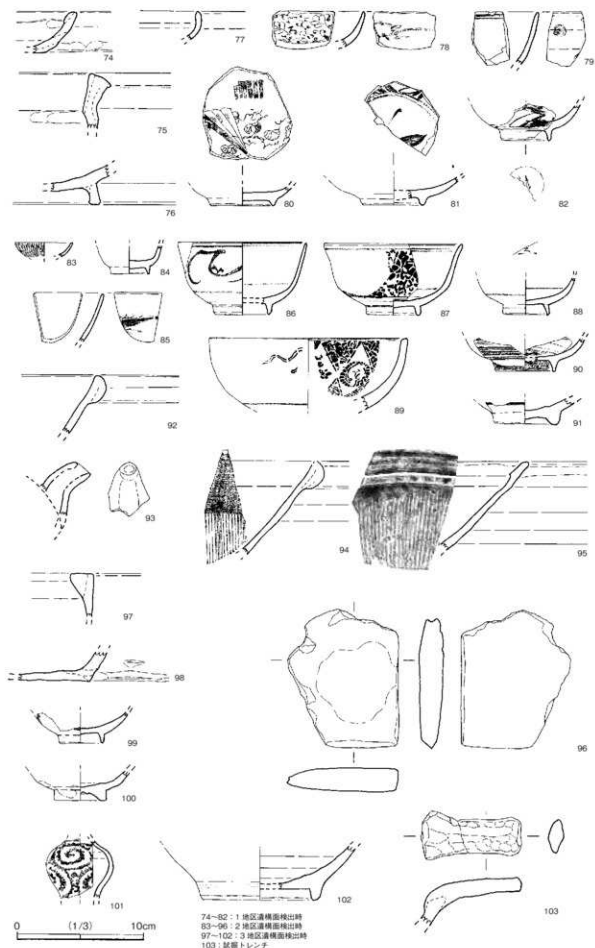
(5) 出土石製品・木製品・金属製品 (図65 図版27)

104～106は石製品で、いずれも打製石鏃である。104は試掘トレンチ、105は2地区遺構面検出時、106は包含層3から出土した。104は姫島産黒曜石製の凹基式打製石鏃で、基部の一部を欠損する。正三角形に近い形状を呈し、抉りはやや深めである。105は姫島産黒曜石製の凹基式打製石鏃で、完形である。二等辺三角形に近い形状を呈する。長さ2.5cm、幅1.8cmを測る。106は玄武岩製の凹基式打製石鏃である。基部の一部を欠損するもののほぼ完形である。長さ1.45cm、幅1.2cmを測り、小型である。

なお包含層3からは姫島産黒曜石および安山岩の剥片が複数出土している。

107はSK6より出土した木製品の板である。残存長26.3cm、幅4.7cm、厚さ1.0cmを測る。杉の柁目板で、側面は面取りを行う。

108・109は銭貨で、寛永通宝である。108は1地区遺構面検出時、109は包含層1から出土した。108は新寛永で、裏面は無文である。109は腐食が激しい。新寛永と思われる。



74-82 : 1地区遺構面検出時
 83-96 : 2地区遺構面検出時
 97-102 : 3地区遺構面検出時
 103 : 試掘トレンチ

図64 出土土器実測図⑥

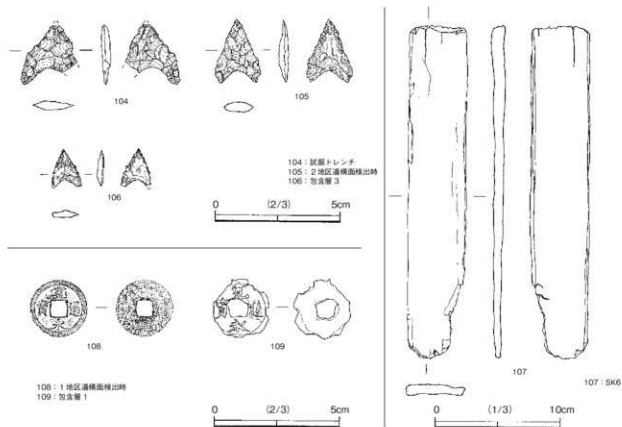


図65 出土石器、木製品、金属製品実測図

今市遺跡出土遺物のうち、近世の陶磁器類に関しては概ね17世紀末～19世紀におさまり、18世紀後半～19世紀前半頃が中心時期であると思われる。なお、SE1や遺構面検出時出土遺物の中には近代に含まれるものも見られる。国産陶磁器に関しては萩市所在の萩城跡（外堀地区）や下関市所在の奇兵隊陣屋跡等の出土遺物に類例を見ることができる。特に奇兵隊陣屋跡出土遺物は器種構成等も類似しており、时期的に近いことがうかがわれる。今市遺跡出土の磁器はやや厚ぼったい印象があり、萩城跡（外堀地区）および奇兵隊陣屋跡出土遺物と比較した場合、胎土や成形・調整の面でやや異なる。萩城跡（外堀地区）出土磁器は、19世紀以降在地で焼かれた磁器（小畑焼）が多くなるが、肥前磁器の割合が高い。また、奇兵隊陣屋跡出土遺物は小畑焼とされており、萩藩が関与した窯で生産された在地磁器である。これらの事から今市遺跡出土磁器は、肥前磁器を模倣して在地で焼かれた磁器である可能性が高く、また奇兵隊陣屋跡等出土資料と比較しても、若干様相が異なるため、別の窯で焼かれた在地の磁器であると考えられる。19世紀以降、肥前磁器の民間需要が高まるのに伴い、各地に陶磁器の窯が築かれるようになる。山口県内でも肥前磁器を模倣した磁器が生産されるようになる。窯は御用窯以外に民窯もあり、今市遺跡出土磁器で在地産のものに関しては、これらの民窯で焼かれたものである可能性が考えられる。

今市遺跡

61	23	28	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (小丸椀)	(64)	(4.0)	5.35	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：黄い緑色	縁輪 縁輪	筒形出し高台（高台高5cm）器 付輪跡あり 外周縁起き瓦文 内周縁起き瓦文 器底にない円形器体および同輪 の残片あり 1/3面平ら面磨き痕あり
61	23	29	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (小丸椀)	67	3.3	5.6	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：コバルト藍・濃緑色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	筒形出し高台（高台高10cm） 器付輪跡あり コバルト輪文を施す
61	23	30	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	皿			(1.9)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：オリーブ灰色	ナデ・縁輪 ナデ・縁輪	内周起き有り 外周ケズリ目が顕著
61	23	31	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)			(3.8)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：紺色	ナデ・縁輪 ナデ・縁輪	内周二重縁
61	23	32	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)			(4.2)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：藍色	ナデ・縁輪 ナデ・縁輪	外周二重縁 内周反縁
61	23	33	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)			(4.5)	砂粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：紺色	ナデ・縁輪 ナデ・縁輪	外周二重縁 内周二重縁
61	23	34	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器	椀	(109)		(4.8)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	見込みにハヤ割
61	23	35	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)	(106)		(6.6)	瀬粒少量含む 器 や今不具	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：うすい紺色	ナデ・縁輪 ナデ・縁輪	内周二重縁部一見込みに縁割 外周起き有り一重縁
61	23	36	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)	(116)		(4.3)	砂粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：紺色	ナデ・縁輪 ナデ・縁輪	外周起き山文 内周反縁
61	23	37	2地区	瓦含層1	磁器 (染付)	椀 (広底椀)	(67)	(3.7)		瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：黄色	ナデ・縁輪 ケズリ・縁輪	筒形出し高台（高台高35cm）器 付輪跡あり 外周起き有り一重縁
61	24	38	2地区	瓦含層1	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)	97	3.9	5.6	砂粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：紺色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	筒形出し高台（高台高8cm）器 付輪跡あり 内周二重縁部二重縁 見込みに ナデ・ケズリ・縁輪 外周起き・縁割文 内周見込みに 瓦割文 1/3面平ら
61	24	39	2地区	瓦含層1	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)	98	3.6	5.35	砂粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：紺色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	筒形出し高台（高台高8cm）器 付輪跡あり 内周二重縁部二重縁 見込みに ナデ・ケズリ・縁輪 外周起き・縁割文 内周見込みに 瓦割文 1/3面平ら
61	24	40	2地区	瓦含層1 土器群9	磁器 (染付)	椀 (瀬反椀)	97	3.6	5.3	砂粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：紺色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	筒形出し高台（高台高8cm）器 付輪跡あり 内周二重縁部二重縁 見込みに ナデ・ケズリ・縁輪 外周起き・縁割文 内周見込みに 瓦割文 1/3面平ら
61	23	41	2地区	瓦含層1	陶器	火入れ	(99)		(3.5)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：黄灰色 釉：灰オリーブ色	ナデ・縁輪（土灰 輪） ナデ・縁輪（土灰 輪）	内周起割 口縁部底に内浮する
62	24	42	2地区	瓦含層1 土器群9	土師器	皿	(94)	(6.8)	1.3	瀬粒少量含む や今軟質	灰黄褐色 （土灰） 黄褐色 （土灰）	縁割ナデ 縁割ナデ	底面外周はナデ（未起り痕不明） 口縁部底に内浮する	
62	24	43	2地区	瓦含層1 土器群9	土師器	皿	(101)	(7.9)	1.35	砂粒少量含む や今軟質	灰黄褐色 （土灰） 黄褐色 （土灰）	縁割ナデ（口ケ 目が顕著） 縁割ナデ	口縁部底に内浮する 内周の口縁部起割 底面外周はナデ（未起り痕不明） 口縁部底に内浮する	
62	24	44	2地区	瓦含層1	陶器	皿?			(1.75)	瀬粒多く含む 器	硬質	胎土：浅黄褐色 釉：灰白色	ナデ・縁輪（灰 輪） ナデ・縁輪（灰 輪）	
62	24	45	2地区	瓦含層1 土器群9	陶器	椀 (瀬反椀)			(3.1)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：黄褐色 釉：灰白色	ナデ・縁輪（藁灰 輪） ナデ・縁輪（藁灰 輪）	底面
62	24	46	2地区	瓦含層1	陶器	椀			(3.3)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：浅黄褐色 釉：浅黄色	ナデ・縁輪（灰 輪） ナデ・縁輪（灰 輪）	
62	24	47	2地区	瓦含層1 土器群9	陶器	浅鉢	(106)	(4.8)	4.7	瀬粒少量含む 器	硬質 不具	胎土：浅黄褐色 釉：灰白色	ナデ・縁輪（藁灰 輪） ナデ・ケズリ・縁 輪（藁灰輪）	底面外周および口縁部起割 内周見込みにハヤ割（残存2割） 筒形出し高台（高台高7cm）高 台付に未起り痕有り
62	24	48	2地区	瓦含層1 土器群9	陶器	皿		9.8	(1.5)	砂粒少量含む 器	硬質	胎土：灰褐色 釉：黒褐色・浅黄色	ナデ・縁輪（鉄 輪） 高台起割 ナデ・ケズリ・縁 輪（鉄 輪） ナデ・上灰輪	底面外周ケズリの後が顕著
62	24	49	2地区	瓦含層1	磁器 (染付)	広底器	(83)	(2.85)		瀬粒少量含む 器	硬質 不具	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：黄い緑色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	内周一重縁・文様 底面
62	24	50	2地区	瓦含層1	陶器 (染付)	椀		(4.4)	(3.5)	瀬粒多く含む 器	硬質	胎土：橙色一部灰 白色 釉：オリーブ灰色 呉須：黄い緑色	ナデ・縁輪 ナデ・ケズリ・縁 輪	筒形出し高台（高台高10cm） 器付輪跡あり 外周起きあり 底面
62	24	51	2地区	瓦含層1	磁器 (染付)	椀		(4.4)	(3.8)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：灰白色 釉：灰白色 呉須：黄い緑色	ナデ・縁輪 ケズリ・縁輪	筒形出し高台（高台高10cm） 器付輪跡あり 外周二重縁 一重縁 高台外周二 重縁
62	24	52	2地区	瓦含層1	陶器	鉢 または 大皿	(320)		(8.4)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：橙色 釉：灰褐色	ナデ・縁輪（鉄 輪） ナデ・縁輪（鉄 輪） ナデ・縁輪（鉄 輪） ナデ・上灰輪 ナデ・上灰輪	底面外周一部輪跡あり 内周起きあり 底面に内浮する
62	25	53	2地区	瓦含層1 土器群9	陶器 (縁起)	煎茶 (丸煎茶)		5.8	(10.7)	瀬粒少量含む 器	硬質	胎土：黄い赤褐色 （土灰） 黄褐色 （土灰）	ナデ（口ケ目有 り） ナデ	底面に内浮あり 底面外周に起割有り 1/3面平ら

62	25	54	2地区	磁含層1	陶器	土師器 (人形埴輪)	62	(32)	磁粒少量含む 器	靑灰色 緑褐色、一部に赤い 赤褐色 黒褐色、灰褐色	ナデ(ロクロ目が 残る)	内面外面に塗布有り 灰褐色	
62	24	55	2地区	磁含層1 土器部9	陶器	鉢 (片口)		(585)	磁粒少量含む 器	粘土：灰褐色 釉：オリーブ黄色	ナデ・施釉(土灰 ナデ・ケズリ、施 釉(土灰釉)	口縁部は玉縁をなす 帯系	
62	24	56	2地区	磁含層1	陶器	鉢 (片口)	(180)	7.6	(83)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：淡黄色	ナデ・ケズリ、施 釉(土灰)	張り出し高台(高台部はAcms) 高 台部無縁(張り付き・堀付) 組合せない器一類はすべて土灰文 様・面取部有る
62	25	57	2地区	磁含層1 土器部9	陶器	鉢 (片口)	(184)		(745)	磁粒少量含む 器	粘土：浅黄褐色 釉：灰褐色	ナデ・施釉(鉄釉) ナデ・ケズリ、施 釉(鉄釉)	口縁部は玉縁をなす ナデ(口取り(穿孔)、堀付) 面取部有る
62	25	58	2地区	磁含層1 土器部9	陶器	土瓶 (77)		(100)	磁粒少量含む 器	粘土：橙黄色 釉：黒褐色	ナデ・施釉(土灰 ナデ・体部上土灰 釉(土灰釉)	口縁部内面縁部まで 灰褐色面取	
62	25	59	2地区	磁含層1 土器部9	陶器	甕		(80)	磁粒少量含む 器	粘土：橙黄色 釉：灰白色	ナデ：格子目タテ ナデ・施釉(鉄釉) ナデ・施釉(鉄釉)	口縁部は「>」字形に張り出し、 灰褐色	
62	25	60	2地区	磁含層1 土器部9	陶器	猪鉢 (300)		(109)	磁粒少量含む 器	粘土：灰褐色 釉：黒褐色	ナデ・施釉(鉄釉) ナデ・ケズリ、施 釉(鉄釉)	灰褐色面取 口縁部は玉縁状 面取	
63	25	61	2地区	磁含層2	佛生土器	甕	4.2	(27)	磁粒多く含む 器	灰白色	厚減により調整不 用 ハケ後ナデ	全体的に華減が強い	
63	25	62	2地区	磁含層2	佛生土器	甕		(16)	磁粒多く含む 器	浅黄褐色 浅黄褐色	ナデ ナデ(一部面取 有り)	横ハケ口縁	
63	25	63	2地区	磁含層2	佛生土器	壺	(9.4)	(29)	磁粒多く含む 器	浅黄褐色 に赤い黄褐色	厚減により調整不 用 ナデ・面取ナデ	内面華減が強い	
63	25	64	3地区	磁含層3	佛生土器	甕	(5.6)	(285)	磁粒多く含む 器	浅黄褐色 に赤い黄褐色	厚減により調整不 用 ナデ	上げ腕 底部の成り筋が顕著 全体的に華減が強い	
63	25	65	3地区	磁含層3	佛生土器	甕		(57)	磁粒多く含む 器	浅黄褐色 浅黄褐色	粘土ナデ・横ハケ後 ナデメハケ 粘土ナデ・横ハケ(厚 減が強い)	内外面に一部面取有り	
63	25	66	3地区	磁含層3	佛生土器	甕		(30)	磁粒多く含む 器	灰白色 灰白色	厚減により調整不 用		
63	25	67	3地区	磁含層3	佛生土器	甕		(26)	磁粒多く含む 器	に赤い黄褐色 浅黄褐色	厚減により調整不 用 面取部有る		
63	25	68	3地区	磁含層3 土器部9	佛生土器	甕	(15.4)	(74)	磁粒少量含む 器	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	粘土ナデ・縦ハケ 粘土ナデ・縦ハケ	内外面に一部に張り付き 華減が強い	
63	25	69	3地区	磁含層3 土器部9	佛生土器	甕		(76)	磁粒多く含む 器	浅黄褐色 黄褐色	厚減により調整不 用 横ハケ	全体的に華減が強い	
63	25	70	3地区	磁含層3 土器部9	佛生土器	甕		(46)	磁粒多く含む 器	黄褐色 に赤い黄褐色	厚減により調整不 用 横ナデ(一部面取 部)		
63	25	71	3地区	磁含層3 土器部9	佛生土器	甕	5.7	(44)	磁粒多く含む 器	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	面取部有る 横ハケ後ナデ		
63	25	72	3地区	磁含層3 土器部9	佛生土器	壺?	8.3	(48)	磁粒多く含む 器	灰黄褐色 浅黄褐色	縦ハケ ハケおよびナデ調 整部生残有る		
63	25	73	3地区	磁含層3 土器部9	佛生土器	壺	12.1	(122)	磁粒多く含む 器	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色 灰黄褐色	横ナデ、ミダキ、 粘土ナデ、面取ナデ 粘土ナデ、ミダキ	面取と頸部の間に断面三角形の筋 口縁部内面に厚塗文有り 全体的に華減が強い	
64	26	74	1地区	遺構面 検出時	土師器	胡瓶?		(325)	磁粒少量含む 小今瓶	に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	横ナデ(一部面取 部ナデ、面取部)	口縁部内面取部	
64	26	75	1地区	遺構面 検出時	瓦質土器	火鉢		(44)	磁粒少量含む 器	黄灰色 灰白色	粘土ナデ 横ナデ・ナデ	裏面赤土 口縁部面外面取部	
64	26	76	1地区	遺構面 検出時	瓦質土器	鉢		(315)	磁粒少量含む 小今瓶	灰白色 灰白色 断面：灰白色	ハケ小? ナデ	輪文帯(堀付)	
64	26	77	1地区	遺構面 検出時	陶器	浅鉢		(23)	磁粒少量含む 器	粘土：黄褐色 釉：灰白色	ナデ・施釉(磁灰 釉) ナデ・施釉(磁灰 釉)	内面赤褐色文 外面無文	
64	26	78	1地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	瓶(輪花瓶)		(28)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：明緑灰色 呉釉：緑色	施釉 施釉	内面赤褐色文 外面無文	
64	26	79	1地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	梅		(42)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：灰白色 呉釉：赤い緑色	施釉 施釉	内面二重縁部 外面赤文・一重縁部	
64	26	80	1地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	瓶		(15)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：灰白色 呉釉：赤色	ナデ・施釉 ケズリ・施釉	付付縁部(高台部はAcms) 内面赤文と赤褐色文	
64	26	81	1地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	瓶	(4.8)	(22)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：灰白色 呉釉：緑黄色	施釉 ケズリ・施釉	張り出し高台(高台部はAcms) 帯 付縁部まで、縁部付者 内面赤文と赤褐色文 (付縁部は(堀付伊方)	
64	26	82	1地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	梅	(3.8)	(285)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：灰白色 呉釉：赤い緑色	施釉 ケズリ・施釉	高台部はAcms 帯付縁部まで 外面赤文と高台内面二重縁部 高台部縁部、縁部付者	
64	26	83	2地区	遺構面 検出時	磁器	紅瓶	(46)	(22)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：灰白色	施釉 施釉	付付縁部	
64	26	84	2地区	遺構面 検出時	磁器	ミニチュア 梅		(275)	磁粒少量含む 器	粘土：灰白色 釉：明緑灰色	施釉 施釉	高台部はAcms 帯付縁部 縁部付者 縁部付者	

今市遺跡

64	26	85	2地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	梅		(39)	磁粒少量含む 密	胎土：白色 釉：灰白色 肌：淡褐色、緑が かった褐色	磁胎	内面：二重線 外縁文線有り 内縁の染色やや濃い
64	26	86	2地区	遺構面 検出時	磁器 (磁)	梅 (逆反梅)	(102)	(42)	砂粒少量含む 密	胎土：灰白色 釉：灰白色 肌：褐色	ナデ・磁胎 ナデ・ケズリ・磁 胎	管付砂粒付器 内縁に二重線・二重線・見込ノ 二重線 内縁に二重線・底面・器台に二重線 口縁部文線有り
64	26	87	2地区	遺構面 検出時	磁器 (磁)	梅 (逆反梅)	(108)	(42)	磁粒少量含む 密	胎土：灰白色 釉：灰白色 肌：コバルト藍・濃褐色	ナデ・ケズリ・磁 胎 ナデ・磁胎	器り出し器台（器台高10cm）管 付砂粒器・砂粒付器 内縁見込み肥し目縁部まで口縁部 外縁コバルト藍にによる管線・底 部二重線
64	26	88	2地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	梅		(38)	(30)	胎土：灰白色 釉：灰白色 肌：淡い褐色	ケズリ・磁胎 ケズリ・磁胎	管付器台（器台高10cm）管付砂 粒器・砂粒付器 内縁見込み濃線・中央に文様 外縁部は口縁部内縁部
64	26	89	2地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	井	(156)	(56)	磁粒少量含む 密	胎土：灰白色 釉：灰白色 肌：褐色	磁胎 磁胎	内縁コバルト藍による管線 外縁コバルト藍による管線・内 縁の一重線 口縁部は口縁部の外縁
64	26	90	2地区	遺構面 検出時	陶器	梅		(46)	(26)	胎土：にぶい褐色 釉：淡黄色・にぶい 褐色	ナデ・磁胎（縦毛 目） ナデ・ケズリ・磁 胎（縦毛目）	管付砂粒付器 高台高10cm 器り出し器台有り 口縁部二重線
64	26	91	2地区	遺構面 検出時	磁器 (磁)	梅		4.9	(20)	胎土：灰白色 釉：灰白色 肌：褐色	磁胎 ケズリ・磁胎	器り出し器台（器台高10cm）管 付砂粒器・砂粒付器 高台の内面中央部突出 内縁部
64	26	92	2地区	遺構面 検出時	陶器	井		(47)	砂粒少量含む 密	胎土：浅黄色 外：黒色	ナデ・磁胎（鉄胎） ナデ・磁胎（鉄胎）	口縁部底面有線
64	26	93	2地区	遺構面 検出時	陶器	土敷 （長） 2.33 （幅） 2.1 （厚） 0.8		(18)	(8)	胎土：にぶい褐色 釉：灰ケラービー	ナデ ナデ・磁胎（土灰 胎）	内縁部線 器底の一部分が凹線
64	26	94	2地区	遺構面 検出時	陶器	部跡		(7.4)	磁粒少量含む 密	胎土：黄褐色 釉：黒褐色	ナデ・磁胎（鉄胎） ナデ・磁胎（鉄胎）	口縁部底面有線 内縁部土目
64	26	95	2地区	遺構面 検出時	陶器	部跡		(7.1)	磁粒少量含む 密	胎土：灰色 器底：にぶい褐色 釉：灰褐色	ナデ ナデ（口ケラ目が 顕著）	口縁部底面有線 口縁部底面内縁部 内縁部土目 口縁部有線
64	27	96	2地区	遺構面 検出時	瓦	不明 （最大長） 100 （最大幅） 8.75 （最大厚） 1.9		(18)	(8)	砂粒少量含む 密	磁質 磁質 磁質	瓦舟加工 瓦舟加工
64	27	97	3地区	遺構面 検出時	瓦質土器	井		(3.5)	砂粒少量含む 密	内：褐色 外：褐色 肌：褐色	ナデ ナデ	器底の一部が凹凸
64	26	98	3地区	遺構面 検出時	土磁器	大甕		(2.3)	砂粒少量含む やや粗	内：灰黄色 外：灰黄色	ナデ	底面外周縁部凹凸 内周縁部一部に凹線付着
64	26	99	3地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	梅		3.3	(25)	胎土：灰黄色 釉：灰黄色 肌：褐色	磁胎 磁胎	高台高10cm 管付砂粒付器 外縁に文線有り
64	27	100	3地区	遺構面 検出時	陶器	梅		4.0	(23)	胎土：灰黄色 釉：灰黄色 外周縁部部分：褐色	磁胎（濃灰釉＋鉄 胎） ケズリ・磁胎（磁 胎） 灰胎＋鉄胎	高台高台（器台高10cm）高台高 台
64	27	101	3地区	遺構面 検出時	磁器 (磁)	お神酒 御祝		(4.5)	砂粒少量含む 密	胎土：灰白色 釉：灰白色 肌：淡い褐色	ナデ（口ケラ成り 部が顕著） 磁胎	内縁部線 外縁部線 文様
64	27	102	3地区	遺構面 検出時	磁器 (染付)	花風		(8.9)	(43)	胎土：にぶい褐色 釉：灰白色 肌：黄色 裏面：灰白色	ナデ ケズリ・磁胎	器り出し器台（器台高14cm）管 付砂粒器 内縁部線 高台の内面二重線
64	27	103		試験 トレンチ	土磁器	壱尊 （長） 7.90 （幅） 0.85 （厚） 1.25		(9)	(2.5)	砂粒少量含む 密	やや粗質	ナデ・胎中エ 器り出し器台有り 器り出し器台有り

表9 石器観察一覧

採回	図版	NO.	地区	出土場所	種別	器種	法量(cm) (): 復元値			石材	備考	
							長さ	幅	厚さ			
65	27	104		試掘トレンチ	石器	石鏃	2.35	2.75	0.35	1.4	黒曜石	凹基無茎式の打製石鏃 挟りが深い基部の一部と先端部を破損
65	27	105	2地区	遺構面検出時	石器	石鏃	2.5	1.8	0.4	1.1	黒曜石	凹基無茎式の打製石鏃 挟りが深い
65	27	106	3地区	包含層3	石器	石鏃	1.45	1.2	0.25	0.2	玄武岩	凹基式石鏃 基部の一部欠損

表10 金属製品観察一覧

採回	図版	NO.	地区	出土場所	種別	器種	法量 (cm) (): 残存値			備考
							直径	方孔一辺	厚さ	
65	27	108	1地区	遺構面検出時	銭貨	寛永通宝	2.35	0.6	0.1	新寛永
65	27	109	2地区	包含層1	銭貨	寛永通宝	(2.4)	(0.7)	(0.1)	摩滅が激しい

4 まとめ

今回の発掘調査により、掘立柱建物跡2棟、土坑20基、井戸1基、柱穴数十個などの遺構が検出された。遺物は、弥生土器、近世の陶磁器、瓦、石製品（石鎌）、金属製品（銭貨）などが出土した。全体的に遺構や遺物に恵まれなかったが、これは本遺跡が位置する地域一帯が、後世の水田化による削平を受けたためと考えられる。

他地区よりも高い場所に位置する1地区は、特に削平の影響を大きく受けているとみられ、遺構、遺物とも非常に乏しいものとなった。遺構としては、規模の小さい柱穴を数十個と東端より伸びる黄褐色砂質土が浅く堆積した3本の自然流路跡や暗渠を確認したが遺物は出土しなかった。調査区からの遺物としては弥生土器片、近世の陶磁器や寛永通宝が出土している。

2地区の東側は遺構面の下に粘土層が厚く堆積しており、そこから集中して土坑や井戸が検出された。検出された土坑内からは近世の陶磁器類を中心とした遺物が出土している。また、炭化した木片や木材が数基の土坑から出土している。これは、遺構面下の粘土層により、土坑が湿気を多く含んだため残存したものと考えられる。SK1からは、大型の土師器大甕の口縁部片がまとまって出土した。SK5は南側をSK4が切っている。このため全容は把握できないが、東側に石が並んだ状態で出土していることから、石圍遺構か石積遺構の一部とも考えられる。遺構の機能としては、貯蔵用の小施設の可能性もあるが明らかではない。SK6からは陶磁器類や板状の木片が出土している。平面形が隅丸方形を呈していることや遺物の出土状況、他の土坑からやや離れた地点から検出されたことから、土坑墓の可能性も指摘されよう。SE1については、円形の掘り方を持ち、石組みで上部より下部の方がせまいつくりになっている。粗雑に石が組まれており、径は小規模ながら、深い。SE1の内部からは数点の遺物も出土しており、竹を用いた廃棄祭祀の跡もうかがわれた。また、東側の地域の南端からは包含層1を確認した。地山面の上に最大約55cmの黒褐色土が南に向かって厚く堆積していた。この包含層から弥生土器や陶磁器が出土している。特に、陶磁器は西の先端部からまとまって出土している。

2地区の西側の地域からは、土坑1基と柱穴数十個、遺物包含層1箇所が検出された。柱穴については、いずれも小規模なもので遺物も出土していない。南端から確認されたSK16は、焼土層が表出しており、下層からは広範囲にわたって確認された。さらに、中央部には炭を多く含む層がみられたことから、土坑内で焼成を行ったことは明らかであるが、性格を特定するまでには至らなかった。なお、東の縁辺部より弥生土器の小片が1点出土している。SK16の西隣から確認された包含層2からも弥生土器が出土している。

3地区の東側は、2地区の東地域と同様に遺構面の下に粘土層が厚く堆積していたが、遺構は確認することができなかった。西側からは掘立柱建物跡1棟、土坑3基、西端から遺物包含層2箇所などが検出された。西側の北から検出されたSB1は2×1間の小規模なものであるが、南西隅の柱穴から出土した土器片から弥生時代の可能性もある。土坑については、3基のうちSK17とSK18は被熱痕が確認されたことから焼土坑とみられる。SK17はおもに南半部の壁面と床面が、SK18はほぼ壁面全体が被熱によって固く焼きまっていた。2基の土坑は埋土の状況に違いがみられるものの、被熱部は赤褐色に変化しており、平面形もほぼ同規模の円形を呈しているため、同時期に何らかの焼成を行っ

たと考えられるが、具体的な用途については不明である。時代を特定できるような遺物も出土していないが、SK18から出土した炭化物を放射性炭素年代測定による分析を行った結果では、古墳時代に相当する年代値が得られている。また、3地区の西端から検出された遺物包含層（包含層3、包含層4）からは、弥生土器や石畿、石畿と同じ石材の剥片が出土している。これらの遺物は包含層に広く堆積していた黒褐色土層より出土している。特に包含層3の南側からは弥生土器がまとまって出土している。

遺物に関しては、近世の陶磁器類が多く出土している。大半は18世紀～19世紀前半とみられ、特に下関市所在の奇兵隊陣屋跡出土の遺物と類似している。ただし、若干様相が異なるため、18世紀後半～19世紀にかけて県内各地で築かれた民窯において、肥前磁器を模倣して焼かれた在地産の磁器である可能性が高い。

以上のことから、本遺跡の特徴として、まず多くの遺構は2地区の東側から検出されていることがあげられる。それらの遺構からは近世の遺物が出土しており、特徴から17世紀末～19世紀前半の時期と推定でき、集落の中心時期は18世紀後半～19世紀前半と思われる。建物跡などの遺構を確認することはできなかったが、少なくとも2地区の東側の地域は、近世の屋敷地の一部が広がっていたことが推察できる。次に、流れ込みによって形成された包含層、遺構面検出時から弥生時代中期中葉～後半の特徴を示す土器や石畿が出土していることがあげられる。周辺の地形的な観点から、本遺跡の東側に位置する小高い丘陵にも弥生時代の遺跡が存在していた可能性を示唆できよう。

今回の調査によって、削平による影響をうけていたものの、厚狭川左岸の北東地域における本遺跡一帯は、弥生時代から人々が生活を営んできたことが判明した。さらに、全容を明らかにすることはできなかったが、近世から近代初頭にかけて営まれていた集落の痕跡をうかがい知ることができた。ただ、中世の遺構や遺物は確認されておらず、大内氏の隆盛とともに開かれたと考えられる地域は柳下遺跡が位置する本遺跡の北側に広がっていたのではないかと考えられる。今後、新たな発掘調査によって、当地域の歴史がさらに解明されることを期待したい。

参考文献

- 山陽町史編纂委員会『山陽町史』1984
 山口県教育委員会『生産遺跡分布調査報告書 窯業』1983
 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』2000
 九州近世陶磁学会『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通（中国・四国・関西編）』2007
 西岡義貴『萩焼古窯跡群』山口県史 資料編 考古2』山口県 2004
 河野良輔『長門のやきもの』『日本やきもの集成8 山陰』平凡社 1981
 上山佳彦『4 埋発遺構について』『東禪寺・黒山遺跡（東大門・上徳田地区）』山口県埋蔵文化財センター 2003
 小南裕一編『竜王南遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター 2003
 谷口哲一編『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』山口県埋蔵文化財センター 2002
 岩崎仁志他編『萩城跡（外堀地区）Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター 2004
 井川隆司編『萩城跡（外堀地区）Ⅲ』山口県埋蔵文化財センター 2006
 石井能彦編『柳瀬遺跡・騎兵隊陣屋跡』日本道路公団広島建設局山口工事事務所・山口県教育委員会 1996

柳下遺跡・今市遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に校正する必要がある。

ここでは、柳下遺跡および今市遺跡で出土した炭化物について放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

2 試料と方法

測定試料は、柳下遺跡で出土した炭化物3点・木材1点と、今市遺跡で出土した炭化物1点である。

これら試料に、二次的に混入した有機物を取り除くために以下の処理を施した。まず蒸留水中で細かく粉碎し、超音波洗浄および煮沸洗浄を行った。次に塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去した後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去した。さらに塩酸 (HCl) で洗浄し、最後にアルカリによって中和した。これら前処理をした試料は、定温乾燥機内で 80°C で乾燥した。

乾燥後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス・メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。

これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。

測定試料と方法を表1にまとめた。

表1 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	柳下遺跡 1地区A SP326	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	柳下遺跡 1地区A SP7	木 材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	柳下遺跡 1地区A SK3	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.4	柳下遺跡 SK120	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.5	今市遺跡 SK18	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3 結果

年代測定の結果を表2に示す。

表2 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年BP)	暦年代(西暦) ⁴⁾
No 1	226072	580 ± 40	-26.6	550 ± 40	交点: cal AD 1410 1 σ : cal AD 1330~1340 cal AD 1400~1420 2 σ : cal AD 1310~1360 cal AD 1380~1440
No 2	226073	360 ± 40	-26.3	340 ± 40	交点: cal AD 1520, AD 1590, AD 1620 1 σ : cal AD 1470~1640 2 σ : cal AD 1450~1650
No 3	226074	660 ± 40	-25.5	650 ± 40	交点: cal AD 1300 1 σ : cal AD 1290~1320 cal AD 1350~1390 2 σ : cal AD 1280~1400
No 4	226075	400 ± 40	-25.8	390 ± 40	交点: cal AD 1490 1 σ : cal AD 1450~1500 cal AD 1600~1610 2 σ : cal AD 1440~1540 cal AD 1540~1630
No 5	226076	1450 ± 40	-26	1430 ± 40	交点: cal AD 640 1 σ : cal AD 600~650 2 σ : cal AD 560~660

(1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えて算出した年代。

(4) 暦年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値(暦年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを校正する必要がある。暦年校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。最新の校正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である(樹木年輪データはBC10450年まで)。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)と2 σ (95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

4 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No 1 では、 550 ± 40 年BP (1σ の暦年代で AD 1330~1340 年、AD 1400~1420 年)、No 2 では 340 ± 40 年BP (同 AD 1470~1640 年)、No 3 では 650 ± 40 年BP (同 AD 1290~1320 年、AD 1350~1390 年)、No 4 では 390 ± 40 年BP (同 AD 1450~1500 年、AD 1600~1610 年)、No 5 では 1430 ± 40 年BP (同 AD 600~650 年) の年代値が得られた。

参考文献

- Paula J Reimer, Mike G L Baillie, Edouard Bard, Alex Bayliss, J Warren Beck, Chanda J H Bertrand, Paul Glackwell, Caitlin E Buck, George S Burr, Kirsten B Cutler, Paul E Damon, R Lawrence Edwards, Richard G Fairbanks, Michael Friedrich, Thomas P Guilderson, Alan G Hogg, Konrad A Hughen, Bernd Kromer, Gerry McCormac, Sturt Manning, Christopher Bronk Ramsey, Ron W Reimer, Sabine Remmele, John R Southon, Minze Stuiver, Sahra Talamo, FW Taylor, Johannes van der Plicht, Constanze E Weyhenmeyer. 2004. INTCAL04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon* 46:1029-1058.
- 尾崎大真 (2005) INTCAL98からIntCal04へ。学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo 3 一炭素年代測定による高精度編年体系の構築一。p.14-15.
- 中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院。p.1-36.

付編 2

柳下遺跡および今市遺跡におけるリン酸・カルシウム分析

応用地質株式会社

1 分析目的

柳下遺跡及び今市遺跡において検出された土坑（墓坑）内の土壌及びその周辺土について、リン酸・カルシウム分析を実施することにより、土坑（墓坑）内に遺体が埋納されていた可能性を検討する。

2 分析試料

分析試料は柳下遺跡のSK 1～5 およびSK120から採取した土壌（17試料）及びその周辺から採取した土壌（6試料）、今市遺跡のSK 6 から採取した土壌（2試料）及びその周辺より採取した土壌（1試料）の計26試料である。

3 分析方法

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光度法、腐植はチューリン法で実施した（土壤養分測定法委員会，1981；土壤標準分析・測定法委員会，1986）。以下に分析の処理工程を示す。

<試料の調整>

- ① 試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。
- ② 風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定。
- ③ 風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5mmφのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

<リン酸・カルシウム分析>

- ① 風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mlを加えて加熱分解する。
- ② 放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。
- ③ 分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。
- ④ ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて吸光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）濃度を測定する。
- ⑤ 別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。
- ⑥ これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（ P_2O_5 mg/g）とカルシウム含量（Ca mg/g）を求める。

4 分析結果

分析結果一覧を表1に示す。

リン酸含量は、遺構内の埋土、床土及び遺構周辺土ともに約1mg/g程度で、いずれも自然状態の土壌の中でも小さい値であり、両者の差も小さい。

カルシウム含量も、柳下遺跡SK120埋土②以外は約1～3mg/g程度で、いずれも自然状態の土壌の示す値である。柳下遺跡SK120埋土②は、カルシウム含量が16mg/gと他の試料の10倍程度の値を示している。本試料は、炭のような有機物が床一面に敷き詰められているような状態であったことから、カルシウム含量はこの有機質に由来する可能性がある。

表1 リン酸・カルシウム分析結果

遺跡名	試料名	リン酸 P205 (mg/g)	カルシウム Ca (mg/g)
柳下遺跡	SK1 埋土①	0.8	2.2
	SK1 埋土②	0.6	2.8
	SK1 埋土③	0.7	2.3
	SK1 床土	0.4	1.8
	SK1 周辺土	1.3	2.0
	SK2 埋土①	0.8	2.2
	SK2 床土	0.8	2.3
	SK2 周辺土	1.3	1.9
	SK3 埋土①	1.1	2.8
	SK3 埋土②	1.1	2.5
	SK3 床土①	1.1	2.5
	SK3 床土②	1.2	2.6
	SK3 周辺土	1.2	1.8
	SK4 埋土①	0.9	2.1
	SK4 埋土②	0.9	2.4
	SK4 床土	0.5	1.9
	SK4 周辺土	0.7	2.1
	SK5 埋土	1.3	2.4
	SK5 床土	1.5	2.6
	SK5 周辺土	1.1	1.9
今市遺跡	SK120 埋土①	1.0	2.6
	SK120 埋土②	1.1	16
	SK120 周辺土	0.9	1.6
	SK6 埋土①	0.4	1.3
	SK6 埋土②	0.5	1.6
	SK6 周辺土	<0.1	0.86

注：リン酸の分析精度は小数点以下1桁、カルシウムの分析精度は有効数字2桁である。

5 考察

骨にはリン酸やカルシウムが多く含まれている。このうち、リン酸は水にほとんど溶けないため、土中での移動が小さく、カルシウムに比べ溶脱、拡散による均質化が起こりにくい。土壌のリン酸分析は、これまで全国各地の遺跡で行われているが、自然状態でのリン酸量に着目すると、沖積土で1mg/g、火山灰性の土壌では3～4mg/g程度を示す場合が多い。今回の場合、1mg/g程度の含量を示すが、これは自然状態の範囲内といえる。

一方、カルシウムは水に溶けやすいため、土中で拡散しやすい。また、石灰岩が分布する地域では値が高くなるなど周辺地質の影響も受けやすい。そのため自然状態で含まれるカルシウムは、地域によってばらつきが大きい。今回の結果でも、柳下遺跡SK120埋土②以外の試料は約1～3mg/g程度の自然状態の土壌の値を示し、遺体埋納の指標とはならない。柳下遺跡SK120埋土②試料も、カルシウム含量は16mg/gと多いものの、リン酸含量は他の試料と同程度であることから、遺体が埋納されていた可能性は低い。

以上のことから、対象とした土坑中に遺体が埋納されていた可能性は極めて低いと判断される。

<引用・参考文献>

土壌養分測定法委員会編、1981。土壌養分分析法。養賢堂、440p。

土壌標準分析・測定法委員会編、1986。土壌標準分析・測定法。博友社、354p。

柳下遺跡における花粉・寄生虫卵分析

応用地質株式会社

I 花粉分析

1 分析目的

柳下遺跡において検出された埋壘1から採取した土壌について、花粉分析を実施することにより、土壌が堆積した時期の遺跡周辺の植生環境、遺構周辺の局地的な植生の推定を行う。

2 分析試料

分析試料は、柳下遺跡の埋壘1より採取された埋土①（3層、褐色粘質土）、埋土②（3層、褐色粘質土）、埋土③（3層、褐色粘質土）、埋土④（4層、赤褐色弱粘質土）の4試料である。

試料採取箇所を図1の柱状図（図中左側）に示す。

3 分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているものの、個体変化や類似種もあるため総じてイネ属型とした。

4 分析結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉16、シダ植物胞子2形態の計35である。これらの学名と和名および粒数を分析結果として表1に示す。花粉数が200個以上計数できた埋土①と埋土④については、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダ

イアグラムを作成し図1に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を添付する。

以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ヤナギ属、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属
-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属-ムクノ
キ、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科
-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オ
オバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

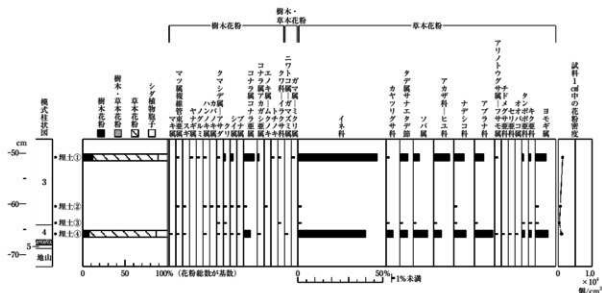


図1 柳下遺跡埋戻1における花粉ダイアグラム

(2) 花粉群集の特徴 (図1)

埋土①(3層)では、草本花粉の占める割合が極めて高く、イネ科が優勢し、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、ナデシコ科、アブラナ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属などが出現する。樹木花粉は、コナラ属コナラ亜属を主にシイ属、クリ、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。

埋土②(3層)と埋土③(3層)は、花粉密度は極めて低く、ほとんど検出されない。

埋土④(4層)では、草本花粉の占める割合が極めて高く、イネ科を主にアブラナ科、ソバ属、ヨモギ属、ナデシコ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、カヤツリグサ科などが出現する。樹木花粉は、コナラ属コナラ亜属を主に、マツ属複雑維管束亜属が主に低率に出現する。

花粉が200個以上計数できた埋土①、埋土④といえども、自然状態の堆積土壤に比べ、花粉密度が低く、草本花粉に比べ樹木花粉の占める割合が極めて低い。このことは、自然状態とは異なる閉塞された堆積環境にあったことを示している。

5 考察

分析した埋土1試料では、花粉密度は少ないものの、埋土①(3層)と埋土④(4層)から花粉が検出された。いずれも草本類のイネ科、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が出現する。これらは人里植物ないし畑雑草であることから、遺構の周囲でソバなどの畑作が営まれていた可能性が示唆される。また、タデ属サナエタデ節の出現から、周囲で水辺の草本であるミゾソバなどが生育していたと推定される。

一方、埋土自体の堆積環境を考えた場合、樹木花粉の割合が少ないことから、基本的に閉塞された状態にあったことが示唆される。また、ソバ属が自然状態よりも高率で出現すること、イネ科、ソバ属、アカザ属-ヒユ科、アブラナ科などの食用植物が検出されていることなどから、糞便堆積の可能性が考えられる。ただし、寄生虫卵が検出されていないため、断定することはできない。

検出された樹木花粉から、周辺地域にはコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が分布していたことが推定される。

<引用・参考文献>

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
高倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p。
中村純 (1973) 花粉分析。古今書院。p.82-110。
中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究。13。p.187-193。
中村純 (1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30。
中村純 (1980) 日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p。

II 寄生虫卵分析

1 分析目的

柳下遺跡において検出された埋壺1から採取した土壌について、寄生虫卵分析を実施することにより、糞便堆積物である可能性を検討する。

2 分析試料

分析試料は、花粉分析と同様、柳下遺跡の埋壺1より採取された埋土①（3層、褐色粘質土）、埋土②（3層、褐色粘質土）、埋土③（3層、褐色粘質土）、埋土④（4層、赤褐色弱粘質土）の4試料である。

3 分析方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法で砂粒を分離
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）
- 5) 水洗後染色。グリセリンゼリーで封入し各々標本作製
- 6) 検鏡は、プレパラート作製後、直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

4 分析結果

埋壺1のいずれの試料においても、寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されなかった。

5 考察

分析した埋壺1試料では、寄生虫卵が検出されなかった。ただし、寄生虫卵が検出されない理由として、寄生虫卵が分解されてしまった、埋壺の中を浚ってから廃棄したなどの可能性も考えられるため、糞便堆積物（肥溜め）であった可能性も否定できない。

なお、花粉分析において埋土④（4層）と埋土①（3層）からソバ、イネ科などの花粉が検出されていることから、遺構の周辺は畑地であったとみられ、人糞施肥が行われていた可能性が考えられる。

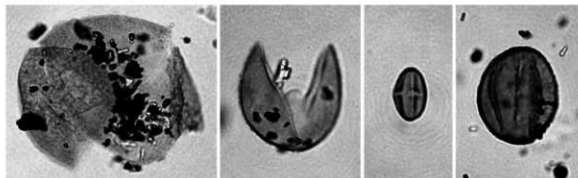
<参考文献>

- Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物。医動物学。新版臨床検査講座。8。医歯薬出版。p.9-55.
- 金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊一。奈良国立文化財研究所。p.14-15.
- 金原正明（1999）寄生虫。考古学と動物学。考古学と自然科学。2。同成社。p.151-158.

表1 柳下遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果

分類群	学名	和名	埋炭1			
			3層			4層
			埋土①	埋土②	埋土③	埋土④
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen		樹木花粉				
<i>Podocarpus</i>		マキ属				1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	2	4		2
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ		5		2
<i>Salix</i>		ヤナギ属	1			
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ	1			
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1	1		1
<i>Betula</i>		カバノキ属		1		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ	1	1	2	1
<i>Castanea crenata</i>		クリ	3	4	1	1
<i>Castanopsis</i>		シイ属	5	7		2
<i>Fagus</i>		ブナ属		2		1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	16	1		10
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	3			1
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		1		
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ	1			
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	2		2	
<i>Sambucus-Viburnum</i>		ニワトコ属-ガマズミ属				1
Nonarboreal pollen		草本花粉				
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属-ミクリ属	1			
Gramineae		イネ科	125	7	21	106
<i>Oryza type</i>		イネ属型	1			
Cyperaceae		カヤツリグサ科	2		1	11
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節	13		2	12
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	9		2	22
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	25		2	12
Caryophyllaceae		ナデシコ科	16	1	1	19
Cruciferae		アブラナ科	15		4	29
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属-フサモ属	1			1
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科				1
Apiioideae		セリ亜科				1
<i>Plantago</i>		オオバコ属				1
Lactuicoideae		タンポポ亜科	3		1	4
Asteroidaeae		キク亜科	3		1	4
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	17	16	4	20
Fern spore		シダ植物胞子				
Monolate type spore		単条溝胞子	11		3	21
Trilate type spore		三条溝胞子	22	2	3	21
Arboreal pollen		樹木花粉	34	27	3	22
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	2	0	2	1
Nonarboreal pollen		草本花粉	231	24	39	243
Total pollen		花粉総数	267	51	44	266
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	1.3	6.2	3.3	9.7
			×10 ³	×10 ²	×10 ²	×10 ²
Unknown pollen		未同定花粉	5	5	3	6
Fern spore		シダ植物胞子	33	2	6	42
Charcoal fragments		微細炭化物	(-)	(++)	(-)	(-)

柳下遺跡の花粉・胞子

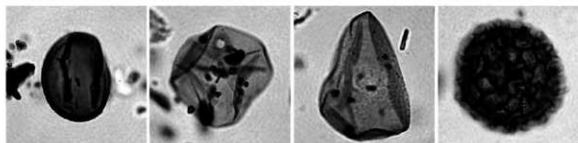


1 マツ属樹脂管束虫属

2 スギ

3 クリ

4 コナラ属コナラ亜属

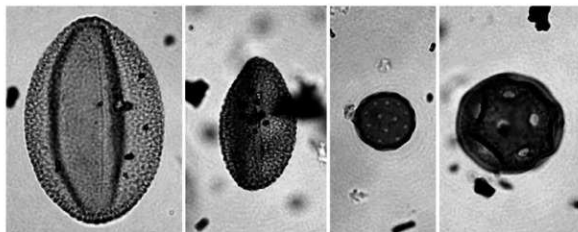


5 コナラ属アカガシ亜属

6 イネ科

7 カヤツリグサ科

8 タデ属サナエタデ節

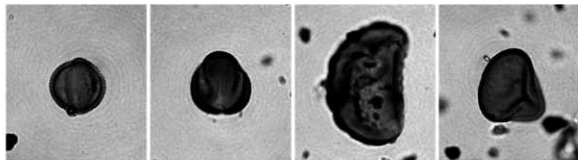


9 ソバ属

10 ソバ属

11 アカザ科-ヒユ科

12 ナデシコ科



13 アブラナ科

14 ヨモギ属

15 シダ植物単条溝胞子

16 シダ植物三条溝胞子

— 10 μ m

I 花粉分析

1 分析目的

今市遺跡において検出された土坑から採取した土壌について、花粉分析を実施することにより、土壌が堆積した時期の遺跡周辺の植生環境、遺構周辺の局地的な植生の推定を行う。

2 分析試料

分析試料は、中世から近世の集落跡である2地区SK1より採取された埋土（1層、黒褐色砂質土）と周辺土（黄灰色粘土）の2試料である。

3 分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で糠などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているものの、個体変化や類似種もあるため総じてイネ属型とした。

4 分析結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉13、シダ植物胞子2形態の計33である。これらの学名と和名および粒数を分析結果として表1に示す。花粉数が200個以上計数できた埋土については、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを作成し図1に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を添付する。

以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管東亜属、スギ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、アカメガシワ、ムクロジ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵

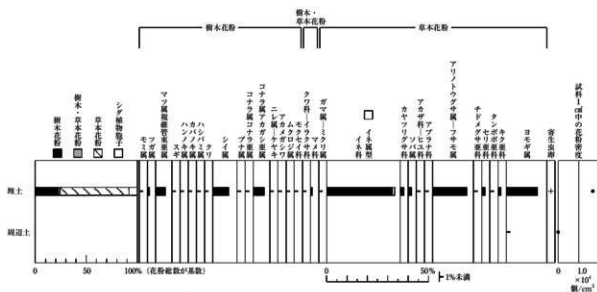


図1 今市遺跡2地区SK1における花粉ダイアグラム

(2) 花粉群集の特徴

1) 埋土 (1層)

花粉密度が高く、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ科を主に、アリノトウグサ属-フサモ属、ヨモギ属などが出現する。アリノトウグサ属-フサモ属は形態からアリノトウグサ属である。また、ソバ属、イネ属型も出現する。樹木花粉では、シイ属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複雑管束亜属などが出現する。

2) 周辺土

花粉密度が極めて低く、草本花粉のヨモギ属が検出されるのみである。

5 考察

2地区SK1埋土(1層)は、花粉密度が高く、樹木花粉も検出されており、自然状態の花粉組成を示していると言える。その中で、ソバ属の花粉が検出されていることから、遺構の周辺ではソバを主とする畑が営まれていたと推定される。また、イネ科、ヨモギ属、アリノトウグサ属-フサモ属(形態からアリノトウグサ属)などの畑雑草の花粉が多く出現していることから、畑の周囲にはこれらの雑草が繁茂していたと考えられる。なお、イネ科については、畑でムギ、ヒエ、アワなどの雑穀類が栽培されていた可能性も考えられる。

周辺土は花粉密度が極めて低かった。この理由として、乾燥的な環境下にあったため、花粉化石が分解されて残存しなかった可能性が考えられる。

周辺地域には、シイ属、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹、アカマツ(マツ属複雑管束亜属)の二次林が分布していたことが推定される。

<引用・参考文献>

- 金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。60p。
中村純(1973)花粉分析。古今書院。p.82-110。
中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究。13。p.187-193。
中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第10号。p.21-30。
中村純(1980)日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第13集。91p。

II 寄生虫卵分析

1 分析目的

今市遺跡において検出された2地区SK1から採取した土壌について、寄生虫卵分析を実施することにより、糞便堆積物である可能性を検討する。

2 分析試料

分析試料は、今市遺跡で中世から近世の集落跡である2地区SK1より採取された埋土（1層、黒褐色砂質土）と周辺土（黄灰色粘土）の2試料である。

3 分析方法

微化石分析法を基本に以下のように行う。

- 1) サンプルを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法で砂粒を分離
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置（2・3度混和）
- 5) 水洗後染色。グリセリンゼリーで封入し各々標本作製
- 6) 検鏡は、プレパラート作製後、直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。

4 分析結果

1) 埋土（1層）

鞭虫卵がわずかに検出される。鞭虫 *Trichuris (trichiura)* 卵の大きさは、 $50 \times 30 \mu\text{m}$ でレモン形あるいは岐阜卓ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり生野菜や生水、汚染された食器などにより経口感染する。

2) 周辺土

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

5 考察

2地区SK1埋土（1層）で、鞭虫卵がわずかに検出された。花粉分析において2地区SK1の周辺にはソバなどの畑の分布が推定されたことから、わずかに検出された寄生虫卵は、人糞施肥によりもたらされた可能性が考えられる。

<参考文献>

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物。医動物学。新版臨床検査講座。8。医歯薬出版。p.9-55.

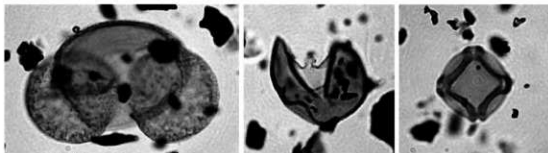
金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊一。奈良国立文化財研究所。p.14-15.

金原正明（1999）寄生虫。考古学と動物学。考古学と自然科学。2。同成社。p.151-158.

表1 今市遺跡における花粉・寄生虫卵分析結果

学名	分類群	2地区 SK 1	
		埋土	周辺土
Helminth eggs	寄生虫卵		
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵	1	
Total	計	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.8	0.0
		×10	
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉		
<i>Abies</i>	モミ属	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	4	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属椎輪管束亜属	18	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1	
<i>Abies</i>	ハンノキ属	2	
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	2	
<i>Castanea crenata</i>	クリ	3	
<i>Castanopsis</i>	シイ属	30	
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	20	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ	2	
<i>Mallotus japonicus</i>	アカメガシワ	2	
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属	2	
Oleaceae	モクセイ科	2	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3	
Leguminosae	マメ科	4	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属	1	
Gramineae	イネ科	123	
<i>Oryza type</i>	イネ属型	4	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	7	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	6	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	
Cruciferae	アブラナ科	2	
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属	64	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1	
Apioideae	セリ亜科	6	
Lactuoidaeae	タンポポ亜科	1	
Asteroidaeae	キク亜科	5	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	58	1
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	2	
Trilate type spore	三条溝胞子	31	
Arboreal pollen	樹木花粉	94	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	7	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	280	1
Total pollen	花粉総数	381	1
Pollen frequencies of 1cm ³	試料1cm ³ 中の花粉密度	1.7	1.6
		×10 ⁴	×10
Unknown pollen	未同定花粉	14	1
Fern spore	シダ植物胞子	33	0
Charcoal fragments	微細炭化物	(++)	(-)

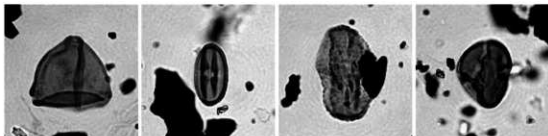
今市遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵



1 マフ属擬維管束亜属

2 スギ

3 ハンノキ属

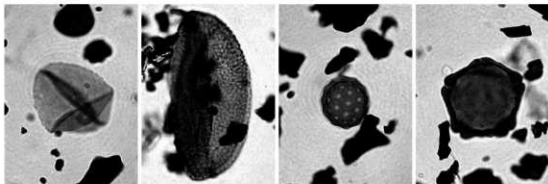


4 カバノキ属

5 シイ属

6 コナラ属コナラ亜属

7 コナラ属アカガシ亜属

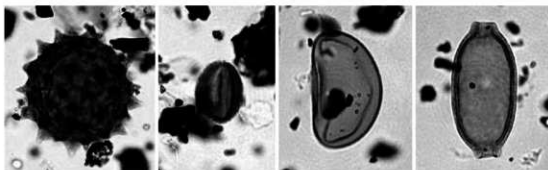


8 イネ科

9 ソバ属

10 アカサ科-ヒユ科

11 アリノトウサ属
-フサモ属



12 キク亜科

13 ヨモギ属

14 シダ植物単条溝孢子

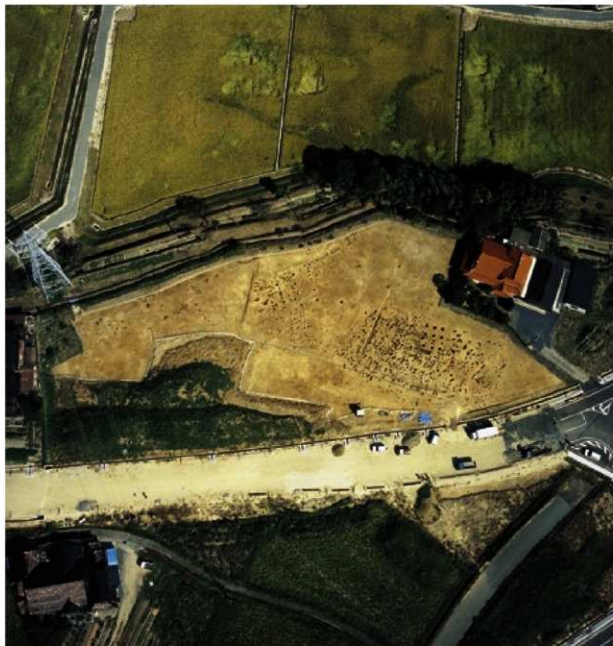
15 鞭虫卵

— 10 μm

柳下遺跡図版



北上空から両遺跡を望む



調査区全景（南から）



1地区全景（南から）



2地区全景（南から）



SD 1・2 と掘立柱建物群 (南から)



SB 1 と周辺遺構 (南から)



SB 1 完掘状況 (北から)



SP6 柱痕検出状況 (南から)



SP7 柱痕検出状況 (南から)



SD 1 完掘状況 (南東から)



SD 2 完掘状況 (東から)



SD7 検出状況 (東から)



SD8 完掘状況 (南から)



SK1 遺物出土状況 (北から)



SK1 完掘状況 (北から)



SK2 遺物出土状況 (西から)



SK2 完掘状況 (西から)



SK3 遺物出土状況 (北から)



SK3 完掘状況 (北から)

図版 6



SK4 遺物出土状況（北から）



SK4 完掘状況（北から）



SK5 遺物出土状況（東から）



SK5 完掘状況（東から）



SK8 検出状況（東から）



SK9 検出状況（南から）



SK10 土層断面（南東から）



SK10 完掘状況（南から）



SK102 完掘状況 (南東から)



SK107 遺物出土状況 (北から)



SK120 土層断面 (東から)



SK120 遺物出土状況 (東から)



SK122 遺物出土状況 (西から)



SK124 遺物出土状況 (東から)



SK126 遺物出土状況 (南東から)



SK130 遺物出土状況 (南西から)

図版 8



SK202 遺物出土状況① (東から)



SK202 遺物出土状況② (東から)



埋甕1 半截状況 (南東から)



埋甕1 出土状況 (南東から)



SX7 検出状況 (西から)



SX7 遺物出土状況 (東から)



SP29 遺物出土状況 (北から)



SP259 遺物出土状況 (西から)



SP326 遺物出土状況 (南から)



SP434 遺物出土状況 (西から)



SP452 遺物出土状況 (西から)



SP495 遺物出土状況 (北から)



SP516 遺物出土状況 (南から)



SP781 遺物出土状況 (西から)



SP849 遺物出土状況 (北から)



SP1057 遺物出土状況 (東から)



SP1129 遺物出土状況 (東から)



SP1156 遺物出土状況 (東から)



SP1405 遺物出土状況 (西から)



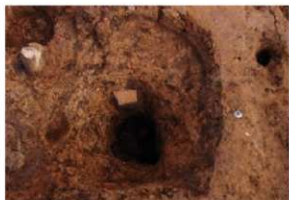
SP1421 遺物出土状況 (北西から)



SP1423 遺物出土状況 (東から)



SP1470 遺物出土状況 (南から)



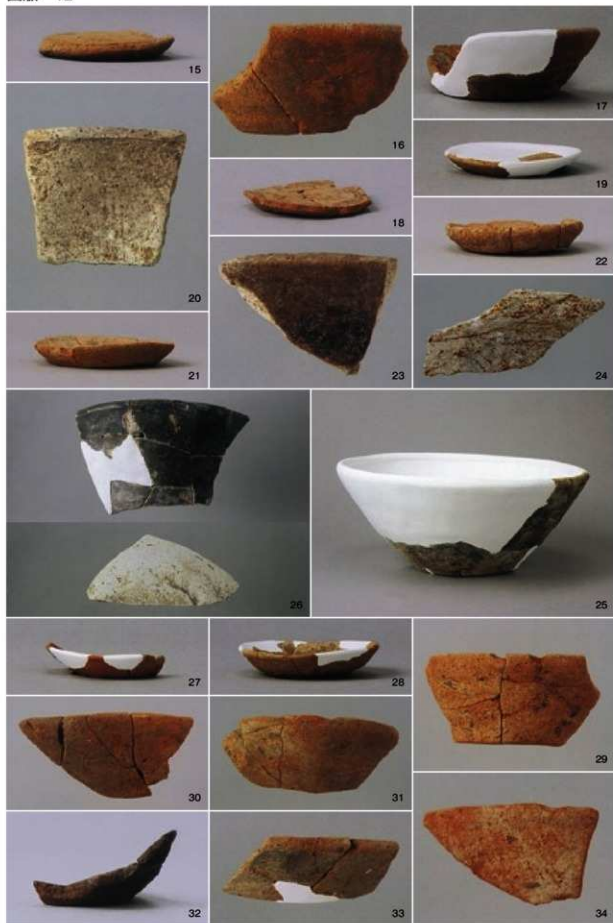
SP1501 遺物出土状況 (西から)



SP1503 遺物出土状況 (南から)



出土土器①





出土土器③







出土土器⑥、石製品、金属製品、木製品

今市遺跡図版



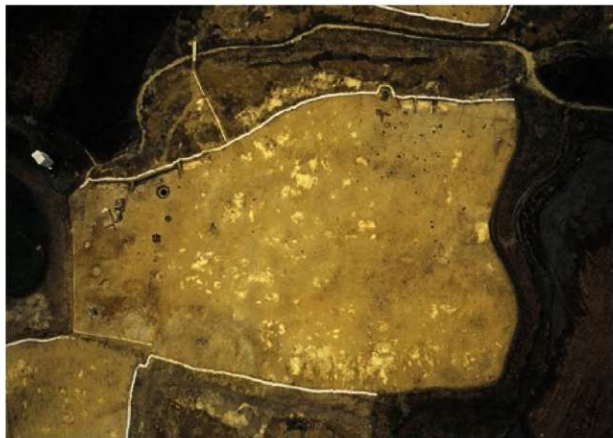
西上空から両遺跡を望む



調査区全景（北東から）



1地区全景（西から）



2地区全景（北から）



3地区全景 (北から)



SB2 完掘状況 (北西から)



SK1 遺物出土状況 (南から)



SK2 遺物出土状況 (北から)



SK3 遺物出土状況 (西から)



SK4・5 検出状況 (西から)



SK6 遺物出土状況 (北から)



SK7 遺物出土状況 (西から)



SK8 遺物出土状況 (西から)



SK16 検出状況 (北から)



SK17 検出状況 (南から)



SK18 検出状況 (南から)



SE1 出土状況① (東から)



SE1 出土状況② (南から)



包含層 1 土器溜り出土状況① (南から)



包含層 1 土器溜り出土状況② (南から)



包含層 1 土器溜り出土状況③ (南から)



包含層 3 土器溜り出土状況 (南から)



出土土器①



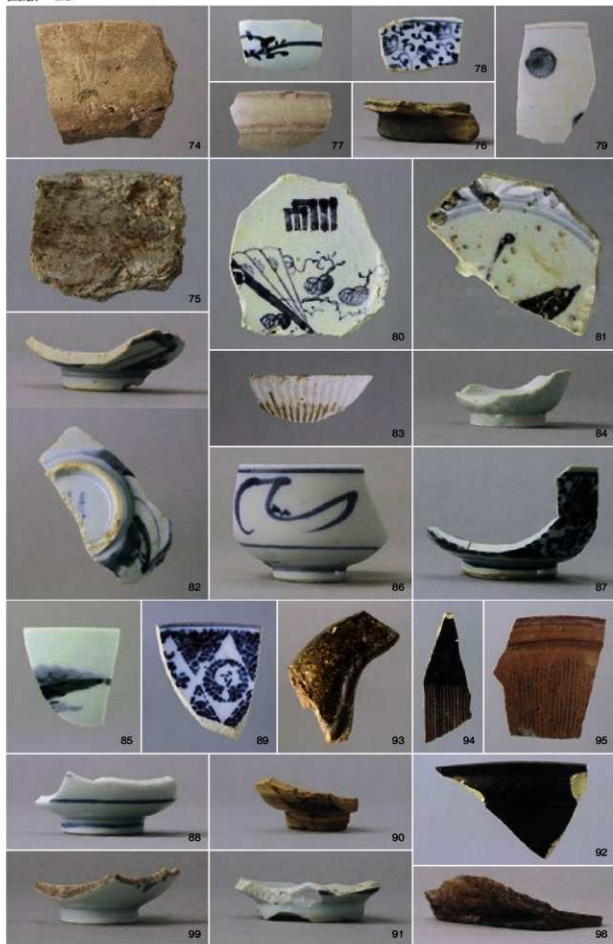
出土土器②



出土土器③



出土土器④





出土土器⑥、石器、木製品、金属製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	やなぎしたいせき・いまいちいせき
書名	柳下遺跡・今市遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第61集
編集著者名	城島史朗 上土井宏典 河崎浩司 安村隆博 藤原彰久 岩崎仁志
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2007年3月26日（平成19年3月26日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柳下遺跡	山口県 山陽小野田市 大字厚狭	35216		34°3'57"	131°10'43"	20060605) 20061013	3.700	ほ場整備
今市遺跡	山口県 山陽小野田市 大字厚狭	35216		34°3'39"	131°10'35"	20060927) 20061201	5.220	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
柳下遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑 柱穴	28棟 5条 59基 約1500個	土師器 瓦質土器 陶磁器 石製品 鉄製品	主屋4棟を含む中世の掘立柱建物群屋敷墓数基
今市遺跡	集落跡	近世	掘立柱建物跡 井戸 土坑	2棟 1基 20基	弥生土器 土師器 瓦質土器 陶磁器 石製品（石鏃）	覆屋を伴う石積みの井戸 焼土坑

要約	<p>柳下遺跡は、中世中期から近世初頭までの時期に営まれた集落跡であると考えられる。3×2間、面積30～60㎡程度の主屋を中心に、4期にわたって屋敷群が形成されたと思われる。また、中世後期に形成された屋敷群では、建物の傍らに屋敷墓が設けられた形跡がある。主屋の規模や屋敷墓が付属していることから、自立的農民層の居住域であると考えられる。出土遺物はほとんどが土師器で、次いで瓦質土器が多い。輸入磁器は少なく破片が多い。</p> <p>今市遺跡は、近世から近代初頭にかけての時期に営まれた集落跡であると考えられる。後世の開発による削平を受け、全容は明確にはつかめないが、井戸や土坑墓をもつ比較的規模の大きな集落の一部である可能性もある。また、縁辺部の遺物包含層からは弥生土器が検出されていることから、東側に広がる丘陵地には、弥生時代の集落の存在が期待される。</p> <p>今回の調査に於いて、厚狭川左岸地域、特に厚狭盆地北東端地域の中世から近世の様子を知る手がかりを得た。</p>
----	---

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第61集

柳 下 遺 跡
今 市 遺 跡

2007年3月

編集・発行 財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 大村印刷株式会社
〒747-0849 山口県防府市西仁井令1-21-55